さて、何故にヴ゛ール氏がこの物語を氣違ひ沙汰であると考へて、極力その事實を隱蔽しようとしてゐるのか、私には想像が付かない。世間ではヴ゛ール夫人を善良の亡靈と認め、彼女の會話は實に神の如きものであつたと信じてゐるのではないか。彼女の二つの大いなる使命は、逆境にあるバーグレーヴ夫人を慰藉すると共に、信仰の話で彼女を力附けようとした事と、疎遠になつてゐた詫びを言ひに來た事とであつた。また假りに、何か複雜の事情とか利益問題とかいふ事を拔きにして、バーグレーヴ夫人がヴ゛ール夫人の死を早く知つて、金曜の晝から土曜の晝までにこんな筋書を作りあげたものと想像して御覽なさい。そんな眞似をするやうな彼女であつたらば、もつと機智があつて、もつと生活が豐で、しかも他人が認めてゐるよりももつと陰險な女でなければならない筈である。

私は幾度かバーグレーヴ夫人に向つて、確に亡靈の上着に觸れたかどうかを糺してみたが、いつも彼女は謙遜して、「若しも私の感覺に間違ひがないならば、私は確にその上着に觸れたと思ひます。」と答へるのであつた。それから又、亡靈がその手で膝を叩いた時に、確にその音を聞いたかと訊ねると、彼女は聞いたかどうかはつきりとは記憶してゐないが、その亡靈の肉體は自分と全く同じものであつたと言つた。

「それですから、私の見たのはあの人ではなくて、あの人の亡靈であつたと言はれゝば、今私と話してゐるあなたも、私には亡靈かと思はれます。あの時の私には怖ろしいなどといふ感じは些つとも致しませんで、どこまでもお友達の積りで家へ入れて、お友達の積りで別れたのでございます。」と彼

女は言つた。又、彼女は「私は別にこの話を他人に信じて貰はうと思つて、一錢の金も使つた覺えもございませんし、又、この話で自分が利益を得ようとも思つてゐません。寧ろ自分では、長い間餘計な面倒が殖えただけだと思つてゐます。不圖したことでこの話が世間へ知れるやうにならなかつたらこんなに擴まらずに濟みましたのに……。」と言つてゐた。

併し今では、彼女もこの物語を利用して、出來るだけ世の人々のためになるやうに盡さうと、ひそかに考へて來たと言つてゐる。さゐして、それ以來、彼女はその考へを實行した。彼女の話による と、ある時は三十哩も離れた所からこの物語を聞きに來た紳士もあり、また或時は一時に部屋一ぱいに集まつて來た人々に向つてこの物語を話して聞かせたこともあつたさうである。兎に角に、ある特殊な紳士達はバーグレーヴ夫人の口から皆直接にこの物語を聞いたのであつた。

このことは私を非常に感動させたと共に、私はこの正確なる根底のある事實について大いに滿足を感じてゐる。さうして、私達人間といふものは、確實な見解を持つことが出來ないくせに、何故に事實を論爭し合つてゐるのか、私には不思議でならない。唯バーグレーヴ夫人の證明と誠實とだけは、いかなる場合にも疑ふことの出來ないものであらう。

— 終 —

ラッパッチーニの娘

（ホーソーン）

――アウベバンの作から――

一

遠い以前のことである。ヂョヴァンニ・グァスコンティといふ一人の青年が、パドゥウアの大學で學問の研究をつゞけようとして、伊太利のずつと南部の地方から遙々と出て來た。

財嚢の甚だ乏しいヂョヴァンニは、ある古い屋敷の上の方の陰氣な部屋に下宿を取ることにした。これは或るパドゥウアの貴族の邸宅でゝもあつたらしく、その入口の上には今はすつかり古ぼけてしまつた或る一家の紋章が表はれてゐるのが見られた。自國伊太利の有名な偉大な詩を知つてゐた旅の青年は、この屋敷の家族の祖先の一人、恐らくその所有者たる人は、ダンテの筆によつて、彼のインフェルノの煉獄の永劫呵責の相伴者として描き出されたものであることを、想ひおこされるのであつた。これらの回想や聯想が、はじめて故郷を去つた若者には極めてあり勝ちの斷腸の思ひと結び付いて、ヂョヴァンニは思はず溜息をついた。さうして、物さびしい粗末な部屋の中をあちらこちらと見廻した。

「おや、あなた！」と、リザベッタ老婦人は、この青年の人柄のひどく立派なのに打たれて、この部屋を住み心のよいやうに見せようと努めながら聲をかけた。「お若い方の胸から溜息などが出るとは、これはどうしたことでございませう。あなたはこの古い屋敷を陰氣だとでも思つていらつしやるのですか。では、どうぞその窓から首を出して御覽ください。ナポリと同じやうにきら〳〵した日の光が拜まれますよ。」

ヂョヴァンニは、老婦人の言ふがまゝに只機械的に窓から首を突き出して見たが、パドゥウアの日光が南伊太利の日光のやうに陽氣だとは思はれなかつた。とは言へ、日光は窓の下の庭を照らして、さまゞの植物に惠みある光を浴せてゐた。その植物はまだ一方ならぬ注意を以て育てられたものゝやうに見えた。

「この庭は、お家のものですか。」と、ヂョヴァンニは訊いた。

「ほんたうに、貴方。あんな植物なぞはどうか出來ないで、それよりももつとよい野菜でも出來ましたらば……。」と、老いたるリザベッタ婦人は答へた。「いゝえ、さうではございません。あの庭はヂャコモ・ラッパッチー樣が、御自身の手で作つておいでになります。あの先生は名高いお醫者さんで、きつと遠いナポリの方までもお名前が響いてゐることゝ思ひます。先生はあの植物を大層強い魅力を持つた藥に蒸溜なさるとかいふ噂で、折々に先生が働いていらつしやるのが見えます。又どうかすると、お嬢樣までが庭に生えてゐる珍しい花を集めてゐるのが見えますよ。」

老婦人は、この部屋の樣子について、もう何も彼も言ひ盡してしまつたので青年の幸福を祈りながら出て行つた。

ヂョヴァンニはなんの所在もないので、窓の下の庭園をいつまでも見下してゐた。その庭の樣子で、このバドゥウアの植物園は、伊太利はおろか、世界の何處よりも早く作られたものゝ一つであると判斷した。若しさうでないとすると、尤もこれは餘り當にはならないが、曾て富豪の一族の娛樂場か何かであつたかも知れない。庭園の中央には稀に見るほどの巧みな彫刻を施した大理石の噴水の跡がある。それも今は滅茶苦茶に壞れてしまつて、その殘骸は殆ど原形を止めぬ程になつてゐるが、その水だけは今も相變らず噴き出して、日光にきら〳〵と輝いてゐた。その水のさら〳〵と流れ落ちる小さい響きは、上にゐる青年の部屋の窓までも聞えてくる。この噴水が永遠不滅の靈魂であつて、その周圍の有爲轉變にはいさゝかも氣をとめずに絶えず歌つてゐるものゝやうに思はれるのであつた。卽ち、ある時代には大理石を以て泉を造り、又ある時はそれを毀つて地上に投げ出してしまふやうな、有爲轉變の姿も知らぬやうに——。

水の落ちてゆく池の周圍に、種々な植物が生ひ繁つてゐるのを見ると、大きい木の葉や、美しい花の營養には、十分なる水分の供給が大切であるやうに思はれた。池の中央にある大理石の花瓶の中に、特に際立つて眼に付く一本の灌木があつた。その木には無數の紫の花が咲いて、花はみな寶石のやうな光澤と華麗とを具へてゐた。かういふ花が一團となつて目ざましい壯觀を現出し、たとひ日

光がこゝに至らずとも、十分に庭を明るく照らすに足るかのやうであつた。

土のある處には、總て草木が植ゑられてある。それらはその豐麗なることに於いて彼の灌木にやゝ劣つてゐるとしても、なほ一方ならざる丹精の跡があり〳〵と見られた。又それらの草木は皆それぞれに特徴を有してゐて、それがその培養者たる科學者にはよく知られてゐるらしく、あるものは多くの古風な彫刻を施した壺のうちに置かれ、又あるものは普通の植木鉢のうちに植ゑられてゐた。それらのあるものは蛇のやうに地上を這ひまはり或は心のまゝに高く這ひあがつてゐた。又あるものはパータムナスの像のまはりを花環のやうに取り卷いて、布のやうに垂れ下つた枝はその像をすつかり掩つてゐた。それ等はまこと立派に配列されてゐて、彫刻家にとつてはこの上もない好い研究材料であらうと思はれた。

ヂョヴァンニが窓の側に立つてゐると、木の葉の茂みのうしろから物の摺れるやうな音がきこえたので、彼は誰か庭のうちで働いてゐるのに氣が付いた。間もなくその姿が現はれたが、それは普通の勞働者ではなく、黑の學者服を身に纏つた、脊丈の高い、痩せた、土氣色をした、弱々しさうに見える男であつた。彼は中年を過ぎてゐて、髮は半白でやはり半の薄い髯をは生やしてゐたが、その顏には智識と敎養のあとが著るしく目立つてゐた。但しその青春時代にも、溫かな人情味などは決して表はさなかつたであらうと思はれるやうな人物であつた。

何物も及ばぬほどの熱心をもつて、この科學者的の庭造師は、順々にすべての灌木を試驗して行つ

た。彼はそれらの植物のうちに潜んでゐる性質を檢べ、その創造的原素の觀察を行ひ、何故にこの葉はかういふ形をしてゐるか、彼の葉はあゝいふ形をしてゐるか、又そのためにそれらの花が互ひに色彩や香氣を異にしてゐるのであると言ふやうなことを發見しようとしてゐるらしい。而も彼自身は、植物に就いてこれ程の深い造詣があるにも拘はらず、彼とその植物との間には、少しの親しみも無いらしく、寧ろ反對に、彼は植物に觸れることも、その匂ひを吸ふことも、全く避けるやうに注意を拂つてゐた。それがヂョヴァンニに甚だ不快な印象を與へたのであつた。

科學者的庭造師の態度は、たとへば猛獸とか、毒蛇とか、惡魔とかいふものゝやうな、少しでも氣を許したらば恐ろしい災害を與へるやうな、有害な影響を及ぼすもののうちを歩いてゐる人のやうであつた。庭造りといふやうなものは、人間の勞働のうちでも最も單純な無邪氣なものであり、また人類のまだ純潔であつた時代の祖先等の勞働と喜悅とであつたのであるから、今この庭を造る人のいかにも不安らしい樣子を見てゐると、青年は何とはなしに一種の怪しい恐怖をおぼえた。それでも、この庭園を現世のエデンの園であるといふのであらうか。その害毒を知りながら自ら培養してゐるこの人は、果してアダムであらうか。

この疑ふべき庭造師は灌木の枯葉を除き、生ひ繁れる葉の手入れをするのに、厚い手袋をはめて兩手を保護してゐた。彼の裝身具は、單に手袋ばかりではなかつた。庭を歩いて、大理石の噴水のほとりに紫の色を垂れてゐる彼の甲ざましい灌木の傍に來ると、彼は一種のマスクでその口や鼻を掩つ

た。この木のあらゆる美しさは唯その恐ろしい害毒を隱してゐるかのやうに——。それでもなほ危險であるのを知つてか、彼は後退してマスクを外し、聲をあげて呼んだ。尤もその聲は弱々しく、身の內部に何か病氣をつてゐる人のやうであつた。

「ベアトリーチェ、ベアトリーチェ！」

「はい、お父さん。何御用……。」と、向うの家の窓から聲量の豐な若やいだ聲が聞えた。その聲は熱帶地方の日沒のごとくに豐かで、ヂョヴァンニは何とは知らず、紫とか眞紅の色とか、又は非常に愉快な或る香氣をもふと心に思ひ浮べた。

「お父さん、お庭ですか。」

「おゝ、さうだよ、ベアトリーチェ。」と、父は答へた。「お前。ちよつと手をかしてくれ。」

彫刻の模樣のついてゐる入口から、この庭園のうちへ最も美しい花にも決して劣らない豐かな風趣を具へた、太陽のやうに美しい一人の娘の姿があらはれた。その手には眼も醒めるばかりの、もうこれ以上の強い色彩はとても見るに堪へないと思はれるやうな、非常に濃厚な色彩の花を持つてゐた。彼女は生命の力と健康の力と精力とが充滿してゐるやうに見えた。これらの特質はその多量を彼女の處女地帶の內に制限せられ、壓縮せられ、なほ且つ強く引緊められてゐるのである。

併し庭を見おろしてゐるうちに、ヂョヴァンニの考へは確に一種の病的になつたであらう。この美しい未知の人が彼にあたへた印象は、更に一つの花が咲き出したかのやうであつた。さうして、この

人間の花はそれらの植物の花と姉妹で、同じやうに美しく、更にそれよりも遙かに美しく、而もなほ手袋をはめてのみ觸れ得べく、またマスクなしには近づくべからざる花のやうであつた。ベアトリーチェが庭の小徑に降りて來た時、彼女はその父が極めて用意周到に避けて來た幾つかの植物の匂ひを平氣で吸ひ、又平氣でそれに手も觸れてゐるのが見えた。

「さあ、ベアトリーチェ。」と、父は言つた。「御覽、私達の一番大切な寶のために、爲なければならない仕事が澤山ある。私は弱つてゐるから、あまり無闇にそれに近づくと、命を失ふ虞れがある。それで、この木はお前ひとりに任せなければならないと思ふが……。」

「そんなら、私は喜んで引受けます。」と、再び美しい聲で叫びながら、彼女は彼の目ざましい灌木にむかつて腰を屈め、それを抱くやうに兩腕をひろげた。「えゝ、さうですよ。ねえ、私の立派な妹さん。あなたを育てゝゆくのは、このベアトリーチェの役目なのです。それですから、あなたの接吻と——それから妾の命のその芳ばしい呼吸とを、私に下さらなければならないのですよ。」

その言葉にあらはれたやうな優しさを、その態度の上にもあらはして、彼女はその植物に必要と思はれるだけの十分の注意を以て忙しく働きはじめた。

ヂョヴァンニは高い窓に靠れかゝりながら、自分の眼をこすつた。娘がその愛する花の世話をしてゐるのか、又は花の姉妹がたがひに愛情を示し合つてゐるのか、まつたく判らなかつた。而もこの光景は直ちに終つた。ドクトル・ラッパッチーニがその庭造りの仕事を終つたのか、あるひはその戀眼

がヂョヴァンニのあることを見て取つたのか。その何れかは知れないが、父は娘の手をとつて庭を立去つてしまつた。

夜は已に近づいてゐた。息詰まるやうな臭氣が庭の植物から發散して、明けてある窓から忍び込むやうであつた。ヂョヴァンニは窓を閉めて寢床に這入つて、美しい花と娘のことを夢想した。花と娘とは別々のものであつて、而も同じものである。さうして、その兩者には何か不思議な危險が含まれてゐた。

併し朝の光りは、太陽が沒してゐる間に、又は夜の影のあひだに、或は曇り勝ちな月光のうちに生じたところの、どんな間違つた想像をも、あるひは判斷さへも、全く改めるものである。眠りから醒めて、ヂョンヴァンニが眞先の仕事は、窓をあけて彼の庭園をよく見ることであつた。それは昨夜の夢によつて、大いに神祕的に感じられて來たのであつた。早い朝日のひかりは花や葉に置く露を燦めかし、それらの稀に見る花にも皆それ〴〵に輝かしい美しさを與へながら、あらゆるものを何の不思議もない普通日常の事として見せてゐる。その光の中にあつて、この庭も現實の明かな事實として現はれた時、ヂョヴァンニは驚いて又いさゝか恥ぢた。この殺風景な都會のまん中で、こんな美しい贅澤な植物を自由に見おろすことの出來る特權を得たのを、青年は喜んだのである。彼はこの花を通じて自然に接することが出來ると、心ひそかに思つた。

見るからに病弱の、考へ疲れたやうな、ドクトル・ヂャコモ・ラッパッチーニも、又その美しい娘

も、今はそこには見えなかつたので、ヂョヴァンニは自分がこの二人に對して感じた不思議を、どの程度まで彼等の人格に負はすべきものか、又どの程度までを自分自身の奇蹟的想像に負はすべきものかを、容易に決定することが出來なかつた。併し彼はこの事件全體について、最も合理的の見解を下さうと考へた。

その日、彼はピエトロ・バクリオーニ氏を訪問した。氏は大學の醫科教授で、有名な醫者であつた。ヂョヴァンニはこの教授に宛てた紹介狀を貰つてゐたのである。教授は相當の年配で殆ど陽氣といつても好いやうな、一見快活の性行を有してゐた。彼はヂョヴァンニに食事を馳走し、殊にタスカン酒の一二罎をかたむけて、少しく醉が廻つてくると、彼は自由な樂しい會話でヂョヴァンニを愉快にさせた。ヂョヴァンニは雙方が同じ科學者であり、同じ都市の住民である以上、かならず互ひに親交がある筈だと思つて、よい機を見てドクトル・ラッパッチーニの名を言ひ出すと、教授は彼が想像してゐたほどには、こゝろよく答へなかつた。

「神聖なるべき仁術の教授が……。」と、ピエトロ・バグリオーニ教授は、ヂョヴァンニの問に答へた。「ラッパッチーニの如き非常に優れた醫者の、適當相當と思はれる賞讃に對して、それを貶すやうな事を言ふのは惡いことであらう。併し一方に於いて、ヂョヴァンニ君。君は舊友の子息である。君のやうな有望の青年が、この後あるひは君の生死を掌握するかも知れないやうな人間を尊敬するやうな、惡うに繼ぐを慫くのを歎詐しても好いか惡いかといふ點は自己の良心に對して、少しばかりそ

れに答へなければならない。實際わが尊敬すべきドクトル・ラッパッチーニは、唯一つの例外はあるが、おそらくこのバドゥウアばかりでなく、伊太利全國に於ける如何なる有能の士にも劣らぬ立派な學者であらう。併し醫者としてのその人格には、大いなる故障があるのだ。」

「どんな故障ですか。」と、青年は訊いた。

「醫者のことをそんなに穿鑿するのは、君は心身いづれかに病氣があるのではないかな。」と、教授は笑ひながら言つた。「だが、ラッパッチーニに關しては——僕は、彼をよく知つてゐるので、實際だと言ひ得るが——彼は人類などといふことよりも全然科學の事ばかりを心にかけてゐると言はれてゐる。彼に赴く患者は、彼には新しい實驗の材料として興味があるのみだ。彼の偉大な蘊蓄に、罌粟粒ぐらゐの知識を加ふるためにも、彼は人間の生命——就中、彼自身の生命、あるひはそのほかに彼にとつて最も親しい者の生命でも、犧牲に供するのを常としてゐるのだ。」

「私の考へでは、彼は實際畏るべき人だと思ひます。」と、心の中にラッパッチーニの冷靜な一向な智的態度を思ひ出しながら、ヂョヴァンニは言つた。「併し崇拜すべき教授であり、又まことに崇高な精神ではありませんか。それほどに科學に對して、精神的な愛好を傾け得る人が他にどれほどあるでせうか。」

「少くとも、ラッパッチーニの執つた見解よりは、治療術といふもつと健全な見解を執るのでなかつたら……。あゝ、神よ禁じ給へ。」と、教授はやゝ急き立つて答へた。「あらゆる醫學的效力は、我々

が植物毒劑と呼ぶもの、内に含蓄されてゐるといふのが、彼の理論である。彼は自分の手づから植物を培養して、自然に生ずるよりは遙に有害なる種々の恐ろしい新毒藥を作つたとさへ言はれてゐる。それらのものは彼が直接に手を下さずとも、永遠にこの世に禍するものである。醫者たる者がかくのごとき危險物を用ひて、豫想外よりも害毒の少い事あるのは、否定し得ないことである。時々に彼の治療が驚くべき偉效を奏し、あるひは奏したやうに見えたのは、我々も認めて遣らなければなるまい。しかしヂョヴァンニ君。打明けて言へば、もし彼が——正に自分が行つたと思はれる失敗に對して、嚴格に責任を負ふならば、彼は僅かの成巧の例に對しても、殆ど信用を受くるに足らないのである。まして、その成巧とても恐らく偶然の結果に過ぎなかつたのであらう。」

若しこの青年が、バグリオーニとラッパッチーニの間に專門的の爭ひが長く續いてゐて、その爭ひは一般にラッパッチーニの方が有利と考へられてゐたことを知つてゐたならば、バグリオーニの意見を大いに斟酌したであらう。若し又、讀者諸君がみづから判斷を下してみたいならば、バドゥウア大學の醫科に藏されてゐる兩科學者の論文を見るがよい。

ラッパッチーニの極端な科學研究熱に關して語られたところを、よく考へてみた後に、ヂョヴァンニは答へた。

「よく判りませんが、先生。あの人はどれほど醫術を愛してゐるか、私には判りませんが、確にあの人に取つてもつと愛するものがある筈です。あの人には、ひとりの娘があります。」

「はゝあ。」と、教授は笑ひながら叫んだ。「それで初めて君の祕密がわかつた。君はその娘のことを聞いたのだね。あの娘に就いてはバドゥウアの若い者はみな大騒ぎをしてゐるのだが、運好くその顏を見たといふ者は、まだほんの幾人も無いベアトリーチェ嬢については、私はあまりよく知らない。ラッパッチーニが自分の學問を彼女に十分に教へ込んだといふことと、彼女は若くて美しいといふ噂だが、已に教授の授の椅子に着くべき資格があるといふことと、唯それだけを聞いてゐる。恐らく彼女の父は、將來わたしの椅子を彼女のものにしようと決めてゐるのだらう。他にまだ詰まらない噂は二三あるが、言ふ價値もなく、聞く價値も無いことだ。では、ヂョヴァンニ君。赤葡萄酒の盃を乾し給へ。」

二

ヂョヴァンニは飲んだ酒にやゝ熱くなつて、自分の下宿へもどつた。酒のために、彼の頭はラッパッチーニと美しいベアトリーチェに就いて、いろ〳〵の空想を逞しうした。歸る途中で偶然に花屋のまへを通つたので、彼は新しい花束を一つ買つて來た。

彼は自分の部屋に上つて、窓の側に腰をおろしたが、自分の影が窓の壁の高さを超えないやうにした。それで、彼は殆ど發見される危險もなしに庭を見下すことが出來た。眼の下に人の影はなかつたが、彼の不思議な植物は日光に溫まりながら、時々に恰も同情と親しみとを表はすかのやうに、靜か

に首肯き合つてゐた。庭園の中央の壞れた噴水のほとりには、それを覆ふやうに群がる紫色の花をつけて、目ざましい灌木が生えてゐた。花は空中に輝き、それが池水の底に映じて再びきら〳〵と照り返すと、池の水はその強い反射で、色のついた光を帶びて溢れ出るやうにも見えた。

最初は前に言つたやうに、庭には人影がなかつた。しかし間もなく――この場合、ヂョヴァンニが半ば望み、半ば恐れた如く――人の姿が古風の模樣のある入口の下にあらはれた。さうして、植物の列をなしてゐる間を歩み來ながら、甘い香を食べて生きてゐたといふ古い物語のうちの人物のやうに、植物のいろ〳〵の香氣は彼女は吸つてゐた。再びベアトリーチェをみるに及んで、青年が一層驚いたのは、彼女がその記憶よりも遙かに美しいことであつた。彼女は太陽の光のうちに輝き、又ヂョヴァンニが密かに思つてゐた通り、庭の小徑の影の多いところを明るく照らすほどに、その人は光り輝いてゐるのであつた。

彼女の顏は前の時よりも、一層はつきりと現はれた。さうして彼は天眞爛漫な柔和な娘の表情に、いたく心を打たれた。こんな性質を彼女が所有してゐやうとは、彼の考へ及ばないところであつたので、彼女が一體どんな質の人であらうかと、彼は新たに想像してみるやうになつた。彼は忘れもせずに、この美しい娘と、噴水の下に寶石のやうな綺麗な花を咲かせてゐる灌木と、この兩者の類似點を再び觀察し、想像するのであつた。――この類似は、彼女の衣服の飾附けと、その色合の選擇とに因つて、ベアトリーチェが彌が上にも空想的氣分を高めたからであつた。

灌木に近づくと、彼女は恰も熱烈な愛情を有してゐるかのやうに、その兩腕を大きく開いて、その枝をひき寄せて、いかにも親しさうに抱へた。その親しさは、彼女の顏をその葉の中に隱し、きらめく縮れ毛は皆その花に混つてめ埋られてしまふ程であつた。

「妾の姉妹！　あなたの息をわたしに下さい。」と、ベアトリーチェは叫んだ。「わたしはもう、普通の空氣が忌になつたのですから。――さうしてあなたのこのお花を下さいな。わたしはきつと大事に枝を折つて、わたしの胸の側にちやんと附けて置きます。」

かう言つて、ラッパッチーニの美しい娘は灌木の最も美しい花の一輪をとつて、自分の胸に附けようとした。併しこの時、あるひは酒のためにヂョヴァンニの意識が混亂してゐたのかも知れないが、若しさうでないとすれば、實に不思議なことが起つた。小さい橙色の蜥蜴かカメレオンのやうな動物が小逕を這つて偶然にベアトリーチェの足もとへ近寄つて來たのである。ヂョヴァンニが見てゐるところは遠く離れてゐて、そんなに小さなものは到底見えなかつたであらうと思はれるが、併し彼の眼には、花の切口から一二滴の液體が蜥蜴の頭に落ちたと見えたのである。すると、その動物は忽ち荒々しく體をゆがめて、日光の下に動かなくなつてしまつた。ベアトリーチェはこの驚くべき現象をみて、悲しさうではあつたが格別に驚きもせず、しづかに十字を切つた。それから彼女は躊躇もせずに、その恐ろしい花を取つて自分の胸につけると、花はまた忽ちに紅となつて、殆ど寶石も同樣にきら〳〵と輝いて、この世の何物も與へられないやうな獨特の魅力を、その衣服や容貌に與へる

のであつた。ヂョヴァンニは吃驚して、窓のかげから差出してゐた首を急に引込めて、慄へながら獨り言を言つた。

「俺は眼が覺めてゐるのだらうか。意識を持つてゐるのだらうか。一體、あれは何だらう。美しいと言つて好いのか、それとも大變に怖ろしいと言ふのか。」

ベアトリーチェは何の氣も付かないやうに、庭をさまよひ歩きながらヂョヴァンニの窓の下へ近づいて來たので、彼女に刺戟された痛烈の好奇心を滿足させるためには、彼はそこから首を突き出さなければならなかつた。恰もその時に庭の垣根を越えて、一匹の美しい蟲が飛んで來た。恐らく市中を迷ひ暮らしてラッバッチーニの庭の灌木の強い香氣に遠くから誘惑されるまでは、どこにも新鮮な花を見出すことが出來なかつたのであらう。

この輝く蟲は花には降りずに、ベアトリーチェに心を惹かれてか、やはり空中をさまよつて彼女の頭のまはりを飛び廻つてゐた。これはどうしてもヂョヴァンニの見誤りに相違なかつたのであるが、兎も角も彼はかう想像したのである。ベアトリーチェが子供らしい樂みを以て蟲をながめてゐると、その昆蟲はだん〳〵に弱つて來て、その足下に落ちた。さうして、その光つてゐる羽を震はしてゐるかと見るうちに、たうとう死んでしまつた。それがどういふ譯であるのか、彼には判らなかつたが、恐らく彼女の息に觸れたがためであらう。ベアトリーチェは再び十字を切つて、蟲の死骸の上にかゞんで深い溜息をついた。

ヂョヴァンニはいよ〳〵驚いて、思はず身動きをすると、それに氣がついて彼女は窓を見あげた。彼女は青年の美しい頭——伊太利式よりは寧ろギリシャ型で、美しく整つた容貌と、かゞやく金髮の捲毛とを持つてゐた——その頭が中空にさまよつてゐた彼の蟲のやうに、彼女を一心に見詰めてゐるのを知つた。ヂョヴァンニは今まで手に持つてゐた花束を殆ど無意識に投げ下した。

「お孃さん。」と彼は言つた。「こゝに清い健全な花があります。どうぞヂョヴァンニ・グァスコンティのために、その花をおつけ下さい。」

「有難う ございます。」と、恰も一種の音樂のあふれ出るやうな豐かな聲をして半分は子供らしく、半分は女らしい、嬉しさうな表情でベアトリーチェは答へた。「あなたの贈物を頂戴いたします。そのお禮に、この美しい紫の花を差上げたいのですが、わたしが投げてもあなたのところまでは屆きません。グァスコンティ樣、お禮を申上げるだけで、どうぞおゆるし下さい。」

彼女は地上から花束を取り上げた。未知の人の挨拶に答へるなど、娘らしい愼しみを忘れたのを内心恥ぢるかのやうに、彼女は庭を過ぎて足早に家の中へ這入つてしまつた。それは僅かに數秒間のことであつたが、彼女の姿が入口の下に見えなくならうとしてゐる時、彼の美しい花束が已に彼女の手のうちで凋れかゝつてゐるやうに見えた。しかし、それは愚かな想像で、それほど離れたところにあつて、新鮮な花の凋んでゆくことなどが何うして認められるであらう。

このことがあつて後、しばらくの間、青年はラッバッチーニの庭園に面してゐる窓口に行くことを

避けた。若しその庭を見たらば、何か忌な醜怪な事件が、重ねて彼の眼に映るであらうと思つたやうであつた。彼はベアトリーチェと知合になつたがために、何か解し難いやうな或る力の影響をうけてゐることを、自分ながら幾分か氣が付いた。若し彼の心に本當の危險を感じてゐるならば、最も賢明なる策はごのパドゥウアを一度離れることであらう。第二の良策は、日中に見たところのベアトリーチェの親しげな樣子に出來るだけ慣れてしまつて、彼女を極めて普通の女性と思ふやうになることであらう。殊に彼女を避けてゐる間、ヂョヴァンニへはこの異常なる女性に斷然接近してはならない。彼女と親しい交際が出來さうにでもなつたらば、絶えず想像を逞しうしてゐる彼の氣紛れが、いつか眞實性を帶びて來る虞れがあるからである。

ヂョヴァンニは、深い心を持たずして——今それを測つてみたのではないが——敏速な想像力と、南部地方の熱烈な氣性とを持つてゐた。この性質はいつでも熱病の如くに昂まるのである。ベアトリーチェが恐るべき特質——彼が目擊したところによれば、その恐ろしい呼吸とか、美しい有毒の花に似てゐるとか言ふこと。——それらの特質を持つてゐると否とに拘はらず、彼女は少くとも、非常に猛烈な不可解の毒藥をその身體のうちに沁み込ませてしまつたのである。彼女の濃艶は彼の心を狂はせるが、それは愛ではない。彼は又、彼女の肉體に漲ぎるやうに見える如く、彼女の精神にも同じ有毒の原素が沁み込んでゐると想像してゐるが、それは恐怖でもない。それは愛と恐怖との二つが生んだもので、しかもその二つの性質を具へてゐるものである。卽ち愛のごとくに燃え、恐怖の如くに顫

へるところのものである。

ヂョヴァンニは何を恐るべきかを知らず。又それにも增して何を望むべきかをも知らなかつた。而も希望と恐怖とは絶えずその胸のうちで爭つてゐた。交る〴〵に他の感情を征服するかと思へば、又起つて戰ひを新たにするのである。暗いと明るいとを問はず、いづれにしても單純なる感情は幸福である。赫々たる地獄の火焰を噴くものは、二つの感情の物凄い連れである。

時々に彼はパドゥウアの街や郊外を無暗に歩きまはつて、熱病のやうな精神を鎭めようと努めた。その歩みは頭の動悸と歩調を合せたので、さながら競爭でもしてゐるやうに段々に早くなつて行くのであつた。ある日、彼は途中で或人に遮られた。ひとりの人品卑しからぬ男が彼を認めて引返し、息を切りながら彼に追ひついて、その腕を取つたのである。

「ヂョヴァンニ君。おい、君。ちよつと待ち給へ。君は、僕を忘れたのか。僕が君のやうに若返つたとでも言ふのなら、忘れられても仕方がないが……。」と、その人は呼びかけた。

それはバグリオーニ教授であつた。この教授は悧口な人物で、餘りに深く他人の祕室を見透し過ぎるやうに思はれたので、彼は初對面以來、この人をそれとなく避けてゐたのである。彼は自己の內心の世界から外部の世界をぢつと眺めて、自己の妄想から眼覺めようと努めながら、夢みる人のやうに言つた。

「はい。私はヂョヴァンニ・グァスコンティです。さうして貴方は、ピエトロ・バグリオーニ教授。

では、さようなら。」

「いや、まだ、まだ、ヂョヴァンニ・グァスコンティ君。」と、教授は微笑と共に青年の様子を熱心に見つめながら言つた。「何うしたことだ。僕は君のお父さんとは仲好く育つたのに、その息子はこのバドゥウアの街で僕に逢つても、知らぬ振りをして行き過ぎても好いのかね。ヂョヴァンニ君。別れる前に一言話したいから、まあ、待ちたまへ。」

「では、早く……。先生、どうぞお早く……。」と、ヂョヴァンニは、非常にもどかしさうに言つた。

「先生、私が急いでゐるのがお見えになりませんか。」

彼がかう言つてゐるところへ、黒い着物を着た男が、健康の勝れぬ人のやうに前屈みになつて、弱弱しい形で辿つて來た。その顏は全體に甚だ病的で土色を帶びてゐたが、鋭い積極的な理智の閃きが漲ぎつてゐて、見る者はその單なる肉體的の虛張を忘れて、たゞ驚くべき精力を認めたであらう。彼は通りがかりに、バグリオーニと遠くの方から冷かな挨拶を取交したが、彼はこの青年の内面に何か注意に値すべきものあらば、何物でも身透さずには置かぬと言つたやうな鋭い眼を以て、ヂョヴァンニの上に屹と注がれた。それにも拘はらず、その容貌には獨特の落着があつて、この青年に對しても人間的ではなく、單に思索的興味を感じてゐるやうに見られた。

「あれが、ドクトル・ラッバッチーニだ。」と、彼が行つてしまつた時に教授はさゝやいた。「彼は君の顏を知つてるのかね。」

「私は知つてゐるといふ譯ではありません。」と、ヂョヴァンニはその名を聞いて驚きながら答へた。

「彼の方では確に君を知つてゐるよ。彼は君を見たことがあるに違ひない。」と、バグリオーニは急き込んで言つた。「何かの目的で、あの男は君を研究してゐる。僕はあの樣子で判つたのだ。彼が或る實驗のために、ある花の匂ひで殺した鳥や鼠や蝶などに臨む時、彼の顏に冷たく現はれるものと全く同じ感じだ。その容貌は自然その物の如くに深味を有つてゐるが、自然の持つ愛の暖か味はない。ヂョヴァンニ君。君は屹とラッバッチーニの實驗の一材料であるのだ。」

「先生。あなたは僕を馬鹿になさるのですか。そんな不運な實驗だなどと……。」と、ヂョヴァンニは怒氣を含んで叫んだ。

「まあ、君、待ち給へ。」と、執拗な教授は繰りかへして言つた。「それはね、ヂョヴァンニ君。ラッバッチーニが君に學術的興味を感じたのだよ。君は恐ろしい魔手に捉はれてゐるのだ。さうして、ベアトリーチェは——彼女はこの祕密に就いてどういふ役割を勤めるのかな。」

併しヂョヴァンニはバグリオーニ教授の執拗に堪へ切れないで、逃げ出して、教授がその腕を再び捉へようとした時には、もう其處にはゐなかつた。教授は青年のうしろ姿を瞬きもせずに見つめて、頭を振りながら獨り言を言つた。

「こんな筈ではないが……。あの青年は、俺の舊友の息子だから、俺は醫術によつて保護し得る限りは、如何なる危害をも彼に加へさせない積りだ。それに又、俺に言はせると、ラッバッチーニがあの

青年を俺の手から奪つて、彼の憎むべき實驗の材料にするなどとは、餘りにひどい仕方だ。彼の娘も監視すべきだ。最も博學なるラッパッチーニよ。俺は多分お前を夢にも思はないやうなところへ追ひ遣つてしまふであらう。」

ヂョヴァンニは廻り道をして、遂にいつの間にか自分の宿の入口に來てゐた。彼が入口の閾をまたいだ時に、老婦人のリザベッタに出逢つた。彼女はわざと作り笑ひをして、彼の注意を惹かうと思つたが、彼の湧き立つた感情はすぐに冷靜になつて、やがて茫然と消えてしまつたので、その目的は達せられなかつた。彼は、微笑を湛へた皺だらけの顏の方へ眞正面に眼を向けてはゐたが、その顏を見てゐるやうには思はなかつた。そこで、老婦人は彼の外套を摑んだ。

「もし、あなた、貴方」と、彼女は囁いた。その顏にはまだ一面に微笑を湛へてゐたので、彼女の顏は幾世紀を經て薄汚くなつた怪異な木彫のやうに見えた。「まあお聽きなさい。庭へ這入るのには、祕密の入口があるのでございますよ。」

「何だつて……。」と、ヂョヴァンニは無生物が、生命を吹き込まれて飛び上るやうに、急に振返つて叫んだ。「ラッパッチーニの庭へ這入る祕密の入口……。」

「しつ、しつ。そんなに大きな聲をお出しになつてはいけません。」と、リザベッタはその手で、彼の口を蔽ひながら言つた。左樣でございます。あの偉い博士樣のお庭に這入る祕密の入口でございます。そのお庭では、立派な灌木の林がすつかり見られます。パドゥウアの若い方達は、みんなその花

の中に入れて貰はうと思つて、お金を下さるのでございます。」

ヂョヴァンニは金貨一個を彼女の手に握らせた。

「その道を敎へて呉れ給へ。」と、彼は言つた。

多分バグリオーニとの會話の結果であらうが、このリザベッタ婦人の橋渡しは、ラッパッチーニが彼を捲き込まうとしてゐると敎授が想像してゐるらしい陰謀——それが如何なる性質のものであつても——と、何か關聯してゐるのではないかといふ疑ひが、彼の心を掠めた。しかしかうした疑ひは、ヂョヴァンニの心を一旦かき亂したものゝ、彼を抑制するには不十分であつた。ベアトリーチェに接近することが出來るといふことを知つた刹那、さうすることが彼の生活には絕對に必要なことのやうに思はれた。彼女が天使であらうと、惡魔であらうと、そんなことはもう問題ではなかつた。彼は絕對に彼女の掌中にあつた。さうして、彼は永久に小さくなり行く圈內に追ひ込まれて、遂には、彼が豫想さへもしなかつた結果を招くやうな法則に、從はなければならなかつた。

而も不思議なことには、彼は俄かにある疑ひを起した。自分のこの强い興味は、幻想ではあるまいか。かういふ不安定の位置にまで突進しても差支へないと思はれるほどに、それが深い確實な性質のものであらうか。それは單なる青年の頭腦の妄想で、彼の心とはほんの僅かな關係があるに過ぎないが、又は全然無關係なのではあるまいか。彼は疑つて、躊躇して後りを戻しかけたが、再び思ひ切つて進んで行つた。皺だらけの案內人は幾多の判りにくい小逕を通らせて、遂に或る扉を開くと、木の

葉がちらくと風にゆらいで、日光が葉がくれにちらくと輝いてゐるのが見えた。ヂョヴァンニは更に進んで、隱れた入口の上を蔽つてゐる灌木の蔓が絡みつくのを押退けて、ラッパッチーニ博士の庭の廣場にある自分の窓の下に立つた。

我々は屢々經驗することであるが、不可能と思ふやうなことが起つたり、今まで夢のやうに思つてゐたことが實際に現はれたりすると、歡樂又は苦痛を豫想して殆ど、夢中になるやうな場合でも、却つて落着きが出て、冷かなるまでに大膽になり得るものである。運命はかくの如く我々に逆らふことを喜ぶ。かういふ場合には、情熱が時を得顔にのさばり出て、それが丁度いゝ工合に事件と調和する時には、いつまでもその事件の蔭に滯つてゐるものである。

今のヂョヴァンニは、恰もさういふ狀態に置かれてあつた。彼の脈搏は毎日熱い血潮で波打つてゐた。彼はベアトリーチェに逢つて、彼女を美しく照らす東洋的な日光を浴びながら、この庭で彼女と向ひ合つて立ち、彼女の顏を飽までも眺めることに依つて、彼の生活の謎になつてゐる祕密を摑まうと、出來さうもないことを考へてゐた。而も今や彼の胸には、不思議な、時ならぬ平靜が湧いてゐた。彼はベアトリーチェか又はその父がそこにゐるかと思つて、庭のあたりを見廻したが、まつたく自分獨りであるのを知ると、更に植物の批評的觀察をはじめた。

或る植物——否、すべての植物の姿態が彼には不滿であつた。その絢爛なることも餘りに强烈で、情熱的で、殆ど不自然と思はれるほどであつた。たとへば、獨りで森の中をさまよつてゐる人が、恰

もその茂みの中からこの世の者とも思はれぬ顏が現はれて、ぢろりと睨まれた時のやうに、その不氣味な姿に驚かされない灌木は殆どなかつた。又、あるものは種々の科に屬する植物を混合して作り出したかと思はれるやうな、人工的の形狀で、感じ易い本能を刺戟した。それは最早や神の創造したものではなく、單に人間がその美を下手に模倣して墮落した考へに依つて作りあげたものに過ぎなかつた。これらは恐らく一二の實驗の結果、個々の植物を混合して、この庭の全植物と異つた、不思議な性質を具へたものに作り上げることに於いて成功したのであらう。ヂョヴァンニは唯二三の植物を集めてみたが、それは彼が有毒植物といふことを豫て熟知してゐる種類のものであつた。

こんな考察に耽つてゐる時、彼はふと衣ずれの音を聞いた。ふりかへつて見ると、それはベアトリーチェが、彫刻した入口の下から現れ出でたのであつた。

三

ヂョヴァンニはこの際いかなる態度を取るべきものか。庭園に闖入した申し譯をすべきものかどうか。又みづから望んだことではなくても、少くともラッパッチーニとその娘には無斷でこゝへ立入つたことを自認すべきものかどうか。そんなことは別に考へてゐなかつたので、その瞬間少しく慌てたが、ベアトリーチェの態度を見るにつけて彼の心はやゝ落着いた。尤も誰の案内でこゝに入ることを許されたかと言ふことになれば、猶そこに一種の不安が無いでもなかつた。彼女は小徑を輕く歩んで

來て、壞れた噴水のほとりで彼に出逢つて、流石に驚いたやうな顏をしてゐたが、又その顏は親切な愉快な表情に輝いてゐた。

「あなたは花の鑑識家でございますね。」とベアトリーチェは彼が窓から投げてやつた花束を指して微笑みながら言つた。「それですから、父の集めた珍しい花に誘惑されて、もつと近寄つて見たいとお思ひになるのも不思議はありません。若し父が此處に居りましたら、自然や斯ういふ灌木の性質や習慣などについて、色々な不思議な面白いことをお話し申上げることが出來ませうに……。父はさういふ研究に一生涯を費しました。さうして、この庭が父の世界なのでございます。」

「あなたもさうでせう。」と、ヂョヴァンニは言つた。「世界の評判によると、あなたも澤山の花や好い匂ひについて、隨分御造詣が深いさうではありませんか。如何です、わたしの先生になつて下さいませんか。さうすると、わたしはラッペッチーニ先生の敎へを受けるよりも、もつと熱心な學生になるものですが……。」

「そんな好加減な噂があるのでせうか。」と、ベアトリーチェは音樂的な愉快な笑ひ方をして訊いた。「わたくしが父に似て植物學に通じてゐるなどと、世間では言つて居りますか。まあ、冗談でせう。わたくしはこの花の中に育ちましたけれど、色と匂ひの外には何にも存じませんのです。その貧弱な知識さへも時々に失くなつてしまふやうに思ふことがあります。こゝには澤山の花があつて、餘りにけば〳〵しいので、それを見るとわたくしは何だか忌々しくなつて來ます。しかし貴方、かうした學

術に關するわたくしの話は、どうぞ信用して下さらないやうに……。貴方の御自分の眼で御覽になることの外は、わたくしの言ふことなどは何にも御信用なさらないで下さい。」

「わたしは自分の眼で見たものを總て信じなければならないのですか。」と、ヂョヴァンニは以前の光景を思ひ出して逡巡しながら、聲を尖らして訊いた。「いゝえ、あなたはわたしに求めなさ過ぎます。どうぞあなたの脣から漏れること以外は信じるなと言つて下さい。」

ベアトリーチェは彼の言ふことを理解したやうに見えた。彼女の頰は眞紅になつた。しかも彼女はヂョヴァンニの顏をぢつと眺めて、彼が不安らしい疑惑の眼を以て見てゐるのに對して、さながら女王のやうな傲慢を以て見返した。

「では、さう申しませう。貴方がわたくしのことをどうお考へになつてゐたとしても、それは忘れて下さい。たとひ外部の感覺は本當であつても、その本質に於いて相違してゐるところがあるかも知れません。けれども、ベアトリーチェ・ラッペッチーニの脣から出る言葉は、心の奥底から出る眞實の言葉ですから、貴方はそれを信じて下すつても宜しいのです。」

彼女の容貌には熱誠が輝いてゐた。その熱誠は眞實そのものゝ光のやうにヂョヴァンニの意識の上にも輝いた。併し彼女がそれを語つてゐる間、その周圍の空氣のうちには、消え易くはあるが豐かな好い匂ひが漂つてゐたので、この青年は何とも知れぬ反感から、努めてその空氣を吸はないやうにしてゐた。

その匂ひは花の香であらう。而も彼女の言葉をさながら胸の奥にたくはへてあつたかのやうに、かくも不思議に豐富にしたのは、ベアトリーチェの呼吸であらうか一種の臆病心は影のやうにヂョヴァンニの胸から飛び去つてしまつた。彼は美しい娘の眼を通して、水晶のやうに透きとほつたその魂を見たやうに思つて、もはや何の疑惑も恐怖も感じなかつた。

ベアトリーチェの態度にあらはれてゐた情熱の色は消えて、彼女は快活になつた。さうして、孤島の少女が文明國から來た航海者と談話を交へて感ずるやうな純な歡びが、この青年との會合によつて彼女に新しく湧き出したやうに思はれた。明かに彼女の生涯の經驗は、その庭園内に限られてゐた。彼女は日光や夏の雲のやうな、單純な事物について話した。又、都會のことや、ヂョヴァンニの遠い家や、その友人、母親、姉妹などに就いて尋ねた。その質問はまつたく浮世離れのした、流行などと言ふことゝは全く掛け離れたものであつたので、ヂョヴァンニは赤ん坊に話して聞かせるやうな調子で答へた。

彼女は今や初めて日光を仰いだ新しい小川が、その胸に映る天地の反映に驚異を感じてゐるやうな態度で、彼の前にその心を打明けた、また、深い水源からは色々の考へが湧き出して、恰も金剛石や紅玉がその泉の泡の中からでも光り輝くやうに、寶石の光を持つた空想が湧き出した。青年の心にはをり〳〵に懷疑の念が閃いた。彼は兄妹のやうに話を交へて、彼女を人間らしく、乙女らしく思はせようとするやうな或る者と、相並んで歩いてゐるのではないかと思つた。その人間には怖ろしい性質

の現はれるのを彼は實際に目擊してゐるのであつて、その恐怖の色を理想化してゐるのではないかと思つた。而もかうした考へはほんの一時的のもので、彼女の非常に眞實なる性格の力は、容易に彼を親しませるやうになつたのである。

かういふ自由な交際をして、彼等は庭中をさまよひ歩いた。並木の間を幾度も廻り歩いた後に、壞れた噴水のほとりに來ると、その傍には目ざましい灌木があつて、美しい花が今を盛りと咲き誇つてゐた。その灌木からはベアトリーチェの呼吸から出るのと同じやうな一種の匂ひが散つてゐたが、それは比較にならない程に一層强烈なものであつた。彼女の眼がこの灌木に落ちた時、ヂョヴァンニは彼女の心臟が急に激しい鼓動を始めたらしく、苦しさうにその胸を片手で押へるのを見た。

「わたしは今までに初めてお前のことを忘れてゐたわ。」と、彼女は灌木に囁きかけた。

「わたしが大膽にあなたの足もとへ投げた花束の代りに、あなた女はこの生きた寶の一つをやらうと約束なすつたのを覺えてゐます。今日お目にかゝつた記念に、今それを取らせて下さい。」と、ヂョヴァンニは言つた。

彼は灌木の方へ一歩進んで手を延すと、ベアトリーチェは彼の心臟を刃で貫くやうな鋭い叫び聲をあげて駈け寄つて來た。彼女は男の手を摑んで、かよわい身體に全力をこめて引き戻したのである。ヂョヴァンニは彼女に觸られると、全身の纖維が突き刺されるやうに感じた。

「それに觸れてはいけません。あなたの命がありません。それは恐ろしいものです。」と、彼女は苦

惱の聲を張りあげて叫んだ。

さう言つたかと思ふと、彼女は顏を掩ひながら男のそばを離れて、彫刻のある入口の下に逃げ込んでしまつた。ヂョヴァンニはその後姿を見送ると、そこには、ラッパッチーニ博士の痩せ衰へた姿と蒼ざめた魂とがあつた。どのくらゐの時間かは判らないが、彼は入口の蔭にあつてこの光景を眺めてゐたのであつた。

ヂョヴァンニは自分の部屋に唯ひとりとなるや、否や、初めて彼女を見た時以來、遂に消え失せないでありたけの魅力と、それに今では又、女性らしい優しい溫情に包まれたベアトリーチェの姿が、彼の情熱的な瞑想のうちに蘇つて來た。彼女はすべての優しさと、女らしい性質とを賦與されてゐた。彼女は最も崇拜に値する女性であつた。彼女は確に高尙な勇壯な愛を持つことが出來た。彼がこれまで彼女の身體及び人格の著しい特徵と考へてゐた種々の特性は、今や忘れられてしまつたのか。或は巧妙な情る熱的詭辯によつて魔術の金冠のうちに移されてしまつたのか。彼はベアトリーチェをますく賞讃すべきものとし、ますく比類なきものとした。これまで醜く見えてゐた總てのものが、今はことく美しく見えた。若し又かゝる變化があり得ないとしても、醜いものは密かに忍び出て、畫間は完全に意識することの出來ないやうな薄暗い場所に群がる漠然とした考へのうちに影をひそめてしまつた。かうして、ヂョヴァンニはその一夜を過したのである。彼は

ラッパッチーニの庭を夢みて、曉、がその庭に眠つてゐる花をよび醒ますまでは、安らかに眠ることができなかつた。

時が來ると日は昇つて、青年の眼瞼にその光を投げた。彼は苦しさうに眼をさまして。全く醒めた時、彼は右の手に火傷をしたやうな、ちくくした痛みを感じた。それは彼が寶石のやうな花を一つ取らうとした刹那に、ベアトリーチェに握られたその手であつた。手の裏には、四本の指の痕のやうな紫の痕があつて、拳の上には細い拇指の痕らしいものもあつた。

愛は如何に強きことよ。——たとひそれが想像の中にのみ榮えて、心の奧底までは搖り動かさないやうな、表部ばかりの贋ひ物であつたとしても——薄い霞のやうに消えてゆく最後の瞬間までも、如何に強くその信念を持續することよ。ヂョヴァンニは自分の手にハンカチーフを卷いて、どんな禍が起つて來るかと憂ひたが、ベアトリーチェのことを思ふと、彼はすぐにその痛みを忘れてしまつたのである。

第一の會合の後、第二の會合は實に運命ともいふべき避け難いものであつた。それが第三回、第四回と度重なるにつれて、庭園におけるベアトリーチェとの會合は最早ヂョヴァンニの日常生活に於ける偶然の出來事ではなくなつて、その生活の全部であつた。彼が獨りで居る時は、嬉しい逢瀨の豫想と回想とに耽つてゐた。ラッパッチーニの娘も矢張りそれと同じことであつた。彼女は青年の姿のあらはれるのを待ちかねて、その傍へ飛んで行つた。彼女は彼が赤ん坊時代からの親しい友達で、今で

もさうであるかのやうに、なんの遠慮もなしに大膽に振舞つた。若し何かの場合で、稀に約束の時間までに彼が來ない時は、彼女は窓の下に立つて、室内にゐる彼の心に反響するやうな甘い調子で呼びかけた。

「ヂ・ヴァンニ……。ヂ・ヴァンニ……。何をぐづ〳〵してゐるの。降りていらつしやいよ。」

それを聞くと、彼は急いて飛び出して、毒のあるエデンの花園に降りて來るのであつた。

これ程の親しい間柄であるにも拘らず、ベアトリーチェの態度には、猶打ち解け難い點があつた。彼女はいつも行儀の好い態度を取つてゐるので、それを破らうといふ考へが男の想像のうちには起きない程であつた。すべての外面上の事柄から觀察すると、彼等は確に相愛の仲であつた。彼等は路傍で囁くには、餘りに神聖であるかのやうに、互ひの祕密を心から心へと眼で運んだ。彼等のこゝろが永く祕められてゐた火焔の舌のやうに、言葉となつてあらはれ出る時には、情熱の燃ゆるがまゝに戀を語ることさへもあつた。それでも接吻や握手や、又は戀愛が要求し神聖視するところの輕い抱擁さへも試みたことはなかつた。彼は彼女の輝いたちゞれ毛の一筋にも手を觸れたことはなかつた。彼の前で彼女の着物は微風に動かされることさへもなかつた。それほどに彼等の間には、肉體的の障壁が著るしかつた。

まれに男がこの限界を越えるやうな誘惑を受けるやうに思はれた時には、ベアトリーチェは非常に悲しさうな、又非常に嚴格な態度になつて、身を顫はせて遠く離れるやうな樣子を見せた。さうして

彼を近づけない爲に、なんにも口を利かない程であつた。こんな時には、彼は心の底から湧き出て來て、ぢつと彼の顏を眺めてゐる、不氣味な恐ろしい疑惑の念に驚かされるので、その戀愛は朝の霧のやうに薄れて行つて、その疑惑のみが跡に殘つた。而も一時間の暗い影の後に、ベアトリーチェの顏が再び輝いた時には、彼がそれ程の恐怖を以て眺めた不思議な人物とはすつかり變つてゐた。彼が知つてゐる限りでは、彼女は確に美しい初心な處女であつた。

ヂ・ヴァンニが曩にバグリオーニ教授に逢つてからは、かなりに時日が過ぎた。ある朝、彼は思ひがけなく、この教授の訪問を受けて不快に思つた。彼はこの數週間、教授のことなどを思ひ出しても見なかつたのみならず、寧そいつまでも忘れてゐたかつた。彼は長く打續く刺戟に疲れてはゐたが、自分の現在の感激狀態に心から同情して呉れる人でなければ逢ひたくなかつた。併しこんな同情は、バグリオーニ教授に期待することは出來なかつた。教授は暫らくの間、市中のことや大學のことなどについて噂話をした後に、他の話題に移つて行つた。

「僕は、この頃、ある古典的な著者のものを讀んでゐるが、その中で非常に興味のある物語を見付けたのだ。」と、彼は言つた。「君も或は思ひ出すかも知れないが、それはある印度の皇子の話だ。彼はアレキサンダー大帝に一人の美女を贈つた。彼女は曉のやうに愛らしく、夕暮のやうに美しかつたが、非常に他人と異つてゐるのは、その息がペルシャの薔薇の花園よりもなほ芳はしい、一種の馥郁たる香氣を帶びてゐることであつた。アレキサンダーは、若い征服者によくあり勝なことであるが、

この美しい異國の女を一目見ると忽ちに戀に落ちてしまつた。而も偶然その場に居合せた或る賢い醫者が彼女に關する恐ろしい祕密を見破つたのだ。」

「それはどういふことだつたのですか。」と、ヂョヴァンニは敎授の眼を避けるやうに、伏目落ちに訊いた。

バグリオーニは言葉を强めて語りつゞけた。

「この美しい女は、生れ落ちるとから毒藥で育てられて來たのだ。そこで、彼女の本質には毒が浸み込んで、その身體は最も甚しい有毒物となつた。つまり、毒藥が彼女の生命の要素になつてしまつたのだ。その毒素の匂ひを彼女は空中に吹き出すのであるから、彼女の愛は毒藥であつた——彼女の抱擁は死であつた。まあかう言ふことだが、何と君、實に不思議な驚くべき物語ではないか。」

「子供だましのやうな話ではありませんか。」と、ヂョヴァンニは苛々したやうに椅子から立上つて言つた。「尊敬すべき貴方が、もつと眞面目な研究もありませうに、そんな馬鹿馬鹿しい物語をお望みになる暇があるとは、驚きましたね。」

「時に君、この部屋には何か不思議な匂ひがするね。」と、敎授は不安さうに四邊を見まはしながら言つた。「君の手套の匂ひかね。幽かながらも好い匂ひだ。併し決して心持のいゝ匂ひではないね。こんな匂ひに長く浸つてゐると、僕などは氣分が惡くなる。花の匂ひのやうでもあるが、この部屋には花はないね。」

敎授の話を聽きながら、ヂョヴァンニは蒼くなつて答へた。

「いゝえ、そんな匂ひなどはしません。それは貴方の心の迷ひです。匂ひといふものは、感覺的なものと精神的なものとを一緒にした一種の要素ですから、時々かういふ風に我々は欺され易いのです。ある匂ひの事を思ひ出すと、全くそこにないものでも實際あるやうに思ひ誤り易いものですからね。」

バグリオーニは言つた。

「さうだ。併し僕の想像は確實だから、そんな惡戲をすることは滅多にない。若し僕が何かの匂ひを思ひ浮べるとしても、僕の指にしみ込んでゐる賣藥の惡い匂ひだらうよ。噂によると畏友ラッパッチーニは、アラビヤの藥よりも更に好い匂ひを以て、藥に味をつけるさうだ。美しい博學のベアトリーチェも、屹と父と同樣に、乙女の息のやうな好い匂ひのする藥を、患者に與へることだらう。それをのむ者こそ災難だ。」

ヂョヴァンニの顏には、色々な感情の爭ひをかくすことが出來なかつた。敎授が、淸く優しいラッパッチーニの娘を指して言つた言葉の調子が、彼の心に忌な感じをあたへた。而も自分とは全然反對の見方をしてゐる敎授の暗示が、恰も百千の鬼が齒をむき出して彼を笑つてゐるやうな、暗い疑惑を誘ひ出したのである。彼は努めてその疑を抑へながら、ほんたうに戀人を信ずるの心を以て、バグリオーニに答へた。

「敎授。あなたは父の友人でした。それですから、多分その息子にも友情を以て接しようといふお積

りなのでせう。わたしは貴方に對して心から敬服してゐるのです。併し我々には口にしてはならない話題があるといふことを、どうか考へて頂きたいのです。あなたはベアトリーチェを御存じではありません。それがために間違つた御推測をなすつては困ります。彼女の性格に對して、輕慮な失禮な言葉をお用ひになるのは、彼女を冒瀆するといふものです。」

「ヂョヴァンニ。憐むべきヂョヴァンニ。」と、教授は冷酷な憐憫の表情を浮べながら答へた。僕はこの可憐な娘のことに就いて、君よりも、ずつとよく知つてゐる。これから君に向つて、毒殺者ラッパッチーニと、その有毒の娘とに關する事實を話して聞かせよう。さうだ、有毒者ではあるが、彼女は美しいには美しいね。まあ聽き給へ。たとひ君が腹を立つて、僕の白髮を亂暴にかきむしつても、僕は決して默らない。その印度の女に關する昔の物語は、ラッパッチーニの深い恐ろしい學術によつて、美しいベアトリーチェの身體に眞實となつて現はれたのだ。」

ヂョヴァンニは呻き聲を立てゝ彼の顏を掩ふと、バグリオーニは續けて言つた。

「彼女の父はこの學術に對して、狂的といふほどに熱心の餘り、わが子をその犧牲とするに躊躇しなかつたのだ。公平に言へば、彼は蒸溜器を以て彼自身の心を蒸發してしまつたかと思はれるほど、學術には忠實な人間であるのだ。そこで、君の運命はどうなるかといふ問題であるが――疑ひもなく、君は或る新らしい實驗の材料として選ばれたのだ。恐らくその結果は死であらう。いや、もつと恐ろしい運命かも知れない。ラッパッチーニは自分の眼前に、學術上の興味を惹くものがあれば、如何な

るものでも些とも躊躇しないのだ。」

「それは夢だ。たしかに夢だ。」と、ヂョヴァンニは小さい聲で呟いた。

教授は續けて言つた。

「けれども、君、樂觀し給へ。まだ今の中ならば助かるのだ。多分われ〳〵は彼女が父の狂熱によつて失はれてゐる普通の性質を、悲慘なる娘のために取り戻してやれると思ふのだ。この小さな銀の花瓶を見給へ。これは有名なベンヴェニュート・チェリーニの手に成つたもので、伊太利で最も美しい婦人に愛の贈物としても恥かしくないものだ。殊にこの中に這入つてゐるのは又とない尊いもので、この解毒劑を一滴でも飲めば、どんな劇藥でも無害になるのだ。ラッパッチーニの毒藥に對しても、十分の效力あることは疑ひない。この尊い藥を入れた花瓶を、君のベアトリーチェに贈り給へ。さうして、確實の希望を以てその結果を待ちたまへ。」

バグリオーニは精巧な細工を施した小さい銀の花瓶を、テーブルの上に置いて出て行つた。彼は自分の言つたことが青年の心の上に好い效果をあたへることを望んだ。

「まだ今のうちならば、ラッパッチーニを遮ることが出來るだらう。」と、彼は階段を降りながら、獨りで北叟笑んだ。彼について本當のことを白狀すれば、彼は驚くべき男だ――實に不思議な男だ。併しその實行の方法を見ると、つまらない藪醫者だ。古來の醫者の良い法測を尊ぶ我々には我慢のならないことだ。」

四

ヂョヴァンニがベアトリーチェと交際してゐる間、前にも言つたやうに、彼は時々に彼女の性格について暗い疑ひの影がさした。それでも彼は何處までも彼女を純な自然な、最も愛情に富んだ、僞りのない女性であると思つてゐたので、今彼のバグリオーニ教授の主張するが如きものの姿は、彼自身の本來の考へとは一致せず、甚だ不思議な、信じ難いものゝやうに思はれた。

實際この美しい娘を初めて見た時には、忌はしい思ひ出があつた。彼女が振ると忽ちに凋れた花束のことや、彼女の息の匂ひのほかには何等明らかな媒介物もなしに、日光のかゞやく空氣の中で死んで行つた昆蟲のことや、それらは今でも全く忘れることは出來なかつたが、かういふ出來事は彼女の性格の清らかな光のうちに溶け込んで、最早、事實としての效力を失ひ、いかない感情が事實を證明しようとしても、却つてそれを誤れる妄想と認めるやうになつてゐた。

世の中には我々が眼で見、指で觸れるものよりも、更に眞實で、更に實際的なものがある。さういふ都合の好い論據の下に、ヂョヴァンニはベアトリーチェを信頼した。それは彼の深い莫大な信念からといふよりも、寧ろ彼女の高潔なる特性による必然的の力に由來してゐるのであつたが、今や彼の精神はこれまで情熱に心醉して登りつめてゐた高所に踏みとゞまることを許さなくなつた。彼はひざまづいて世俗的な疑惑の前に降伏し、それがためにベアトリーチェに對する純潔な心象を汚した。彼

女を見限つたといふのではないが、彼は信じられなくなつたのである。彼は一度それを試みれば、總てに於いて彼を滿足させるやうな、或る斷乎たる試驗を始めようと決心したそれは、或る怪異な魂無くしては殆ど存在するとは思はれないやうな恐ろしい特性が、果して彼女の體質のうちに潛んでゐるかどうかと言ふことを試驗するのであつた。遠方から眺めてゐるのならば、蜥蜴や、昆蟲や、花について、彼の眼は彼を欺いたかも知れない。而も若しベアトリーチェが僅か二三歩を離れたところに、新らしい生々とした花を手にして現れたのを見たとすれば、最早その上に疑ひを容れる餘地はなくなるであらう。かう考へたので、彼は急いで花屋へ行つて、まだ朝露のかゞやいてゐる花束を一つ買つた。

今は彼が毎日ベアトリーチェに逢ふ定刻であつた。庭に降りてゆく前に、彼は自分の姿を鏡に映して見ることを忘れなかつた。——それは美しい青年にあり勝な虛榮心からでもあり、且つは情熱の燃ゆる瞬間に現はれる一種の淺薄な感情と、虛僞な性格との表象とも言ふべきであつた。彼は鏡をぢつと眺めた。彼の容貌にこんなにも豐な美しさは、今までに決して見られなかつた。その眼にも今までこんな快活の光はなかつた。その頰にも今までこんな旺盛な生命の色が燃えてゐなかつた。

「少くとも彼女の毒は、まだおれの身體には流れ込んでゐないのだ。俺は花ではないのだから、彼女に握られても死ぬやうなことはないのだ。」と、彼は思つた。

彼はさつきから手に持つてゐた花束に眼を注いだ。さうして、その露にぬれた花がもう萎れかゝつ

てゐるのを見た時、なんとも言はれない恐怖の戦慄が彼の全身をめぐつた。その花は、つい昨日までは生々として美しい姿を見せてゐたのである。ヂョヴァンニは、色を失つて、大理石のやうに白くなつた。かれは鏡の前に突つ立つて、何か怖ろしいもの、姿でも見るやうに、彼自身の影をながめた。彼は部屋中に漲つてゐるやうに思はれる匂ひについて、バグリオーニ教授の言つたことを思ひ出した。自分の呼吸には、毒氣が含まれてゐるに違ひない。彼は身を慄はした。——自分の身體を見て顫へた。

やがて我にかへつて、彼は物珍らしさうに一匹の蜘蛛を眺め始めた。蜘蛛はその部屋の古風な蛇腹から行きつ戻りつして、巧みに絲を織りまぜながら、忙がしさうに巣を作つてゐた。それは古い天井からいつもぶらりと下るほどに強い活潑な蜘蛛であつた。ヂョヴァンニはその昆蟲に近寄つて、深い長い息を吹きかけると、蜘蛛は急にその仕事を止めた。その巣は、この小さい職人の身體に起つてゐる戰慄のために顫へた。ヂョヴァンニは更に一層深く、一層長い息を吹きかけた。彼は心から湧いて來る毒々しい感情に滿たされた。彼は惡意でそんなことをしてゐるのか、單に自棄でそんなことをしてゐるのか、自分にも判らなかつた。蜘蛛はその脚を苦しさうに痙攣させた後、窓の先に死んでぶら下つた。

「呪はれたか。お前の息一つでこの昆蟲が死ぬ程に、お前は有毒になつたのか。」と、ヂョヴァンニは小聲で自分に言つた。

その間に、庭の方から豐な優しい聲が聞えて來た。

「ヂョヴァンニ……。ヂョヴァンニ……。もう約束の時間が過ぎてゐるではありませんか。何をぐづぐづしてゐるのです。早く降りていらつしやい。」

ヂョヴァンニは再び呟いた。

「さうだ。おれの息で殺されない生物はあの女だけだ。いつそ殺すことが出來ればいゝのに……。」

彼は駈け降りて、直ぐにベアトリーチェの輝かしい優しい眼の前に立つた。彼は憤怒と失望に熱狂して、一睨みで彼女を萎縮させてやらうと思ひつめてゐたのであるが、さて彼女の實際の姿に接すると、すぐに振切つてしまふには餘りに強い魅力があつた。彼は屢々彼を宗教的冷靜に導いたところの彼女の美妙な慈悲深い力を思ひ出した。純粹な清い泉がその底から透明の姿を、彼の心眼に明らかに映し出した時、彼女の胸から神聖な熱情の迸しり出でたことを思ひ出した。彼はすべてのこの醜い祕密は、世俗的の錯覺に過ぎないことを考へた。いかなる惡霧が彼女の周圍に立ちこめてゐるやうに思はれても、實際のベアトリーチェは神聖な天使であることを考へた。彼は勿論それほどまでに信じ切ることは出來なかつたが、それでも彼女の姿は彼に對して全然その魅力を失ふことはなかつた。

ヂョヴァンニの憤怒はやゝ鎭まつたが、不機嫌な冷淡な態度は掩はれなかつた。ベアトリーチェは敏速な靈感で彼と自分との間には越えることの出來ない暗い溝が横はつてゐることを早くも覺つた。二人は悲しさうに默つて、一緒に歩いた。大理石の噴水のほとりまで來ると、その中央には寶玉のや

うな花を着けた灌木が生えてゐた。ヂョヴァンニは恰も食慾をそゝられるやうに、一生懸命にその花の匂ひを吸つて喜んで、自分ながらそれに氣がついて驚いた。

「ベアトリーチェ。この灌木はどこから持つて來たのですか。」と、彼は突然に訊いた。

「父が初めて作りました。」と、彼女は簡單に答へた。

「初めて作つた——。作り出したのですか……。」と、ヂョヴァンニ繰り返して言つた。「ベアトリーチェ。それは一體どういふことですか。」

ベアトリーチェは答へた。

「父は恐ろしいほどに自然の祕密に通じた人でした。わたしが初めてこの世界に生まれ出たと同じ時間に、この木が土の中から芽を出して來たのです。わたしはたゞ世間並の子供ですが、この木は父の學問、父の智識の子供です。その木にお近づきになつてはいけません。」

ヂョヴァンニがその灌木にだん〳〵ちかづいて行くのを見て、彼女ははら〳〵するやうに言ひつづけた。

「その木は、あなたが殆ど夢にも考へてゐないやうな、性質を持つてゐます。わたしはその木と一緒に育つて、その呼吸で養はれて來たのです。その木とわたしとは、姉妹であつたのです。わたしは人間を愛すると同じやうに、その木を愛して來ました。——まあ、貴方は、それをお疑ひになりませんでしたか。——そこには恐ろしい運命があつたのです。」

この時、ヂョヴァンニは、彼女を見て、非常に暗い澁面を作つたので、ベアトリーチェは吐息をついて顫へたが、男の優しい心を信じてゐるので、彼女は更に氣を取り直した。さうして、たとひ一瞬間でも彼を疑つたことを恥かしく思つた。

「そこには恐ろしい運命があつたのです。」と彼女は又言つた。「父が、恐ろしいほどに學問を愛した結果、人間のあらゆる運命からわたしを引き離してしまつたのです。それでも神樣はたうとう貴方をよこして下さいました。わたしの大事の大事のヂョヴァンニ……。憐れなベアトリーチェは、それまでどんなに寂しかつたでせう。」

「それが苦しい運命だつたのですか。」と、ヂョヴァンニは彼女を凝視めながら訊いた。

「ほんの近頃になつて、どんなに苦しい運命であるかを知りました。えゝ、今までわたしの心は感覺を失つてゐましたので、別に何とも思はなかつたのです。」

「畜生！」と、彼は毒々しい侮蔑と憤怒とに燃えながら叫んだ。「お前は、自分の孤獨に堪へ兼ねて、僕も同じやうに總ての溫かい人生から引き離して、口でも言へないやうな怖ろしい世界に引込まうとしたのだな。」

「ヂョヴァンニ……。」

ベアトリーチェはその大きい輝いた眼を男の顏に向けて言つた。彼の言葉の力は相手の心に達するまでには到らないで彼女はたゞ雷にでも擊たれたやうに感じたばかりであつた。

ヂョヴァンニは、もう我を忘れて、怒りに任せて罵つた。

「さうだ、さうだ。毒婦！　お前が、それをしたのだ。お前はおれを呪ひ倒したのだ。おれの血管を毒藥で滿たしたのもお前の仕業だ。お前はおれを自分と同じやうな、憎むべき厭ふべき死人同然な醜い人間にしてしまつたのだ。世にも不思議な、いまはしい怪物にしてしまつたのだ。さあ、幸ひに我我の呼吸が他のものに對すると同じやうに、我々の命にも關はるものならば、限りない憎惡の接吻を一度こゝろみて、たがひに死んで仕舞はうではないか。」

「何がわたしの身にふりかゝつて來たといふのでせう。聖マリヤ！　どうぞわたくしを憐れと思召してください。――この哀れな失戀の子を……。」

ベアトリーチェはその心から湧き出る低い呻き聲で言つた。

「お前は……。お前は祈つてゐるのだね。」と、ヂョヴァンニはまだ同じやうな惡魔的の侮蔑を以て叫んだ。「お前の脣から出て來るその祈禱は、空氣を「死」で汚して了ふのだ。さうだ、さうだ、一緒に祈らう。一緒に教會へ行つて、入口の聖水に指を浸さう。おれ達の後から來た者は、皆その毒のために死んでしまふだらう。空中に十字を切る眞似をしよう。さうすると、神聖なシンボルの眞似をして、外部に呪詛を撒き散らすことになるだらうよ。」

「ヂョヴァンニ……。」

ベアトリーチェは、靜かに言つた。彼女は悲しみの餘りに怒ることさへも出來なかつたのである。

「貴方はなぜそんな恐ろしい言葉のうちに、わたしと一緒に自分自身までも引き入れようとなさるのです。なるほど、わたしは貴方の仰つしやる通りの恐ろしい人間です。しかし貴方は何でもないではありませんか。この花園から出て、貴方と同じやうな人間に立交はるのを見て、外の人達が身ぶるひする、妾のやうな者は問題になさいますな。憐れなベアトリーチェのやうな怪物が、嘗ては地の上に這つてゐたといふことを、どうぞ忘れてしまつて下さい。」

「お前は、なんにも知らない振りをしようとするのか。」と、ヂョヴァンニは眉をひそめながら彼女を見た。

「これを見ろ。この力は紛れもないラッパッチーニの娘から得たのだぞ。」

そこには夏蟲の一群が、命にかゝはる花園の花の香にひきつけられて、食物を求めながら、空中を飛び廻つて、ヂョヴァンニの頭のまはりに集まつた。暫くの間幾株の灌木の林にひき付けられてゐたのと同じ力によつて、彼の方へ惹きつけられてゐることが、明かであつた。彼は彼等の間へ息を吹きかけた。さうして、少くとも二十匹の昆蟲が、地上に倒れて死んだ時に、彼はベアトリーチェを見かへつて、苦々しげに微笑んだ。

ベアトリーチェは叫んだ。

「判りました、判りました。それは父の恐しい學問です。いゝえ、いゝえ、ヂョヴァンニ……。それはわたしではなかつたのです。決して、わたしではありません。わたしはあなたを愛する餘り、ほん

の些つとの間、あなたと一緒に居たいと思つただけです。さうして、唯あなたのお姿を、わたしの心に殘してお別れ申さうと思つてゐたのです。ヂョヴァンニ……。どうぞわたしを信じてください。たとひわたしのからだは、毒藥で養はれてゐても、心は神樣に作られたもので、日々の糧として愛を熱望してゐたのです。けれども、わたしの父は――父は、學問に對する同情、その恐ろしい同情で、わたし達を結びつけてしまつたのです。えゝもう、どうぞわたしわ蹴飛ばして下さい、踏みにじつて下さい、殺してください。貴方にそんなことを言はれては、死ぬことくらゐはなんでもありません。けれども……けれども、そんなことをしたのはわたしではなかつたのです。幸福な世界のために、わたしがそんなことをするもうですか。

ヂョヴァンニはその憤怒を脣から爆發するがまゝに任せて置いたので、今はもう疲れて鎭まつてゐた。彼の心のうちには、ベアトリーチェと彼自身との間の密接な且つ特殊な關係について悲しい柔かい感情が湧いて來た。言はゞ、彼等は全く孤獨の狀態に置かれたやうなもので、人間が澤山集まれば集まるほど益々孤獨となるであらう。若しさうならば、彼等の周圍の人間の沙漠は、この孤立の二人を更に一層密接に結合すべきではなからうか。自分が普通の性質に立復つて、ベアトリーチェの手を引いて導くだけの望みがまだ殘つてはゐないだらうかと、ヂョヴァンニは考へるやうになつた。しかもベアトリーチェの深刻なる戀が、ヂョヴァンニの激しい惡口に因つてこれほどに悲しく害はれた後に、この世の結合、この世の幸福があり得るやうに考へるのは、なんといふ強い、また我儘な卑い

心であらう。いや、こんな望みは、所詮考へられないことである。彼女は戀に破れたる心を抱いて、現世の境を苦しく越えなければならない。彼女はその心の痛手を樂園の泉に浸し、又は不滅の光に照らさせて、その悲しみを忘れなければならないのである。

併し、ヂョヴァンニにはそれに氣が注かなかつた。

「愛するベアトリーチェ……。」

彼女がいつものやうに近づくことを恐れたにも拘らず、彼は今や異常なる衝動を以て、彼女に近づいた。

「わたしが最愛のベアトリーチェ。我々の運命はまだそんなに絶望的なものではありません。御覽なさい。これは偉い醫者から證明された妙藥です。その效能の顯著なことは、實に神のやうだといふことです。これはあなたの恐ろしいお父さんが、あなたとわたしの身の上にこの禍を齎したものとは全く反對の要素から出來てゐるのです。それは神聖な草から蒸溜して取つたものです。どうです、一緒にこの葉をぐつと嚥んで、おたがひに禍を淨めようではありませんか。」

「それを妾に下さい。」

ベアトリーチェは男が胸から取り出した小さい銀の花瓶を受取らうとして、手を伸ばしながら言つた。それから、特に力を入れて附け加へた。

「妾が嚥みませう。けれども、あなたはその結果を待つて下さい。」

彼女はバグリオーニの解毒劑をその唇にあてると、その瞬間にラッパッチーニの姿が入口から現はれて、大理石の噴水の方へそろ〳〵と歩いて來た。近づくに從つて、この蒼ざめた科學者はいかにも勝誇つたやうな態度で、美しい青年と處女とを眺めてゐるやうに思はれた。それは恰も一つの繪畫又は一群の彫像を仕上げるために、全生涯を捧げた藝術家が遂に成功して、大いに滿足したといふやうな姿であつた。

彼は鳥渡立停まつて、屈んだ身體を態とぐつと伸ばした。彼はその子供等のために、幸福を祈つてゐる父親のやうな態度で、彼等の上に兩手をひろげたが、それは彼等の生命の流れに毒藥を注いだその手であつた。ヂョヴァンニは顫へた。ベアトリーチェは神經的に身をふるはした。彼女は片手で胸を押へた。

ラッパッチーニは言つた。

「ベアトリーチェ。お前はもうこの世の中に獨りぼつちでゐなくとも好いのだ。お前の妹分のその灌木から貴い寶の花を一つ取つて、お前の花婿の胸につけるやうに言つて遣れ。それはもう彼にも有害にはならないのだ。わたしの學問の力と、おまへ達二人への同情とによつて、わたしの誇と勝利の娘であるお前と同じやうに、あの男の身體の組織を變へて、今では他の男とは違つたものにしてしまつたのだ。それであるから、他の總ての者には恐れられても、お互ひ同志は安全だ。これから仲よくして世界中を通るがいゝ。」

「お父樣。なぜ貴方はこんな悲慘な運命をわたくし達にお與へになつたのですか。」

ベアトリーチェは弱々しい聲で言つた。——彼女は靜かに話したが、その手はまだその胸を押へてゐた。

「悲慘だと……。」と、父は叫んだ。「一體お前はどういふ積りなのだ。馬鹿な娘だな。お前は自分に反對すれば、いかなる力も敵を利することが出來ないやうな、天賦の能力を與へられたのを、悲慘だと思ふのか。最も力の強い者をも、一息で打破ることが出來るのを、悲慘だといふのか。お前は美しい娘であるお前と同じやうに、あの男の身體の組織を變へて、今では他の男とは違つたものにしてしまいと同樣に、怖ろしいものであることを悲慘だといふのか。それならば、お前はすべての惡事を暴露されても、何うすることも出來得ないやうな、弱い女の境遇の方が、寧ろ優しだと思ふのか。」

娘は地上にひざまづいて、小聲で言つた。

「わたしは恐れられるよりも、愛されたうございました。併し今となつては、そんなことはもう何でもようございます。お父樣。わたくしはもう……。貴方がわたしの身體に織り込まうとなすつた禍が夢のやうに、——この毒のある花の匂ひのやうに——失くなつてしまふところへ參ります。エデンの園の花のなかには、わたくしの呼吸に毒を沁みさせるやうな花はないでせう。では、さやうなら、ヂョヴァンニ……。あなたの憎しみの言葉は、鉛のやうにわたしの心のうちに殘つてゐます。それもわたしが天國へ昇つてしまへば、みんな忘れられるでせう。おゝあなたの體質には、わたしの體質の中にあつたよりも、もつと澤山の毒が最初から含まれてゐたのではありますまいか。」

彼女の現世の姿はラッパッチーニの優れた手腕によつて、非常に合理的に作られてゐたので、毒藥が彼女の生命であつたと同じやうに、效能の著るしい解毒劑は彼女に取つて「死」であつた。かうして、人間の發明と、それに逆ふ性質の犧牲となり、かくの如く誤用された知識の努力に伴ふ運命の犧牲となつて、哀れなるベアトリーチェは、父とヂョヴァンニの足下に仆れた。

恰もその時、ピエトロ・バグリオーニ教授は窓から覗いて、勝利と恐怖とを混じたやうな調子で叫んだ。彼は雷に撃たれたやうに驚いてゐる科學者に向つて、大きい聲で呼びかけたのである。

「ラッパッチーニ……。ラッパッチーニ……。これが君の實驗の終局か。」

――終――

北極星號の船長

（ドイル）

――醫學生ジ・ン・マリスターレー・の奇異なる日記よりの拔萃――

一

十一月十一日、北緯八十一度四十分、東經二度。依然、我々は壯大な氷原の眞只中に停船す。我々の北方に擴がつてゐる一氷原に、我等は氷錨を下してゐるのであるが、この氷原たるや、實にわが英國の一郡にも相當するほどのものである。左右一面に氷の面が地平の遙か彼方まで果てしなく展がつてゐる。今朝、運轉士は南方に氷塊の徵候のあることを報じた。若しこれが我々の歸還を妨害するに十分なる厚さを形成するならば、我々はまつたく危險の地位にあるといふべきで、聞くところに據れば、糧食は既にやゝ不足を來してゐるといふのである。時恰かも季節の終りで、長い夜が再び現はれ初めて來た。今朝、前檣下桁の眞上に瞬く星を見た。これは五月の初め以來最初のことである。船員中には著しく不滿の色が漲つてゐる。彼等の多くは鯡の漁獵期に間に合ふやうに歸國したいと、頻りに望んでゐるのである。この漁獵期には、スコットランドの海岸地方では、勞働賃銀が高率を唱へるを例とする。併し彼等はその不滿をたゞ不機嫌な容貌と、恐ろしい見幕とで表はすばかりで

ある。その日の午後になつて、彼等船員は代理人を出して船長に苦情を申立てようとしてゐるといふことを二等運轉士から聞いたが、船長がそれを受け容れるかどうかは甚だ疑はしい。彼は非常に獰猛な性質であり、又彼の權限を犯すやうなことに對しては、すこぶる敏感を有つてゐるからである。夕食の畢つた後で、わたしはこの問題について船長に何か少し言つてみようと思つてゐる。從來彼は他の船員に對して憤つてゐるやうな時でも、私にだけは何時も寛大な態度を取つてゐた。スピッスバーゲンの北西隅にあるアムステルダム島は、我が右舷の方に當つて見える——島は火山岩の凹凸線をなし、氷河を現出してゐる白い地層線と交叉してゐるのである。一直線にしても優に九百哩はあるグリーンランド南部の丁抹移住地より近い處には、恐らく如何なる人類も現在棲息してゐないことを考へると、實に不思議な心持がする。凡そ船長たるものは、その船をかゝる境遇に瀕せしめたる場合にあつては、自ら大なる責任を負ふべきである。いかなる捕鯨船も未だ曾てこの時期にあつて、かかる緯度の處に留まつたことはなかつた。

午後九時、私はたうとうクレーグ船長に打明けた。その結果は到底滿足には行かなかつたが、船長は私の言はんとしたことを、非常に靜かに、且つ熱心に聽いてくれた。私が語り終ると、彼はわたしが屢々目擊した彼の鐵のやうな決斷の色を顏に浮べて、數分間は狹い船室をあちらこちらと足早に歩きまはつた。最初わたしは彼をほんたうに怒らせたかと思つたが、彼は怒りを抑へて再び腰をおろして、殆ど迫迫に近い樣子で私の顏を眺つた。その折柄黑い眼は常なるしかめ面をしたが、この時

中にはまた深いやさしさも籠つてゐた。「おい、ドクトル。」と彼は言ひ出した。「俺は實際、いつも君を連れて來るのが氣の毒でならない。ダンディ埠頭にはもう恐らく歸れぬだらうなあ。今度といふ今度は、いよ〳〵一か八かだ。我々の北の方には鯨がゐたのだ。俺は檣頭から汐を噴いてゐる鯨の奴等をちやんと見たのだから、君がいかに頭を横に掉つても、そりやあ駄目だ。」

私は別にそれを疑ふやうな樣子は少しも見せなかつた積りであつたが、彼は突然に怒りが勃發したかのやうに、かう叫んだ。

「わしも男だ。二十二秒間に二十二頭の鯨！　しかも鬚の十呎以上もある大きい奴をな！（捕鯨者仲間では鯨を體の長さで計らず、その鬚の長さで計るのである。）さて、ドクトル。君はわしとわしの運命とのあひだに多寡が氷ぐらゐの邪魔物があるからと言つて、わしがこの國を去られると思ふかね。若し明日にも北風が吹かうものなら、我々は獲物を滿載して結氷前に歸るのだ。が、南風が吹いたら——さうさ、船員はみんな命を賭けなければならんと思ふよ。尤もそんなことは、わしには大したことでもないのだ。何故といへば、わしにとつてはこの世界よりも、あの世の方が餘計に緣がありさうなのだからね。だが、正直のところ君にはお氣の毒だ。わしはこの前われ〳〵と一緒に來たアンガス・タイト老人を連れて來ればよつた。彼なら假ひ死んでも惜まれはしないからな。ところで君は——君は、何時か結婚したと言つたつけねえ。」

「さうです。」と、わたしは時計の鎖に附いてゐる小盒のバネをぱくりとあけて、フロラの小さい寫

眞を差出して見せた。

「畜生！」と、彼は椅子から飛び上つて、憤怒の餘りに顎鬚を逆立て、叫んだ。「俺にとつて、君の幸福が何んだ。わしの眼の前で、君が戀々としてゐるやうなそんな寫眞の女に、俺が何んの係り合があるものか。」

彼は怒りの餘りに、今にもわたしを撲ち倒しはしまいかとさへ思つた。而も彼はもう一度罵つた後に船長室の扉を荒々しく突きあけて甲板へ飛び出してしまつた。取り殘された私は、彼の途方もない亂暴にいさゝか驚かされた。彼がわたしに對して禮儀を守らず、また親切でなかつたのは、この時が全く初めてのことであつた。私はこの文を書きながらも船長が非常に興奮して、頭の上を彼方此方と歩きまはつてゐるのを聞くことが出來る。

わたしはこの船長の人物描寫をしてみたいと思ふが、私自身の心のうちの觀念が精々よく考へて見ても、已に曖昧模糊たるものであるから、そんなことを書かうなどといふのは烏滸がましき業だと思ふ。私はこれまで何遍も、船長の人物を說明すべき鑰を握つたと思つたが、いつも彼は更に新奇なる性格をあらはして私の結論をくつがへし、わたしを失望させるだけであつた。恐らく私以外には、誰しもこんな文句に眼を留めようとする者はないであらう。而もわたしは一つの心理學的研究として、このニコラス・クレーグ船長の記錄を書き殘す積りである。

凡そ人の外部に表はれたところは、幾分かその內の精神を示すものである。觀察は其處に、與點の好く取れた體格で、色のあさ黑い美丈夫である。さうして、不思議に手足を痙攣的に動かす癖がある。これは神經質の故か、あるひは單に彼のあり餘る精力の結果からかも知れぬ。口許や顏全體の樣子はいかにも男らしく決斷的であるが、その眼は紛ふべくもなしにその顏の特徵をなしてゐる。二つの眼は漆黑の榛のやうで、鋭い輝きを放つてゐるのは、大膽を示すものだと私は時々に思ふのであるが、それに恐怖の情の著るしく含まれたやうな何か別種のものが、奇妙に混つてゐるのであつた。大抵の場合には大膽の色がいつも優勢を占めてゐるが、彼が瞑想に耽つてゐるやうな場合は勿論、時時に恐怖の色が深く擴がつて、遂にはその容貌全體に新しき性格を生ずるに至るのである。彼は全く安眠することが出來ない。さうして、夜半にも彼が何か呶鳴つてゐるのをよく聞くことがある。しかし船長室はわたしの船室から少し離れてゐるので、彼の言ふことはつきりとは判らなかつた。

先づこれが彼の性格の一面で、また最も忌な點である。私がこれを觀察したしも畢竟は現在のごとく、彼とわたしとが日々極めて密接の間柄にあつたからに外ならない。もしそんな密接な關係が私もなかつたならば、彼は實に愉快な僚友であり、博識で面白く、これまで海上生活をした者としては、まことに立派なる海員の一人である。わたしは彼の四月のはじめに、解氷のなかで大風に襲はれた時、船を操つた彼の手腕を容易に忘れ得ないであらう。電光の閃きと風の唸りとの眞最中に、ブリッヂを前後に歩き廻つてゐた其夜の彼のやうな、あんな快活な、寧ろ愉快さうにと嬉々してゐたところの彼を、わたしは曾て見たことがない。彼は屢々わたしに告げて、死を想像することは寧ろ愉快なこ

とだ、尤もこれは若い者達に語るのは餘り芳ばしくないことではあるが――と言つてゐる。彼は髪も髭も既に幾分を胡麻鹽となつてゐるが、實際はまだ三十を幾つも出てゐる筈はない。思ふにこれは、何か或る大きな悲しみが彼を襲つて、その全生涯を枯らしてしまつたのに相違ない。恐らく私も亦、もし萬一わがフロラを失ふやうなことでもあつたら、全くこれと同じ狀態に陷ることであらう。私は、これが彼女の身の上に關することでなかつたなら、明日に風が北から吹かうが、南から吹かうが、そんなことは些つとも構はないと思ふ。それ、船長が明窓を降りて來るのが聞えるぞ。それから自分の部屋に這入つて錠をかけたな。これは正しく、彼の心がまだ解けない證據なのだ。それでは、どれ、ペピス爺さんがいつも口癖に言ふやうに、寢るとしようかな。蠟燭ももう燃え倒れようとしてゐる。それに紙仕も寢てしまつたから、もう一本蠟燭にありつく望みもないからな――。

二

九月十二日、靜穩なる好天氣。船は依然おなじ位置に在り。すべて風は南四より吹く。但し極めて微弱なり。船長は機嫌を直して、朝食の前に私にむかつて昨日の失禮を詫びた。しかし彼は今なほ少しく放心の態である。その眼には彼の粗暴の色が殘つてゐる。これはスコットランドでは「死」を意味するものである。――少くもわが機關長は私に向つてさう語つた。機關長はわが船員中のケルト人のあひだには、前兆を豫言する人として相當の聲價を有してゐるのである。

冷靜な、實際的なこの人種に對して、迷信がかくの如き勢力を有してゐたのは、實に不思議である。若しわたしが自らそれを觀たのでなかつたらば、その迷信が非常に擴がつてゐることを到底信じ得なかつたであらう。今度の航海で迷信はまつたく流行してしまつた。しまひには私も亦、土曜日に許されるグロッグ酒と適量の鎭靜藥と、神經强壯劑とを併せ用ひようかと、心が傾いて來るのを覺えて來た。迷信の先づ最初の徵候はかうであつた――。

シェットランドを去つて間もなく舵輪にゐた水夫達が、何物かゞ船を追ひかけて、しかも追ひ付くことが出來ないかのやうに、船の後に哀れな叫びと金切聲をあげてゐるのを聞いたと屢々繰返して話したのが抑も始まりであつた。この話はその航海が終るまで續いた。さうして、海豹漁獵開始期の暗い夜など、水夫等に輪番をさせるには非常に骨が折れたのであつた。疑ひもなく、水夫等の聞いたのは、舵鎖の軋る音か、あるひは通りすがりの海鳥の鳴き聲であつたらう。わたしはその音を聞くために、幾度か寢床から連れて行かれたが、何等不自然なものを聞き分けることは出來なかつた。しかし水夫等は馬鹿馬鹿しいほどにそれを信じてゐて、到底議論の餘地がないのであつた。わたしは嘗てこのことを船長に話したところ、彼もまた非常に眞面目にこの問題を取つたには、わたしもすくなからず驚かされた。さうして、彼は實際わたしの言つたことについて、著るしく心を搔き亂されたやうであつた。わたしは、彼が少くともかゝる妄想に對しては超然としてゐるだらうと、當然考へてゐたからである。

迷信といふ問題に就いて、かくの如く論究した結果、わたしは二等運轉士のメースン氏が昨夜幽靈を見たといふこと——否、少くとも彼自身は見たと言つてゐる事實を知つた。何ケ月もの間、言ひ古るした、熊とか鯨とかいふ、いつも變らぬ極り文句の後で、なにか新しい會話の種があるのは、全く氣分を新たにするものである。メースンは、この船は何かに取憑かれてゐるのだから、もし何處か他に行くところさへあれば、一日もこの船などに止まつてはゐないのだが、と言つてゐる。實際、あの奴さん、ほんたうに怖氣が付いてゐるのである。そこで、私は今朝あいつを落着かせるために、クロラルと臭素加里を少々服ませてやつた。わたしが彼にむかつて、一昨日の晩、君は特別の望遠鏡を持つてゐたのだなと冷やかしてやると、奴さんすつかり憤慨してゐたやうであつた。そこで、わたしは彼を宥めるつもりで、出來るだけ眞面目な顏をして、彼の話すところを聽いてやらなければならなかつた。彼はその話を眞向から事實として、得々として物語つたのであつた。

彼の曰く——「僕は夜半直の四點時鐘頃（當直時間は四時間宛にして、ベルは三十分毎に一つ宛增加して打つのである。因つてこれは四點なれば恰も中時間である）船橋にゐた。夜は正に眞の闇であつた。空には何か月の缺けでもあつたらしいが、雲がこれを吹きかすめて、遙かの船からはつきりと見ることが出來なかつた。恰もその時、魚銛發射手のムレアドが船首から船尾へやつて來て、右舷船首に當つて奇妙な聲がすると報告した。僕は前甲板へ行つて、彼と二人で耳を揃へてその聲をきくと、ある時は泣き叫ぶ子供のやうに、又ある時は心傷める小娘のやうにも聞える。僕はこの地方に十

七年も來てゐたが、いまだ曾て海豹が老幼に拘はらず、そんな鳴聲をするのを聞いた例はない。我々が船首にたゝずんでゐると、月の光りが雲間を洩れて來て、二人は先刻泣き聲を聞いた方向に、なにか白いものが氷原を横切つて動いてゐるのを見た。それはすぐに見えなくなつたが、再び左舷にあらはれて、氷上に投げた影のやうに、はつきりとそれを認めることが出來た。僕はひとりの水夫に命じて、船尾へ鐵砲を取りに遣つた。さうして、僕はムレアドと一緒に浮氷へ降りて行つた。おそらくそれは熊の奴だらうと思つたのである。我々が氷の上に降りた時に、僕はムレアドを見失つてしまつたが、それでも聲のする方へすゝんで行つた。おそらく一哩以上も、僕はその聲を追つて行つたであらう。さうして、氷丘のまはりを走つて、いかにも僕を待つてゐるかのやうに立つてゐる。その頂きへ眞直ぐに登つ、その上から見おろしたが、彼の白い形をしたものはなんであつたか一向にわからない。兎に角に、熊ではなかつた。それは丈が高く、白く、眞直なものであつた。若しそれが男でも、女でもなかつたとしたらば、きつと何かもつと惡いものに違ひないことを保證する。僕は怖くなつて、一生懸命に船の方へ走つて來て、船に乘り込んで漸くほつとした次第である。僕は乘船中、自己の義務を果すべき條款に署名した以上、この船に止まつてはゐるが、日沒後はもう二度と氷の上へは決して行かないぞ。」

これが卽ち彼の物語で、わたしは出來る限り彼の言葉をそのまゝに記述したのである。彼は極力否定してゐるが、私の想像するところでは、彼の見たのは若い熊が後脚で立つてゐた、その姿に相違あ

るまい。そんな怜好は、熊ぎ何か物に驚いたりした時に、いつもよくやることである。覺束ない光りの中で、それが人間の形に見えたのであらう。まして既に神經を多少惱ましてゐる人に於いてをやである。兎に角、それが何であらうとも、こんなことが起つたとのといふことは一種の不幸で、それが多數の船員等に非常に不快な、而白からぬ結果を齎らしたからである。彼等は以前よりも一層むづかしい顏をし、不滿の色がいよ〳〵露骨になつて來た。鯡獵に行かれないのと、彼等のいはゆる物に憑かれた船に留められてゐるのと、この二重の苦情が彼等を驅つて無鐵砲な行爲をなさしめるかも知れない。船員中の最年長者であり、また最も着實な、あの魚銛發射手でさへも、みんなの騷ぎに加はつてゐるのである。

この迷信騷ぎの馬鹿らしい發生を除いては、物事は寧ろ愉快に見えてゐるのである。我々の南方に出來てゐた浮氷は一部溶け去つて、海潮はグリーンランドとスピッツバーゲンの間を走る灣流の一支流に我等の船は在るのだと、私を信ぜしめるほどに暖かになつて來た。船の周圍には、澤山の小海蝦と共に、無數の小さな海月やうみうしなどが集まつて來てゐるので、鯨のみえるといふ見込みはもう十分である。果してその通り、夕食の頃に汐を吹いてゐるのを一頭見かけたが、あんな地位にあつては、船でその跡を追ひかけることは不可能であつた。

九月十三日。ブリッヂの上で、一等運轉士ミルン氏と興味ある會話を試みた。わが船長は水夫等に

は大いなる謎である。私にもさうであつたが、船主にさへも然うであるらしい。ミルン氏の言ふには、航海が終つて、給金濟の手切れになると、クレーグ船長はどこへか行つてしまつて、そのまゝ姿を見せない。再び季節が近づくと、彼はふらり會社の事務所へ靜かに這入つて來て、自分の必要があるかどうかを訊ねるのである。それまでは決してその姿を見ることは出來ない。彼はダンディーに家を持たず、誰一人としてその生立ちを知つてゐる者もない。船長として彼の地位は、まつたく海員としての彼の手腕と、その勇氣や沈着などに對する名聲とに因つてゐるのである。さうして、その名聲も彼が個々の指揮權を托される前に、已に運轉士としての技倆によつて獲得したのであつた。彼はスコットランド人ではなく、その蘇國風の名は假名であるといふのが、皆の一致した意見のやうである。ミルン氏はまたかう考へてゐる——船長といふ職は彼がみづから選み得る中で最も危險な職業であるといふ理由に因つて、單に捕鯨に身を委ねて來たのであつて、彼はあらゆる方法で死を求めてゐるのであると。ミルン氏は又それに就いて數個の例を擧げてゐる。そのうちの一つは、もしそれが果して事實とすれば、寧ろ不思議千萬である。ある時、船長は獵の季節が來ても、例の事務所に姿を見せなかつたので、これに代る者を物色せねばならないことになつた。それは恰も最近の露土戰爭の始まつてゐる時であつた。ところが、その翌年の春、船長が再びその事務所へ戻つて來た時には、彼の横頸には鯉だらけの傷が出來てゐた。彼はいつもこれを襟卷で隱さう隱さうと努めてゐた。彼は戰爭に從事してゐたのであらうといふ、ミルンの推測が果して眞實なりや否やといふことは、私にも

斷言出來ないが、いづれにもせよ、これは確かに不思議なる暗號と言はなければならなかつた。

風は東寄りの方向に吹きまはしてはゐるが、依然ほんの微風である。思ふに、氷は昨日よりも密なるべし。見渡すかぎり白皚々、稀に見る氷の裂け目か、氷丘の黑い影のほかには、一點の遮るものなき一大氷原である。遙か南方に碧い海の狹い通路がみえる。それが我々の逃れ出ることの出來る唯一の道であるが、それさへ日毎に結氷しつつあるのである。船長はみづから重大な責任を感じてゐる。聞けば、馬鈴薯のタンクはもう終りとなり、ビスケットさへ不足を告げてゐるさうである。しかし船長は相變らず無感覺な顏をして、望遠鏡で地平線を見渡しながら、一日の大部分を檣の上の見張所に暮らしてゐる。彼の態度は非常に變り易く、彼はわたしと一緒になるのを自ら避けてゐるらしい。と言つて、何も先夜示したやうな亂暴を再びした譯ではない。

三

午後七時三十分。熟慮の結果、やうやくに得たる私の意見は、我々は狂人に支配されてゐるといふことである。これ以外のものでは、クレーグ船長の非常な斑氣を說明することは不可能である。わたしがこの航海日誌を附けて來たのにまことに幸ひである。我々が彼をどんな種類の監禁の下に置くにしても——この手段は最後のものしとて、私は承認するのみであるが——我々の行爲を正當なるものと證據立てゝる場合には、この日誌がどれほどの役に立つことになるかも知れないからである。全く

不思議なことではあるが、精神錯亂を暗示したのは船長自身であつて、その怪しい行爲の原因が單なる特異の風變りとは認められないのであつた。

彼は約一時間ばかり前に、ブリッヂの上に立つてゐた。さうして、私が後甲板をあちらこちらと歩いてゐる間、絕えず例の望遠鏡でぢつと立つて眺めてゐた。船員の多くは下で茶を喫んでゐた。といふのは、近ごろ見張りが規則正しく續けられなくなつて來たからである。歩くに疲れて、わたしは舷檣に倚りかゝりながら周圍にひろがつてゐる大氷原に、今しも沈まうとしてゐる太陽の投げる澄明な光りを、心から感歎して眺めてゐると、その夢幻の狀態から、わたしは間近かに聞える嗄れ聲のために突然われに復つた。それと同時に、船長があたりをきよろ〳〵見廻しながら降りて來て、わたしのすぐ側に立つてゐるのを見出した。彼は恐れと驚きと、何か喜びの近づいて來るらしい感情とが相爭つてゐるやうな表情で、氷の上を見まもつてゐた。寒いにも拘らず、大きい汗の雫がその額に流れてゐて、彼が恐ろしく興奮してゐることが明かに判つた。その手足は癲癇の發作を今にも起さうとしてゐる人のやうに、ぴり〳〵と引き吊つて來た。その口のあたりの相貌は醜く歪んで、固くなつてゐた。

「見給へ！」と、彼はわたしの手首を捉へて、喘ぎながら言つた。しかし眼は依然として遠い氷の上に注ぎ、頭は幻影の野を横切つて動く何物かを追ふかのやうに徐ろに地平のあなたに向つて動いてゐた。見給へ！　それ、あすこに人が！　氷丘の間に！　今、あつちの後から出て來る！　君、あの女が見えるだらう。——いや、當然見えなければならん！　おゝ、未だあすこに！　わしから逃げて行

く。きつと逃げてゐるのだ――あゝ、行つてしまつた！」

彼はこの最後の一句を、鬱結せる苦痛の呟きを以て發したのである。これは恐らく永久にわたしの記憶から消え去ることはないであらう。彼は繩梯子に取りすがつて、舷檣の頂きに登らうと努めた。それは恰も去りゆくもゝ最後の一瞥を得んと望むかのやうに――。しかし彼の力は足らず、集會室の天窓によろめき退つて來て、そこに彼は喘ぎ疲れて倚りかゝつてしまつた。その顏色は蒼白となつたので、私はきつと彼が意識を失ふものと思つて、時を移さずに彼を伴つて天窓を降りて、船室のソファの上にその體を横へさせた。それから私はその脣にブランデイを注ぎ込んだ。幸ひにそれが卓效を奏して、蒼白な彼の顏には再び血の氣があらはれ、顫へる手足をやうやく落着かせるやうになつた。彼は身を突いて肘を起して、あたりを見まはしてゐたが、われ〳〵二人ぎりであるのを見て、やつと安心したやうに、此方へ來て自分の傍へ坐れと、わたしを手招ぎした。

「君は見たね。」と、この人の性質とはまつたく似合はないやうな、低い畏れたやうな調子で、彼は訊いた。

「いゝえ、何も見ませんでした。」

彼の頭は、再びクッションの上に沈んだ。

「いや、いや、望遠鏡を持つてはゐなかつたらうか。」と、彼は呟いた。「そんな筈がない。僕に彼女をみせたのは望遠鏡だ。それから愛の眼――あの愛の眼を見せたのだ。ねえ、ドクトル給仕を内部へ

入れないで呉れたまへ。彼奴は俺が氣が狂つたと思ふだらうから。その戸に鍵をかけて呉れたまへ。ねえ、君！」

私は立つて、彼のいふ通りにした。

彼は瞑想に呑み込まれたかのやうに、暫らくの間ぢつと横になつてゐたが、やがてまた肘を突いて起き上つて、ブランデイをもつと呉れと言つた。

「君は、思つてはゐないのだね、僕が氣が狂つてゐるとは……」

私がブランデイの壜を裏戸棚にしまつてゐると、彼がかう訊いた。

「さあ、男同士だ。きつぱりと言つて呉れ。君はわしが氣が狂つてゐると思ふかね。」

「船長は、何か心に屈托があるのではありませんか。それが船長を興奮させたり、また非常に苦勞させたりしてゐるのでせう。」と、わたしは答へた。

「その通りだ。君。」と、ブランデイの效目で眼を輝かしながら、船長は叫んだ。「全く澤山の屈托があるのさ。――澤山ある。それでも俺はまだ經緯度を計ることは出來る、六分儀も對數表も正確に扱ふことが出來る。君は法廷で俺を氣違ひだと證明するかゝつて、さも冷靜らしく自分の正氣なることを論じてゐるのを聞いてゐると、わたしは妙な心持になつて來た。

「恐らくそんな證明は出來ないでせう。」と私は言つた。「しかし私は、なるべく早く歸國なすつて、

暫らく靜かな生活を送られた方がよろしからうと思ひます。」
「え、國へ歸れ……。」と、彼はその顏に嘲笑の色を浮べて言つた。「國へ歸るといふのは俺のためで、靜かな生活を送るといふのは君自身のためではないかね、君。フロラ——可愛いフロラと一緒に暮すさね。ところで、君、惡夢は發狂の徵候かね。」
「そんなこともあります。」
「何かその外に徵候はないかね。一番最初の徵候は何かね。」
「頭痛、耳鳴り、眩暈、幻想——まあ、そんなものです。」
「あゝ、何だつて……。」と突然に彼は遮つた。「どんなのを幻想といふのだね。」
「そこに無いものを見るのが幻想です。」
「だつて、あの女はあすこにゐたのだよ。」と、彼は呻くやうに言つた。「あの女はちやんと其處にゐたよ。」
彼は立ち上つて扉をあけ、のろ〳〵と不確な足取りで、船長室へ歩いて行つた。
わたしは疑ひもなく、船長は明朝までその部屋に止まること、思つた。彼がみづから見たと思つた物がどんなものであるとしても、彼の身體は非常な衝動を受けたやうである。船長は日毎にだん〳〵可怪くなつて來る。私は彼自身が暗示したことが本當のことであり、又その理性が冒されてゐるのを恐れた。彼が自己の行爲に關して、何か良心の呵責を受けてゐるのであると、わたしは思はない。こ

んな考へは、高級船員などの間ではあり觸れた考へ方であり、また普通船員の中にあつても矢はり同樣であると信じられる。しかし私は、この考へ方を主張するに足るべき何物をも見たことがない。彼には、罪を犯した人のやうな樣子は少しも見えない。かれは苛酷な運命の取り扱ひを受けて、罪人といふよりは寧ろ殉教者と認むべき人のやうな樣子が多く見られるのであつた。
今夜の風は南に向つて吹き廻つてゐる。希はくば、我々が唯一の安全航路であるところの、あの狹い道路が遮斷されないやうに——。大北極の氷群、卽ち捕鯨者のいはゆる「關所」の端に位してはゐるが、どんな風でも北さへ吹けば、我々の周圍の氷を粉碎して、我々を助けてくれることになる。南の風は解けかゝつた氷をみな我々の背後へ吹きよせて、二つの氷山の間へ我々を挾むのである。どうぞ助かるやうにと、私は重ねて言ふ。

九月十四日。日曜日にして、安息日。わたしの氣遣つてゐたことがいよ〳〵實際となつて現れた。唯一の逃げ道であるべき碧い細長い海水の通路が、南の方から消えて來た。怪しげな氷丘と、奇妙な頂端を持つて動かない一大氷原が、吾人の周圍に連なるのみである。恐ろしいその曠原を蔽ふものは、死の如き沈默である。今や一つの漣もなく、海の鷗の鳴く聲も聞えず、帆を張つた影もなく、たゞ全宇宙に漲る深い深い沈默があるばかりである。その沈默のうちに、水夫等の不平の聲と、白く輝く甲板の上に彼等の靴の軋む音とが、いかにも不調和で不釣合に響くのである。たゞ訪づれたもの

は一匹の北極狐のみで、これも陸上では極めて有りふれたものであるが、氷群の上には稀れである。併しその狐も船に近づかず、遠くから探るやうな様子をした後に、氷を超えて速かに逃げ去つてしまつた。これは不思議な行動といふべきで、北極の狐は一般に人間を全く知らず、また穿鑿好きの性質であるので、容易に捕へられるほど非常に慣れ近づくものであるからである。信ぜられないことのやうであるが、この際こんな些細な事件でさへも、船員等には悪影響を及ぼしたのであつた。

「あの清浄な動物は怪物を知つてゐる。さうだ。我々を見てではなく、あの魔物を見たからなのだ。」といふのが、主だつた魚銛發射手の一人の註釋であつた。さうして、その他の者も皆それに同意を示したので、こんな他愛もない迷信に反對しようとするものさへも、全く無益のことであつた。彼等はこの船の上には呪ひがあると信じ、さうして確にさうであると決定してしまつたのである。

船長は午後の約三十分、後甲板へ出て來る以外は、終日自分の部屋に閉ぢ籠つてゐた。私は彼が後甲板で、昨日彼の幻影が現はれた場所をぢつと見入つてゐるのを見たので、又どうかするのではないかと十分覺悟してゐたが、別に何事も起らなかつた。私はその側近くに立つてゐたが、彼は曾て私を見を様子もなかつた。

機關長がいつもの如くに祈禱をした。捕鯨船のうちで、英蘭教會の祈禱書が常に用ひられるのは可笑しなことである。しかも高級船員のうちにも、普通船員の中にも、決して英蘭教會の者はゐないのである。我々は天主教徒か長老教會派のもので、天主教徒が多數を占めてゐる。そこで、

どちらの信徒にも異なる宗派の儀式が用ひられてゐるのであるから、いづれも自分たちの儀式が好いなどと苦情を言ふことも出來ない。さうしてその遣り方が氣に入つたものであれば、彼等は熱心に傾聽するのである。

かゞやく日没の光りが、大氷原を血の湖のやうに彩つた。私はこんな美しい、又こんな氣味の悪い光景を見たことがない。風は吹きまはしてゐる。北風が二十四時間吹くならば、なほ萬事好都合に運ぶであらう。

四

九月十五日。けふはフロラの誕生日なり。愛する乙女の君よ。君の所謂ボーイなる私が、頭の狂つた船長の下に、わづか數週間の食物しかなくて、氷の中に閉ぢこめられてゐるのが、君には寧ろ見えない方が好いのである。うたがひもなく、彼女はシェットランドから我々の消息が報道されてゐるかどうかと、毎朝スコッツマン紙上の船舶欄を、眼を皿にして見てゐることであらう。私は船員達に手本を示すために、元氣よく、平靜を粧つてゐなければならない。而も神ぞ知ろし召す。——わたしの心は、屢々甚だ重苦しい狀態に在ることを——。

けふの溫度は華氏十九度、微風あり。而も不利なる方向より吹く。船長は非常に機嫌が好い。彼はまた何か他の前兆か幻影を見たと想像してゐるらしい。昨夜は夜通し苦しんだらしく、今朝は早くわ

たしの室へ來て、わたしの寢棚に倚りかゝりながら、あれは妄想であつたよ。君、なんでもないのだよ。」と囁いた。

朝食後、彼は食物がまだどれほどあるかを調べて來るやうに、わたしに命じたので、早速二等運轉士とともに行つたところ、食物は豫期したよりも遙かに少かつた。船の前部に、ビスケットの半分ばかり這入つたタンクが一つと、鹽漬の肉が三樽、それから極めて僅かの珈琲の實と、砂糖とがある。また、後船艙と戸棚の中とに、鮭の鑵詰、スープ、羊肉の旨煮、その他の御馳走がある。しかしそれとても五十人の船員が食つたらば、瞬くひまに無くなつてしまふことであらう。なほ貯藏室に粉二樽と、それから數の知れないほどに煙草が澤山ある。それら全體を引つくるめたところで、各自の食量を半減して、約十八日乃至二十日間ぐらゐを支へ得るだけのものがある——恐らく、それ以上は到底困難であらう。

我々兩人がこの事情を報告すると、船長は全員をあつめて、後甲板の上から一場の訓示を試みた。私はこの時ほどの立派な彼といふものを今まで見たことがない。丈高く引きしまつた體軀、色やゝ淺黑く潑剌たる顏。彼は正に支配者として生まれて來たもののやうであつた。彼は冷靜な海員らしい態度で、諄々として現狀を說いた。その態度は、一方に危險を洞察しながら、他方に有りとあらゆる脫出の機會を狙つてゐることを示すものであつた。

「諸君。」と、彼は言つた。「諸君はうたがひもなく、この苦境に諸君を陷れたものは、この俺であると思つてゐられるであらう。さうして、恐らく諸君の中にはそれを苦々しく思つてゐる者もあるであらう。併し多年の間、この季節にこゝへ來る船の中で、どの船であらうとも、我が北極星號の如く多くの鯨油の金を齎らしたものはなく、諸君も皆その多額の分配にあづかつて來たことを、心に刻んでおいて貰はなければならない。意氣地無しの水夫共は娘つ子たちに會ひたがつて村へ歸つてゆくのに、諸君らは安んじてその妻を後に殘して置いて來たのである。そこで、若し諸君が金儲けが出來たために俺に感謝しなければならぬといふのならば、この冒險に加はつて來たことに對しても、當然、俺に感謝していゝ筈で、つまりこれはお互樣と言ふものである。大膽な冒險を試みて成功したのであるから、今また一つの冒險を企てゝ失敗してゐるからと言つて、それを兎や角いふにはあたらない。たとひ最も惡い場合を想像してみても、我々は氷を橫切つて陸に近づくことも出來る、海豹の貯藏のなかに臥てゐれば、春までは十分生きて行かれる。併しそんな惡いことは滅多に起るものでない。三週間と經たないうちに、諸君は再びスコットランドの海岸を見るであらう。それにしても現在に於いては、いやとも各自の食量を半減して貰はなければならない。同じやうに分配して、誰も餘計にとるやうなことがあつてはならない。諸君は心を强く持つて貰ひたい。さうして、以前に多くの危險を凌いで來たやうに、この後なほ一層の努力を以てそれを防がなければならない。」

彼のこの言葉は、船員等に對して驚くべき效果をあたへた。今までの彼の不人氣は、これに因つてすつかり忘れられてしまつた。迷信家の魚銛發射の老人が先づ萬歲を三唱すると、船員一同は心から

これに合唱したのであつた。

九月十六日。風は夜の間に北に吹き變つて　氷は、解けさうな徴候を示した。食糧を大いに制限されたにも拘らず、船員等はみな機嫌をよくしてゐる。もし危險區域脱出の機會が見えたらば、少しの猶豫もないやうにと、機關室には蒸汽が保たれて、出發の用意が整つてゐる。

船長はまだ例の「死」の相から離れないが、元氣は旺溢してゐる。かう突然に愉快さうになつたので、私は曩に彼が陰氣であつた時よりも更に面喰つた。わたしには到底これを諒解することが出來ない。私はこの日誌の初めの方にそれを擧げたと思ふが、船長の奇癖のうちに、彼は決して他人を自分の部屋へ入れないことがある。現に今もなほそれを實行してゐるのであるが、彼は自身で寢床を始末し、他の船員等にもこれを實行させてゐる。ところが、驚いたことには、今日その部屋の鍵をわたしに渡して、その船室へ降りて行つて、彼が正午の太陽の高度を測つてゐる間、船長の時計で時間を取るやうに私に命令したのであつた。

部屋は洗面臺の數册の書籍とを備へた飾り氣のない小さい室である。壁にかけられた若干の繪のほかには、殆ど何の裝飾もない。それらの多くは油繪まがひの安つぽい石版畫であるが、唯一つわたしの注意をひいたのは若い婦人の顔の水彩畫であつた。それは明かに肖像畫であつて、舟乘りなどが特に心を惹かれるやうな、想像的型の美人ではなかつた。どんな畫家でも、こんな性格と弱さとが妙

に混淆したところのものを、その內面的から描き出すことは、なか〳〵難しいことであつたらう。睫毛の垂れた不活潑さうな物憂い眼と、さうして思案にも心配にも容易に動かされないやうな、廣い平らな顏とは、綺麗に切れて浮き出した顎や、屹と引締つた下唇と、強い對照をなしてゐた。肖像畫の一方の下隅に、一エム・ビー、年十九」と書かれてゐた。僅か十九年の短い生涯に、彼女の顏に刻まれたやうな強い意志の力を現はし得るとは、その時わたしには殆んど信じられなかつた。彼女は定めて非凡な婦人であつたに相違なく、その容貌はわたしに非常な魅力をあたへた。私は單にちらりと見ただけであつたが、若しわたしが製圖家であるならば、この日記に彼女の容貌のあらゆる點を描き出すことが屹と出來るであらう。

彼女はわが船長の生涯に於いて、いかなる役割りを演じたのであらうか。船長はこの繪をその寢床の端にかけて置くので、彼の眼は絕えずこの畫の上に注がれてゐる筈である。若し船長がもつと無遠慮であつたらば、何かこのことに關して觀察することも出來たのであらうが、彼は無口で捻へ目の性質であつたので、奧深く觀察が出來なかつたのである。彼の室內の他のものに就いては、何等記錄に値するやうなものはなかつた。——卽ち船長服、携帶用の床几、小形の望遠鏡、煙草の鑵、幾つかのパイプ及び水煙管——因に、この水煙管は船長が戰爭に參加したといふミルン氏の物語に少しく色を附けるが、その聯想は寧ろ當らないらしい。

午後十一時二十分。船長は長いあひだ雜談に花を咲かせた後、たつた今寢床に就いた。彼が氣の向

いてゐるときは、實に惚れぼれするやうな好い相手である。非常に博識で、而も獨斷的に見ゆることなしに、強く自己の意見を表示する力を持つてゐる。それを思ふと、わたしは自分の頭のよく働かないのが忌になる。

彼は靈魂の性質について話した。さうして、アリストートルやプラトーンの說をよく消化して、問題のうちに點出した。彼は輪廻を學び、ピタゴラス（紀元前のギリシャの哲學者）の說を信ずるもののやうである。それ等を論じてゐるうちに、我々は降神術の問題に觸れた。私はスレードの詐欺に對して、ふざけた引喩をしたところ、彼は有罪と無罪とを混同しないやうにと、甚だ熱心にわたしに向つて警告した。さうして、基督敎と邪敎とを等しく心に刻するのはし正い議論である。なぜなれば、基督敎を詐はり裝つたユダは惡漢であつたと彼は論じた。それから間もなく、彼はお寢みと言つて、自分の部屋へ退いて行つた。

風は新たになり、確に北から吹いてゐる。夜は英國の夜のごとくに暗い。明日は、この氷の桎梏から逃れ得ることを祈る。

九月十七日、再び妖怪騷ぎ。ありがたいことに、わたしは至極大膽である。意氣地のない水夫等の迷信と、熱心なる自信を以て彼等が語る詳細の報告とは、彼等の平生に慣れてゐない者を戰慄させるであらう。

妖怪事件については、多くの說がある。併しそれらを要約すれば、何か怪しいものが船の周圍を終夜飛びあるくといふのである。ピーターヘッドのサイディ・ムドナルドもそれを見たといひ、シェットランドの脊高のつぽうのピーター・ウヰリアムソンもそれを見たといひ、ミルン氏も亦ブリッヂで確に見たといふ。これで都合三人の證人があるので、二等運轉士が見た時よりは、船員の主張が一層有力になつて來た。

朝食の後、私はミルン氏に話して、かういふ馬鹿馬鹿しいことには超然としてゐなければならず、又他の船員等によい手本を示さなければならないと言つてやつた。ところが、彼は例に依つて何かを豫言するやうに、風雨に曝されたその頭を掉つて、特殊の注意を拂ひながら答へたのは、かうであつた——。

「恐らく然うであるかも知れず、さうでないかも知れないよ、ドクトル。」と彼は言つた。「僕はそれを幽靈と呼びはしなかつた。これに就いては色々の言ひ分もあるが、僕は海妖怪や、この種のものに就いて、自分の信條を本當らしく言ひ拵へるやうなことはしない積りだ。僕はむやみに怖がるのではない。併し明るい日中に兎や角言はず、若し君がゆうべ僕と一緒にゐて、あの怖ろしい形をした、白い無氣味なものが、あつちへ行つたり、こつちへ來たりして、丁度母親を失つた仔羊のやうに、闇のなかを泣き叫ぶのを見たら、恐らく君だつてぞつとしたらうと思ふ。さうすれば、君も、馬鹿馬鹿しい話だなどと、さう簡單には片付けてしまはないだらうよ。」

私は彼を説きつける望みはないと思つて、この次にもし又幽靈があらはれたらば、私を呼び上げてくれるやうに特に賴んで置くの外はなかつた。――この賴みを、彼は「そのやうな機會は決して來ないやうに」との願ひをあらはす祈禱の詞を以て、兎も角も承知だけはすることになつた。

五

私が望んだごとく、我々の背後の氷面が破れて、細い水の條が現はれて來た。それが遠く全體に亙つて擴がつてゐる。今日我々が在るところの緯度は北緯八十度五十二分で、これは卽ち氷群に南からの強い潮流がまじつてゐることを示すのである。風が都合よく吹きつゞくならば、結氷と同じ速さでまた解氷するであらう。現在の我々は、煙草をふかして機會を待ち望むの他に何事も手につかない。私は急激に運命論者にならんとしつゝある。風や氷のやうな、兎かく不確實な要素のものばかりを取扱つてゐると、人間もしまひには然うならざるを得ない。マホメットの最初の從者等の心を運命に從はしめたものは、恐らくアラビア砂漠の風か砂であつたらう。

このやうな妖怪騷ぎが、船長に對して非常に惡い影響を與へてしまつた。わたしは彼の敏感な心を刺戟するのを恐れて、この馬鹿馬鹿しい話を隱さうと努めてゐたが、不幸にして彼は船員の一人がこの話を仄めかしてゐるのを洩れ聞いて、どうしてもそれを聞かうと言ひ出した。さうして、私が豫期した通り、それが爲に船長の一旦鎭まつてゐた心がまた大いに狂ひ出した。これが昨夜、最も批判的

聰明と最も冷靜なる判斷とを以て、哲學を論じたその同一人とは、到底信ぜられなかつた。彼は後甲板を檻のなかの虎のやうにあちらこちらと歩き廻つてゐる。時々に立ち停まつて、恍惚とした樣子で手を突き出しながら、何か堪へられないやうに氷の上を見入つてゐるのである。

彼は絕えず呟いてゐる。さうして一度「ほんの些つとの間、愛して――ほんの些つとの間！」と叫んだ。あゝ可哀さうに、立派な海員にして敎養ある紳士が、こんな境遇に落ちてゆくのを見るのは悲しいことである。また眞の危險も唯生活の一刺戟に過ぎぬとしてゐるやうな船長の心を、あの空想と妄想とが威嚇するかと思ふと、更に悲しくなるのである。發狂せる船長と、幽靈に怯えてゐる運轉士との間に、曾て私のやうな地位に立つた者があるだらうか。わたしは時々に思ふのであるが、恐らくあの二等機關手を除いては、私がこの船中で唯一人の正氣の人間ではあるまいか。しかし彼の機關手も一種の冥想家で、彼を獨りで置く限り、又その道具を搔き亂さない限り、彼は紅海の惡魔に關するほかは何も注意しないのである。

氷は依然として速かに開いてゐる。明朝出發することが出來さうな見込みは十分である。國へ歸つて、これまでにあつた不思議な出來事を話したらば、みんなはきつと私が作り話をしてゐると思ふであらう。

午後十二時。私は實にもうぞつとしてしまつた。今は幾分落着いては來たが、これとても強いブランデイを一杯引つかけたお蔭である。以下この日記が證明するやうに、私は未だ全く自己を取戻して

はゐないのである。私は非常に不思議な經驗を味はつた。さうして、私にはどうしても合理的だとは思はれないやうな事物を、彼等は確に見たといふので、私は船中の者をみな狂人ときめてしまつたが今となつてはそれが果して正しいかどうか、甚だ疑はしくなつて來たのである。あゝ、こんなつまらないことに神經を奪はれてしまふとは、私も何といふ大馬鹿者であらう。これは總ての馬鹿騒ぎの後から起つたことであるが、こゝに書き加へる價値のあると思ふ。いつも馬鹿にしてゐたことも、今自らこれを經驗するに及んで、最早マンスン氏の話も、例の運轉士の話も、いづれもこれを疑ふことが出來なくなつたからである。

畢竟これとて大したことではない——ただ一つの音だけであつたに過ぎない。私はこの日記を讀まれる人が、いつかこの條を讀むとしても、わたしの感情と共鳴し、或はその時わたしに及ぼしたやうな結果を實感せられるであらうとは思はない。

さて夕食が終つて、私は寢に就く前に、しづかに煙草をふかさうと思つて、甲板へ登つて行つた。夜は甚だ暗く——その暗さは、船尾端艇の下に立つてゐてさへも、ブリッヂの上にゐる運轉士の姿が見えないほどであつた。前にも言つた通り、非常な沈默がこの氷の海に充ち滿ちてゐるのである。この世界の他の部分では、たとひ如何に不毛の地であらうとも、微かながらも大氣の振動といふものがある。——遠くの人の集まつてゐる處からも、或は木の葉から、或は鳥の翼から、又は地を蔽ふ草の微かなざわめきの音からさへも、何か微かな響きがあるものである。人間は積極的に音響を知覺こそ

しないが、若し音といふものが全然無くなつてしまふと、實に物足りなくて寂しいものである。測り知られざる眞の靜けさが、あらゆる現實の無氣味さをもつて、我々の上に押迫つてゐるのは、こゝ北極の海に於いてのみで、僅かな吃きの聲をも捉へんとして緊張し、船中に鳥渡起つた小さい物音にまでも熱心に注意する、われと我が鼓膜に氣が付くのである。

こんな心持で、わたしは舷檣にひとり倚りかゝつてゐると、殆ど私のすぐ下の氷から、夜の靜寂の空氣を破つて、鋭い尖つた叫び聲が響いて來た。最初は恰も樂劇の首歌妓も及ばぬやうな佳い音調でそれがだん〳〵に調子を上げて、遂にその頂點は苦痛の長い號泣と變つてしまつた。これは死者の最後の絶叫であつたかも知れない。この物凄い絶叫は、今もなほ私の耳に響いてゐる。悲哀——いふに言はれぬ悲哀がその中に表はされてゐるかのやうで、また非常な熱望と、それを貫いて時々に狂喜の亂調とが伴つてゐた。それは私のすぐ傍から叫び出したのであるが、わたしが暗闇のうちをぢつと見詰めた時には、何も見分けることは出來なかつた。私はやゝ暫らく待つてゐたが、再びその音を聞くことがなかつたので、そのまゝに降りて來た。實にわたしはわが全生涯中に曾て覺えない戰慄を感じながら——。

明り取りのあるところを降りて來ると、見張番交代に上つて來るミルン氏に逢つた。

「さて、ドクトル。」と彼は言つた。「おそらくそれは馬鹿な話だらうよ。君はあの金切聲を聞かなかつたかね。多分それは迷信だらうよ。君は今どうお考へだね。」

私はこの正直な男に詫を言ひ、さうして私もまた彼と同じやうに惑つてゐることを認めなければならなかつた。恐らく明日はわたしの考へも違つて來るであらう。而も今の私は自分の考へをすべて書き記す勇氣は殆どない。他日これらの忌な聯想を一切振り落した曉に再びこれを讀んで、わたしは屹と自分の臆病を笑ふであらう。

九月十八日。わたしは猶、彼の奇妙な聲に惱まされつゝ、落着かない不安の一夜を過した。船長も安眠したやうには見えない。その顏は蒼白で、眼は血走つてゐた。

私は昨夜の冒險を彼に話さなかつた。いや、今後とても決して話すまい。彼はもう落着といふものが少しもなく、全く興奮してゐる。そはくと立つたり居たりして、少しの間もぢつとしてゐることが出來ないらしい。

今朝はわたしの豫期のごとく、鮮やかな通路が群氷のうちに現はれたので、やうやくに氷錨を解いて、西南西の方向に約十二哩ほど進むことが出來たが、又もや一大浮氷に妨げられて、そこに餘儀なく停船することゝなつた。この氷山は、我々が後に殘して來たいづれもに劣らない巨大なものである。これが全く我々の進路を防害したために、われくは再び投錨して、氷の解けるのを待つの外には、どうすることも出來なくなつたのである。尤も風が吹きつゞけさへゐれば、恐らく二十四時間以内には氷は解けるであらう。鼻のふくれた海豹數頭が水中に泳いでゐるのが見えたので、その一頭

を射止めると、十一呎以上の實に素晴らしい奴であつた。彼等は獰猛な喧嘩好きの動物で、優に熊以上の力があると言はれてゐるが、幸ひにその動作は鈍く不器用なので、氷の上で彼等を襲つても殆ど危險といふものがない。

船長はこれが苦勞の仕納めだとは全然思つてゐないやうであつた。他の船員等はみな奇蹟的脫出をなし得たと考へて、もはや廣い大海へ出るのは確實であると思つてゐるのに、何故に船長は事態を悲觀的にのみ見てゐるのか、わたしには到底測り知られないことである。

「ドクトル。察するに、君はもう大丈夫だと思つてゐるね。」と、夕食の後、一緒にゐる時に船長は言つた。

「さう有りたいものです。」と、私は答へた。

「だが、餘り樂觀してはならない。——尤も確なことは確だが……。われくは皆、間もなく自分自分の本當の愛人のところへ行かれるのだよ。ねえ、君、さうではないかね。併しあまり樂觀してはならない。——樂觀し過ぎてはならないね。」

彼は考へ深さうに、その足を前後に搖りながら、暫く默つてゐた。

「おい君。」と、彼はつゞけた。「こゝは危險な場所だよ。一番好い時でも、いつどんな變化があるか分らない危險な場所だ。俺はこんなところで、全く突然に人が遣られるのを知つてゐる。ちよつとした失策の躓み外しが、時々さういふ結果を惹き起すのだ。——僅か一つの失策で氷の裂け目に陷落し

で、後には線の泡が人の沈んだところを示すばかりだ。まつたく不思議だね。」彼は神經質のやうな笑ひ方をしながら、なほも語り續けた。「隨分長い間、毎年俺はこの國へ來たものだが、まだ一度も遺言狀を作らうなどと考へたことはない。——もつとも特に後に殘すやうなものが何も無いからでもあるが……。併し人間が危險に曝されてゐる場合には、宜しく萬事を處理し、また用意して置くべきだと思ふが、どうだね。」

「さうです。」と、私は一體彼が何を思つてゐるのかと怪しみながら答へた。

「誰にしたところが、それが皆決めてあると思へば安心するものだ。」と、彼は又言つた、「そこで、何か俺の身の上に起つたら、どうか俺に代つて君が諸事を處理してくれ給へ。俺の船室には大したものもないが、まあそんな詰まらないものでも賣拂つてしまつて、その代金は鯨油の代金が船員のあひだに分配されるやうに、平等に彼等に分配してやつてくれ給へ。時計は、この航海のほんの記念として、君が取つて置いてくれ。勿論、これは唯あらかじめ用心して置くといふに過ぎないが、俺はこれをいつか君に話さう話さうと思つて、機會を待つてゐたのだ。もし何かの必要のある場合には、俺は君の厄介になるだらうと思ふがね。」

「まつたくさうです。」と、私は答へた。「船長さんがかういふ手段をとられるからには、わたしもまだ……。」

「君は……君は……。」と、彼は遮つた。「君は大丈夫だ。一體、君に何の關係があらうか。俺は

短氣なことを言つたわけではない。やうやく一人前になつたばかりの若い人が、「死」などといふことに就いて考へてゐるのを、聞いてゐるのは忌だ。さあ、船室のなかの下らない話はもう止めにして、甲板へ行つて新鮮の氣を吸はうではないか。俺もさうして元氣をつけよう。」

この會話について考へれば考へるほど、私はますく忌な心持になつて來た。あらゆる危險を逃れ得られさうな時に、なぜ遺言などをする必要があるのであらう。彼の氣まぐれには、きつと何かの方法があるに相違ない。彼は自殺を考へてゐるのであらうか。私はある時、彼が自己破壞の忌はしい罪であることを、非常に敬虔な態度で語つたのを記憶してゐる。併し今の私は、彼から眼を離すまい。その私室へ闖入することは出來ないにしても、少くも彼が甲板にある限りは、私もかならず甲板に止まつてゐることにしようと思つた。

ミルン氏はわたしの恐怖を嘲笑して、それは單に「船長のちよつとした癖」に過ぎないと言つてゐる。彼は甚だ事態を樂觀してゐるのである。その言ふところによれば、明後日までには我々は鎖された氷から脫出することが出來る。それから二日にしてジャン・メーエンを過ぎ、また一週間ばかりにしてシェットランドが見られるであらうと——。どうか、彼が樂觀し過ぎてゐなければ好いがと思ふ。尤も彼の意見は、船長の悲觀的な考へとは違つて、おそらく公平な判斷であらう。彼は種々の古い經驗に富んだ海員であつて、何でも物事をよく熟考した上でなくては、容易に口をきかないといふ人であるから——。

六

長い間、將に來らんとしてゐた不幸の大團圓が、遂に來てしまつた。私はそれをどう書いて好いか殆どわからない。船長は行つてしまつた。或は彼は再び生きて歸るかも知れない。併し恐らく――恐らくそれは絶望であらう。

今は九月十九日の午前七時である。わたしは何か彼の足跡にでも逢着することもあるまいかと、水夫の一隊を伴つて、終夜前方の氷山を歩きまはつたが、それは徒勞に終つた。わたしは彼の行方不明について、こゝに少しく書いてみよう。若し他日これを讀む人があつたならば、これは臆測や傳聞によつて書いたものではなく、正氣の、しかも教育あるわたしが、自分の眼前に現に發生したことを正確に記述してゐるものであることを必ず承知して貰ひたい。私の推量は――それは單に私自身の推量であるに相違ないが、その事實に對しては私は飽までも責任を持つのである。

前述の會話の後、船長はまつたく元氣であつた。しかし屢々その姿勢を變へたり、彼の癖の舞踏病的な方法でその手足を動かしたりして、神經質さうに苛々してゐるやうに見えた。彼は十五分間に七度も甲板へ上つて行つた。さうして、二三歩も大股に急ぎ足で甲板を歩いたかと思ふと、また直ぐに降りて來る。わたしはその都度に附いて行つた。彼の顏の上に、なんとなく不安な影が漂つてゐるのが見えたからである。彼は私のこの懸念を悟つたらしく、私を安心させようとして殊更に快活を粧ひ、

ほんの詰まらない冗談にも、わざとから〳〵と笑つたりして見せた。

夜食の後、彼は再び船尾の高甲板へ登つた。夜は暗く、圓材にあたる風のひう〳〵といふ陰氣な音を除いては、全く靜寂であつた。密雲が北西の方から押寄せて來て、その雲の投げた粗い觸角が、月の面を横ぎつて流れてゐた。月はこの雲間を透して時々に照るのである。船長は足早に往つたり來たりしてゐたが、私がまだ附いて來てゐるのを見て、彼はわたしの側へ來て、下へ行つたら好いだらうと言ふことを謎かけるやうに言ふのであつた。――それは言ふまでもなく、甲板に止まつてゐようとする私の決心をます〳〵強めるものであつた。

この後、彼は私の存在を忘れたやうに、默つて船尾の手摺に倚りかゝつて、一部分は暗く、一部分は月のひかりに朧ろに輝いてゐる大氷原のあなたを、目瞬ぎもせずに見詰めてゐたのである。わたしは彼の動作によつて、彼が幾たびか懷中時計をながめてゐるのを見た。彼は一度、何か短い文句をつぶやいたが、唯その中の「もういゝよ。」といふ一語しか聽き取れなかつた。闇に浮ぶ船長の大きい朦朧とした姿をながめ、更に彼が恰も媾曳きの約束を守る人がぼんやりと物を考へてゐるやうな姿で立つてゐるのを見た時、わたしは全身にさつと不氣味な寒さを感じたことを白狀する。併し誰との逢引きであらう。私が一つの事實と他の事實とを接ぎあはせた時、ある朧ろげな觀念は浮んで來たけれども、その結論はやはり纏まらないのであつた。

彼が突然に熱狂したやうな樣子を示したので、わたしは當然彼が何かを見たと思つた。私はそつと

その背後に忍び寄ると、彼は船と一直線上を速かに飛んでゐる霧の圏のやうなものを熱心に見つめてゐた。それは形のない朦朧たる一種の星雲體のもので、それに月の光がさした時、ある時は大きく、ある時は小さく見えるのである。月はこの時、恰もアネモネの覆ひのやうに、極めて薄い雲の天蓋を以て、その光を小暗くしてゐた。

「あゝやつて來るよ。あの娘が……。あゝ、遣つて來るよ。」と、測り知られぬ優しさと、憐みの籠つた聲で、船長は叫んだ。それは恰も長いあひだ待ち設けてゐた愛情を以て、可愛い者を慰めて遣るやうに——。さうして又、愛を與へるのは、受けるのと同じく愉快であると言つたやうに——。

その次のことはまつたく瞬間的に突發したのであつて、私には何とも手の下しやうがなかつた。彼は舷檣の天邊に向つて飛んだ。それから再び飛ぶと、彼は已に氷の上にあつて、彼の蒼白い朦朧たる物の足もとに立つたのである。彼はそれを抱くやうに兩手を衝と差出した。さうして、兩方の腕をひろげて、何か色めいた言葉を口にしながら、闇の中へ眞慕地に走り去つた。わたしは硬くなつて突つ立つたまゝで、その聲が遠く消えてしまふまで、闇に吸はれてゆく彼の姿を、大きい眼で見送つてゐた。わたしは再び彼の姿を見ようとは思はなかつた。ところが、その瞬間に月は雲の間から皎々と輝き出でゝ、大氷原の上を照らしたので、わたしは氷原を横切つて非常の速力で走つてゆく彼の黑影を、遙かに遠いあなたに認めた。これが彼に對する我々の最後の一瞥であつた。——恐らく永久にさうであらう。

間もなく追跡隊が組織されて、私もそれに加はつたが、みんなの氣が張つてゐないので、何を見出すことも出來なかつた。數時間以内には、更にもう一度、捜索が試みられる筈である。私はこれらのことを書きながら、自分は夢でも見てゐるのか、或は何か怖ろしい夢魔にでも魘はれてゐるやうな心持がしてならない。

午後七時三十分。第二回の船長捜索から、疲れ切つてたゞいま歸つて來た。捜索は不成巧である。この氷山は途方もなく廣いので、われ〳〵はその上をすくなくも二十哩は歩いたが、行けども行けども果てしがありさうにも思はれなかつた。寒氣は近ごろ非常に嚴しいので、氷の上に降り積む雪が御影石のやうにかたくなつてゐる。こんなことさへなければ、船長の足跡ぐらゐは直ぐに見付けられたであらう。

船員等は纜を解いて、氷山を迂回して南方に向つて船を進めようと頻りに燥つてゐる。氷も夜の間は開けて、海水は地平線上に見えてゐるからである。彼等は「クレーグ船長は屹と死んでゐる。それであるから、われ〳〵に脱出の機會があるにも拘はらず、こゝにぐづ〳〵してゐるのは、くだらなくみんな生命の質をするものである。」と論じてゐる。ミルン氏とわたしとが大いに盡力して、やうやう明日の晩まで待つやうに一同を説き伏せたが、それ以上は如何なる事情があつても、出發を延期しないと約束させられてしまつた。そこで、われ〳〵は數時間の睡眠を取つた上で、最後の捜索に出

發するやうに提議したのであつた。

九月二十日、夜。わたしは今朝、氷山の南部を探索に出發し、ミルン氏は北の方へ出發した。十哩乃至十二哩の間、およそ生きてゐるもの、影といふものは全く見られず、たゞ一羽の鳥がわれ〳〵の頭の上を高く飛んで行つたばかりである。その飛び方によりて、私はそれを鷹だと思つた。氷原の南端は狹い岬のやうに、その尖端が細まつて海中に突出してゐる。この岬の麓へ來た時に、一行は足を停めてしまつた。併し私はいかなる機會をも等閑にしなかつたといふ滿足を得たかつたので、岬の行き止まりまで探して見るやうにと、みんなに賴んだ。

百ヤードほど行くか行かぬに、ピーターヘッドのムドナルドが、我々の前方に何か見えると叫んで走り出した。我々も亦ちらりとそれを見て走り出した。最初はそれが白い氷に對して、ぼんやりと黑く見えただけであつたが、近づくにつれてそれは人の形をなして來た。さうしてしまひには、我々が搜してゐるその人の形となつて現はれたのである。彼は氷の土手に俯向きに倒れてゐた。多くの小さな氷柱や、雪の小片が、倒れてゐる彼の上に吹きつけて、黑い水兵着の上にきらと光つてゐた。

我々が近づいてゆくと、俄に一陣の旋風がさつと吹いて來て、粉々たる雪片を空中に卷き上げたが、その一部は落ちて來て、また再び風に乘つて、海の方へ速かに飛んで行つてしまつた。わたしの眼にはそれが單に吹雪としか見えなかつたが、同行者の多くの者の眼には、それが婦人の形をして立

上り、屍の上に屈んでこれに接吻し、それから氷山を横ぎつて急いで飛び去つたやうに見えたと言ふのであつた。私は何事によらず、それがどんなに奇妙に思はれても、他人の意見を決して嘲笑しないやうにこれまで仕馴れて來た。確に、ニコラス・クレーグ船長は悼ましい死を遂げたのではなかつたものと思ふ。彼の青く押付けたやうな顏には、輝かしい微笑を含んでゐる。さうして、死のあなたに横はる暗い世界へ彼を招いた不思議の訪問者を捉へるかのやうに、彼はなほ兩手を突き出してゐるのである。

我々は彼を船旗に包み、足もとに三十二磅彈を置いて、その日の午後に彼を葬つた。わたしが弔辭を讀んだ時、荒くれた水夫等はみな子供のやうに泣いた。それといふのも、そこにゐる多くの者は彼の親切な心に感じてゐたのである。さうして、今こそその愛情を示すことが出來たのである。彼の生きてゐる時には例の不思議な癖で、彼は寧ろかういふ愛情を不快に感じて、いつも拒絕して來たのであつた。

船長の屍は、鈍い寂しい飛沫をあげて、船の格子を離れて行つた。私は青い水面を凝視してゐると、その屍は低く低く、遂に永久の暗黑に搖めく白い小さい斑點となつて、それさへもやがて見えなくなつてしまつた。祕密や、悲哀や、神祕や、凡るものを彼の胸に深く祕めて、復活の日まで彼はそこに横はつてゐるのであらう。その復活の日には、海はその死者を放ち、わがニコラス・クレーグは笑をたゝへ、彼の硬ばつた腕を突き出して挨拶しながら、氷の間から現れて來るであらう。彼の運

命がこの世に於けるよりは、あの世に於いて一層幸福ならんことを、私は切に祈るものである。

私はもうこの日記を止めにしよう。我々の歸路は平穩無事であり、大氷原もやがては單に過去の思ひ出となるであらう。少し經てば、私はこの事件によつて受けた衝動に打克つことが出來よう。この航海日誌をつけ始めた時、私はそれを終りまで書かなければならないとは考へてゐなかつた。私は人のゐない船室でこれを書いてゐる。今もなほ時々にびくりとしたり、又は頭の上の甲板に死んだ人の神經的な早い跫音を聞くやうに思つたりして――。

私は今晩、かねて私の義務であつたので、公正證書のために彼の動產表を作らうと思つて、船長室へ這入つてみると、すべての物は以前に這入つた時と少しも變つてゐなかつた。たゞ彼の婦人の寫眞だけが――これは船長の寢床の端にかけられてゐたと言つたが――小刀のやうなものでその枠から切取られて、ゆくへ知れずになつてゐた。これを不思議な證跡の連鎖となるべき最後のものとして、私は「北極星號」のこの航海日誌の筆を擱く。

（附記）――父のジョン・マリスター・レー醫師の註。――わたしは自分の倅の航海日誌に書かれてゐる、北極星號の船長の死に關する不思議な出來事を通讀した。すべての事が正に記述のごとくに起つたといふことは、私の十分に信ずるところであり、又實際、最も正確なことである。といふのは、彼は眞實を語ることには、最も慎重な注意を拂ふものであることを知つてゐる。且

つ又、この物語は一見非常に曖昧糢糊としてゐるところから、私は長い間その出版に反對してゐたのであるが、二三日前、この問題について獨立的な確實の證據を握つたので、それによつて新らしい光明が與へられることゝなつた。わたしは英國醫學協會の會合に出席するために、エジンバラへ行つたことがある。そこでドクトルP氏に出逢つた。氏は古い大學の同窓生で、今はデボンシャーのサルタッシに開業してゐるのである。倅のこの經驗談をわたしが物語ると、彼はその人をよく知つてゐると言つた。更に少なからず驚いたことには、私に彼の船長の人相書をあたへた。それは船長がやゝ少し若く描いてゐる外は、この日誌に記されたところと全く符合してゐるのである。彼の說明によれば、その船長はコーニッシ海岸に住んでゐる非常に美しい若い婦人と許嫁の仲であつた。ところが、彼が航海の留守中にその婦人は奇怪なる恐怖が原因をなして死んでしまつたとか言ふのであつた。

――終――

廢宅

（ホフマン）

諸君は已に、私が去年の夏の大部分をX市に過したことを御承知であらう――と、テオドルは話した。

そこで出逢つた大勢の舊友や、自由な快濶な生活や、種々な藝術的竝びに學問上の興味――かうした總てのことが一緒になつて、この都會に私の腰をおちつかせてしまつたが、まつたく今までにあんなに愉快なことはなかつた。わたしは一人で街を散歩して、或は飾窓の繪や、塀のビラを眺め、或は窃に往來の人々の運勢を占つたりして、私の若い時からの嗜好を滿足させてゐた。

このX市には、町の門に達する廣い竝木の通があつて、美しい建築物が軒をならべてゐた。言はばこの竝木通りは富と流行の集合地である。宮殿のやうな高樓の階下は、贅澤品を賣付けようと燥つてゐる商店で、その上のアパートメントには富裕な人達が住んでゐた。一流のホテルや外國の使節などの邸宅もみなこの竝木通りにあつた。かう言へば、諸君はかうした町が近代的生活と悅樂との焦點になつてゐることを容易に想像するであらう。

私は度々この竝木通りを散歩してゐるうちに、ある日、他の建築物に比べて實に異樣な感じのする

一軒の家を不圖見つけた。諸君、二つの立派な大建築に挾まれて、幅廣の四つの窓しかない低い二階家を心に描いて御覽んなさい。その二階は隣の階下の天井より僅に少し高い位で、然も荒るゝが儘に荒れ果てた屋根や、硝子の代りに紙を貼つた窓や、色も何も失つてゐる塀や、それらが何年もこゝに手入れをしないと言ふことを物語つてゐた。これが富と文化の中心地の眞中に立つてゐるのであるから、實に驚くではないか。よく見ると、二階の窓に堅く扉を閉め切つてカアテンを卸してあるばかりか、往來から階下の窓を覗かれないやうに塀を作つてあるらしい。隅の方に附いてゐる門が入口であらうが、掛金や錠前らしいものもなければ、呼鈴さへも無い。これは空家に相違ないと私は思つた。

一日の中、何時そこを通つても、家内に人間が住んでゐるらしい樣子は更に見えなかつた。

私が屢々不思議な世界を見たと言つて、自分の透視眼を誇つてゐる事は、どなたもよく御承知であらう。さうして、諸君はそんな世界を常識から觀て、或は否定し、或は一笑に附せらるるであらう。私自身も後になつて考へると、それが一向不思議でも何でもないことを發見するやうな實例が屢々あつた事を白狀しなければならない。そこで今度も最初のうちは、私もおどろかすやうなこの異樣な廢宅も、又いつもの例ではないかと考へたのである。併しこの話の要點を聞けば、諸君も成程と首肯かれるに相違ない。先づこれからの話をお聽きください。

ある日、當世風の人達がこの竝木通りを散歩する時刻に、私は例によつてこの廢宅の前に立つて、ぢつと考へ込んでゐると、私の傍へ來て私を見つめてゐる人のあることを突然に感じた。その人はP

伯爵であつた。伯爵私しに向つて、この空家は隣の立派な菓子屋の工場である。階下の窓の塀はたゞ窯のためにこしらへたもので、二階の窓の厚いカーテンは商賣物の菓子に日光が當らないやうに卸してあるまでのことで、別になんの秘密があるわけでは無いと敎へてくれた。それを聞かされて、私はバケツの冷い水をだしぬけに打つ掛けられたやうに感じた。併しそれが菓子屋の工場であるといふ伯爵の話を何分にも信用することが出來なかつた。それは恰もお伽噺を聞いた子供が、本當にあつたことだと信じてゐながらも、不圖した氣まぐれにそれを謊だと思つてみるやうな心持であつた。併し私は自分が馬鹿であると言ふことに氣が注いた。彼の家は依然として其外形になんの變化もなく、種々の空想は自然に私の頭の中から消えてしまつた。ところが、ある日偶然の出來事から再び私の空想が働き出すやうになつたのである。

私はいつもの通りにこの並木通りを散歩しながら、彼の廢宅の前まで來ると、無意識に二階のカアテンの下りてゐる窓をみあげた。その時、菓子屋の方に接近してゐる最後の窓のカアテンが動き出して、片手が、と思ふ間に一本の腕がその襞の間から現れた。私は早速にポケットからオペラグラスを把り出して見ると、實に肉附きの好い美しい女の手で、その小指には大きいダイヤモンドが異樣にかがやき、その白い膨よかな腕には寶石を鏤めた腕環が煌いてゐた。その手は妙な形をしたひよろ長い硝子罎を窓の張出しに置いて、再びカアテンのうしろへ消えてしまつた。

それを見て、わたしは石のやうに冷くなつて立停まつたが、やがて極度の愉快と恐怖とが入りまじ

つたやうな感動が電流の溫か味を以て、からだ中を流れ渡つた。わたしはこの不思議な窓を見あげてゐるうちに、おのづと心の奥から希望の溜息が溢れ出して來たのである。而も再び我に復つてみるとわたしの周圍には物珍しさうな顏をして彼の窓をみあげてゐる見物人が一杯に突つ立つてゐるではないか。わたしが腹が立つたので、誰にも覺られないやうに、その人垣をぬけてしまつた。すると、今度は常識といふ平凡きはまる惡魔めがわたしの耳の傍で、お前が今見たのは日曜日の晴衣をきた金持の菓子屋のおかみさんが、薔薇香水か何かをこしらへるために使つた空罎を窓の張出しに置いただけのことだと囁きはじめた。考へてみると、或はさうかも知れない。而もその途端に、非常な名案が浮んだのでわたしは路を引返して、鏡のやうに磨き立てた菓子屋の店へ這入つた。先づチ■コレートを一杯註文して、それを悠々と飲みながら、わたしは菓子屋の職人に言つた。

「君は隣にうまい建物を持つてゐるぢやあないか。」

相手はわたしの言葉の意味が判らないと見えて、帳場に倚りかゝりながら怪訝らしい微笑を浮べて私を見てゐるのであるので、私はあの空家を工場にしてゐるのは悧口な遣方だと、私の意見をくり返して言つた

「御冗談でせう、旦那。一體隣りの家がわたし達の店の物だなんて、誰からお聞きになつたんです。」と、職人は口を切つた。わたしが探索の計畫は不幸にして失敗したのである。併しこの男の言葉から察すると、あの空家には何かの曰くがあるらしいやうな氣もするのであつた。諸君はわたしがこの男

から彼の廢宅について右のやうな話を聞き出して、どんなに愉快を感じたかを想像することが出來るであらう。

「わたしもよくは知りませんが、何でもあの家はZ伯爵の持物だと言ふことだけは確です。伯爵の令嬢は當時御領地の方に住んでゐて、もう何年もこゝへはお見えになりません。人の話を聞くと、あの家もまだ當今のやうな立派な建物が出來ない昔には、なか〳〵洒落たお邸で、この竝木通りの名物だつたさうでしたが、今ぢやあもう何年となく空家同樣に打つちやらかしてあるんです。それでもあすこには、人に逢ふのが嫌ひだといふ偏屈な執事の爺さんと、馬鹿に不景氣な犬がゐましてね。犬の奴め、時々に裏の庭で月に吠え付いてゐますよ。世間ぢやあ幽靈が出るなんて言つてゐますが、實のところ、この店を持つてゐるわたしの兄貴とわたしとが、まだ人の寢鎭まつてゐる頃から起きて、菓子の拵へにかゝつてゐると、塀の向う側で變な音のするのを毎日聞くことがありますが、それがごろ、ごろと言ふやうに響くかと思ふと、又何か搔きむしるやうな音がして、なんとも言へない忌な心持がしますよ。ついこの間なぞも、變な聲でなんだか得體のわからない唄を歌つてゐました。それが確に婆さんの聲らしいんですけれど、そのまた調子が途方もなく甲高で、わたしも隨分いろ〳〵の國の歌ひ手の唄を聽いたことがありますが、今まであんなに調子の高い聲は聽いたことがありません。自然に身の毛がよだつて來て、とてもあんな氣ちがひ染みた化物のやうな聲をいつまで聽いてはゐられなかつたので、よく判然とはわかりませんが、どうもそれが佛蘭西語の唄のやうに思はれました。それ

から又、往來のとぎれた眞夜中に、この世のものとは思はれないやうな深い溜息や、さうかと思ふとまた氣ちがひのやうな笑ひ聲がきこえて來ることもあるんです。何なら、旦那。わたしの家の奥の部屋の壁に耳を當てゝ御覽なさい。きつと隣の家の音が聞えますよ。」

かう言つて、彼はわたしを奥の部屋へ案内して、窓から隣を指さした。

「こゝの塀から出てゐる煙突が見えませう。あの煙突から時々猛烈に煙を噴き出すので、どうも火の用心が惡いと言つて、内の兄貴がよくあの執事と喧嘩をすることがあるんです。それが又、冬ばかりぢやあない、てんで火の氣なんぞの要らないやうな眞夏でさへもなんですからね。あの老爺は食事の支度をするんだと言つてゐるんです。あんな獸物が何を食ふんだか知りませんけれど、煙突から煙がひどく出るときには、いつでも家中に變な匂ひがするんですよ。」

丁度その時に店の硝子戸が明いたので、菓子屋の職人は急いで店の方へ出て行つて、今這入つて來た客に挨拶しながら、ちらりと私の方を見かへつて眼顏で合圖したので、私はすぐにその客が例の不思議な邸の執事であることを直覺した。鷲鼻で、口を一文字に結んで、猫のやうな眼をして、薄氣味の惡い微笑を浮べて、木乃伊のやうな顏色をしてゐる、痩形の小男を想像して御覽なさい。更に、彼はその髮に古風な高い髻を入れて、その先をうしろへ垂らした上に、こて〳〵と髮粉を附け、ブラシはよく掛けてあるがもう餘程の年數物らしい褐色の上衣をきて、灰色の長い靴下に、バックルの附いた爪先の平たい靴をはいてゐる。彼は痩せてゐるにも拘らず、頗る頑丈な骨組して、手は大きく、指

は長く且つ節高で、しつかりした足取りで帳場の方へ進んで行つたが、やがて何處となく間のぬけたやうな笑ひを見せながら「砂糖漬のオレンヂを二つと、巴旦杏を二つと、砂糖の附いた栗を二つ」と鼻聲で言ふ、この小男の老人の姿をこゝろに描いて御覽なさい。

菓子屋の職人はわたしに微笑を送りながら、老人の客に話しかけた。

「どうもあなたはお加減が宜しくないやうですね。これもお年のせゐとでも言ふんでせうな。どうもこの年といふ奴は我々のからだから力を吸ひ取るんでね。」

老人はその顏色を變らせなかつたが、その聲を張りあげた。

「年のせゐだと……。年のせゐだと……。力がなくなる……。弱くなる……。お、……。」

彼はその關節が碎けるかと思ふばかりに兩手を打ち鳴らすと、店全體がびり〳〵と震へて、棚の硝子器や帳場はがた〳〵と搖れた。それと同時に、物すごい叫び聲がきこえたので、老人は自分のあとから附いて來て足許に寢ころんでゐる黑犬に近寄つた。

「畜生！　地獄の犬め。」

例の哀れな調子で唸るやうに呶鳴りながら、栗一つを袋から出して犬に投げて遣ると、彼は人間のやうな悲しさうな聲を出したが、急におとなしく坐つて、栗鼠のやうにその栗をかじり始めた。やがて犬が小さな御馳走を平らげてしまふと、老人もまた自分の買物を濟ませた。

「左樣なら。」と、老人はあまりの癪さに相手が思はずあつと言つたほどに、菓子屋の職人の手を強

く握りしめた。「弱い年寄はお前さんが好い夢をみるやうに祈つてゐるよ。お隣の大將。」

老人は犬を連れて出て行つた。彼は私に氣が注かないらしかつた。わたしは呆れたやうに唯茫然と見送つてゐると、職人はまた話し出した。

「どうです、御覽の通りです。月に二三度こゝへ來るたびに、いつも極つてあんな風なんです。あの爺さんについて幾ら探してみても、以前はS伯爵の從者で、今はあの邸の留守番をして、何年もの長い間、主人一家の來るのを待つてゐるのだと言ふことだけしか判らないんです。」

時は恰も町の贅澤な人たちが一種の流行でこの綺麗な菓子屋へあつまつて來る刻限になつて來たので、入口の扉は休み無しに明いて、店の中ががや〳〵し始めたので、わたしはもうこれ以上に訊ねるわけには行かなくなつた。

わたしは曩にP伯爵が彼の廢宅について話したことが全然嘘であることを知つた。あの人嫌ひの老執事は不本意ながらも他の人間と一緒に住んでゐて、その古い壁のうしろには何かの祕密が隱されてゐると言ふことを知つた。それにしても、彼の窓際の美しい女の腕と、氣味の惡い不思議な唄の聲の主とを何う結び付けたものであらうか。あの腕が年を取つた女の皺だらけの身體の一部であら筈がない。併し菓子屋の職人の話では、唄の聲は若い血氣盛りの女性の喉から出るものでも無いらしい。わたしはそれを最眉眼に見て、これはきつと音樂の素養によつて若い女がわざと年寄らしい聲を作つた

ものか、或は菓子屋の職人が恐怖の餘りに、そんなふうに聞き誤つたのではないかと、判斷を下してみた。

併し彼の煙突の煙のことや、異樣な匂ひや、妙な形の硝子壜のことが心に浮んだ時、宿命的な魔法の呪縛にかゝつてゐる美しい一人の女の姿が、生けるが如くにわたしの幻影となつて現れて來た。さうして、彼の執事は伯爵家とは全く無關係の魔法使ひで、あの廢宅のうちに何か魔法の竈を作つてゐるのではないかとも思はれて來た。わたしの斯うした空想はだん〳〵に逞しくなつて、その晩の夢に彼のダイヤモンドの燦く手と、腕環のかゞやく腕とを、あり〳〵と見るやうになつた。薄い灰色の靄の中から哀願してゐるやうな青い眼をした、可憐な娘の顏が見えたかと思ふと、やがてその優しい姿があらはれた。さうして、私が靄だと思つたのは、幻の女の手に握られてゐる硝子壜のうちから輪を作つて湧き出してゐる美しい煙であつた。

「あゝ、わたしの夢に現れて來た美しいお孃さん。」と、わたしは張裂けるばかりに叫んだ。「あなたは何處にゐるのです。何があなたを呪縛してゐるのです。それをわたしに敎へてください。いや、私はみな知つてゐます。あなたを監禁してゐるのは、腹黑い魔法使ひです。八分の五の調子で惡魔の唄を歌つたあとで、褐色の着物に假髪を附けて、菓子屋の店をうろ付きあるいて、自分たちの食ひものを素早く搔きあつめ、栗を以て惡魔の弟子の犬めを飼つてゐる、あの意地惡な魔法使ひに囚はれて、あなたは不運な奴隷となつてゐるのです。美しい、愛らしい幻の貴女よ、わたしは何も彼も知つてゐます。あのダイヤモンドはあなたの情火の反映です。而もあの腕に嵌めてゐる腕環こそは、あなたを縛る魔法の鎖です。その腕環を信じてはいけません。もう少し我慢なさい。屹と自由の身になれます。どうぞあなたの薔薇の蕾のやうな口をあいて、あなたの居所を敎へてください。」

この時、節くれ立つた手がわたしの肩越しにあらはれて、忽ち硝子壜を叩きつけたので、壜は空中で微塵に碎けて散亂し、弱い悲しさうな呻き聲と共に、可憐の幻影は忽ち闇のうちに消え失せた。

夜が明けて、わたしは夢から醒めると、急いで並木通りへ行つて、いつものやうにそれとなく例の廢宅を窺つてゐると、菓子屋に接した二階の窓にぴかりと何か光つたものがあつた。近寄つてみると鎧戸が開いて、細目にあけたカアテンの隙間からダイヤモンドの光がわたしの眼を射た。

「や、占めたぞ。」

夢のうちで見た彼の娘が、膨よかな腕に頭を靠せかけながら、淑かに哀願するやうに私の方を見てゐるではないか。併しこの激しい往來中に突つ立つてゐると、又この間のやうに人目に立つ虞れがあるので、わたしは先づ家の眞正面にある歩道のベンチに腰をかけて、しづかに不思議な窓を見守ると彼女は確に夢の女であるが、わたしの方を見てゐると思つたのは間違ひで、彼女はどこを見るとも無しにぼんやりと下をみおろしてゐるのであつた。その眼ざしは如何にも冷かで、もし時々に手や腕を動かさなかつたらば、わたしは好く描けてゐる畫を見てゐるのでは無いかと思ふくらゐであつた。

わたしはこの窓の神祕的な女性に魂を奪はれてしまつて、私のそばへ押賣りに來た伊太利人の物賣の聲などは耳に入らないほどに興奮してゐた。その伊太利人はたうとう私の腕を叩いたので、私はハツと我に復つたが、あまりに忌々しかつたので、おれに構ふな、あつちへ行けと言つて遣つたが、まだ口明けだからと執拗く言ふので、早く追ひ拂はうと思つてポケットの金を出しにかゝると、彼は言つた。

「旦那。こんなに素敵な物があるんです。」

彼は箱の抽斗から小さな圓い懷中鏡を把り出して、わたしの鼻のさきへ突き付けたので、なんの氣も無しに見かへると、その鏡の中には廢宅の窓も、彼のまぼろしの女の姿も、あり〳〵と映つてゐるではないか。

私はすぐにその鏡を買つた。さうして、鏡の中の彼女の姿を見れば見るほど、だん〳〵に不思議な感動に打たれて來た。ぢつと瞳を凝らして鏡の中を見つめてゐると、さながら嗜眠病がわたしの視力を狂はせて仕舞つたやうにも思はれて來た。幻の女はたうとうその美しい眼をわたしの上に注いだ。その柔かい眼の光がわたしの心臟に沁み透つて來た。

「あなたは可愛らしい鏡をお持ちですな。」

かういふ聲に夢から醒めて、わたしは鏡から眼を離すと、わたしの兩側には微笑をうかべながら私を眺めてゐる人達があるので、私も頗る面喰つてしまつた。彼の人達はわたしと同じベンチに腰をか

けて、おそらく私が妙な顏をして鏡をながめてゐるのを面白がつて見物してゐたのであらう。

「あなたは可愛らしい鏡をお持ちですな。」

わたしが曩に答へなかつたので、その人は再びおなじ言葉を繰返した。しかもその人の眼附はその言葉よりも更に雄辯に、どうしてお前はそんな氣違ひ染みた眼附をしてその鏡に見惚れてゐるかと、わたしに問ひかけてゐるのであつた。その男はもう初老以上の年輩の紳士で、その聲音や眼附がいかにも溫和な感じをあたへたので、わたしは彼に對して自分の祕密を隱してはゐられなくなつた。わたしは彼の窓際の女を鏡に映してゐたことを打明けた上で、あなたもその美しい女の顏を見なかつたかと訊いた。

「こゝから……。あの古い邸の二階の窓に……。」

その老紳士は驚いたやうな顏をして、鸚鵡がへしに問ひ返した。

「えゝ、さうです。」と、私は大きい聲を出した。

老紳士は笑ひながら答へた。

「やゝ、どうも、それは不思議な妄想ですな。いや、かうなると私の老眼を神樣に感謝せざるを得ませんな。なるほど私もあの窓に可愛らしい女の顏を見ましたがね。しかし私の眼には非常に上手な油繪の肖像畫としか見えませんでしたがね。」

わたしは急いで振返つて、窓の方をながめると、そこには何者もゐないばかりか、鎧戸も閉まつて

ゐた。

老紳士は言葉をつゞけた。

「惜しいことでしたよ。もう些つと早ければ好うございましたに……。丁度いま、あの邸に唯つた一人で住んでゐる老執事が、窓の張出しに油繪を立てかけて、その塵埃を拂つて、鎧戸を閉めたところでした。」

「では、本當に油繪だつたのですか。」と、わたしはどぎまぎしながら訊き返した。

「御安心なさい。」と、老紳士は言つた。「わたしの眼はまだ確ですよ。あなたは鏡に映つた物ばかり見詰めてゐられたから、豫計に眼が變になつてしまつたのです。私もあなたぐらゐの時代には、よく美人畫を思ひ出しただけで、大いに空想を描くことが出來たものでした。」

「しかし手や足が動きました。」と、わたしは叫んだ。

「そりや動きました。確に動きましたよ。」

老紳士はわたしの肩を輕く叩いて、起ちあがりながら丁寧にお辭儀をした。

「本物のやうに見せかける鏡には氣をつけた方が好うございますよ。」

かう言つて、彼は行つてしまつた。

あの老爺め、俺を馬鹿な空想家扱ひにしやがつたなと、かう氣が付いた時のわたしの心持は、おそらく諸君にも判るであらう。わたしは腹立ちまぎれに我家へ飛んで歸つて、もう二度とあの廢宅の

ことは考へまいと心に誓つた。しかし彼の鏡はそのまゝにして、いつもネクタイを結ぶときに使ふ鏡臺の上に拋り出して置いた。

ある日、わたしがその鏡臺を使はうとして、何の氣も無しに彼の鏡に眼を留めると、それが曇つてゐるやうに見えたので、手に取つて息を吹きかけて拭かうとする時、わたしの心臟は一時に止まり、わたしの細胞といふ細胞が嬉しいやうな、怖ろしいやうな感激にをのゝき出した。私がその鏡に息を吹きかけた時、むらさきの靄の中から彼の幻の女がわたしに笑ひかけてゐるではないか。諸君はわたしを懲性のない夢想家だと笑ふかも知れないが、兎も角もその靄が消えると共に、彼女の顏も玲瓏たる鏡のなかへ消え失せてしまつたのである。

それから幾日の間の私の心持を今更くどく說明して、諸君を退屈させることもあるまい。唯その間に私は幾度か彼の鏡に息をかけてみたが、幻の女の顏が現れる時と現れない時とがあつたことだけを斷つて置きたい。

彼女を呼び起すことの出來ない時には、私はいつも彼の廢宅の前へ飛んで行つて、その窓を眺め暮らしてゐたが、もう其處らには人らしいものを見當らなかつた。私はもう友達も仕事もまつたく振捨てゝ、朝から晩まで氣違ひのやうになつて幻の女のことを思ひつめてゐた。こんなくだらないことは止めようと思ひながらも、それがどうも止められないのであつた。

ある日、いつもより激しくこの幻影に襲はれた私は、彼の鏡をポケットに入れると、精神病の大家のK博士の許へ急いで行つた。わたしは一切の話を包まず打明けて、この怖ろしい運命から救つてくれと哀願すると、靜にわたしの話を聽いてゐた博士の眼にも一種の驚愕の色が閃いた。

「いや、さう御心配のことはないでせう。まあ私の考へでは直きに癒ると思ひますよ。あなたは自分から魔法にかゝつてゐると思ひ込んで、それと戰はうとしてゐるが爲に、却つて妄念が起るのです。先づあなたのその鏡を私のところへ置いて行つて、專心にお仕事に沒頭なさるやうにお努めなさい。さうして、忘れても並木通りへは足を向けないやうにして、一日の仕事をしてから長い散歩をしてはお友達の一座と樂しくお過しなさい。食事は十分に攝つて、營養の豐な葡萄酒をお飲みなさい。これから私は、その廢宅の窓や鏡に現れる女の顏の執念深い幻影と戰つて、あなたを心身共に丈夫にしてあげる積りですから、あなたも私の味方をする氣になつて、わたしの言ふ通りを守つて下さい。」と博士は言つた。

澁々ながらに鏡を手放した私の態度を、博士はぢつと見てゐたらしかつた。それから博士はその鏡に自分の息を吹きかけて、それを私の眼の前へ持つて來た。

「何か見えますか。」

「いゝえ、なんにも。」と、私はありのまゝを答へた。

「では、今度はあなた自身がこの鏡に息をかけてごらんなさい。」と、博士はわたしの手に鏡をわた

した。

私は博士の言ふ通りにすると、女の顏が鏡の中にあり〳〵と現れて來た。

「あつ。女の顏が……。」といふ私の叫び聲に、博士は鏡の中を見て言つた。

「私にはなんにも見えませんね。併し實を言ふと、鏡を見た時に私もなんとなくぶる〳〵寒氣がしました。尤もすぐになんでもなくなりましたが……。では、もう一度やつて見て下さい。」

私はもう一度その鏡に息を吹きかけると、その途端に博士はわたしの頸のうしろへ手をやつた。女の顏は再び現れた。わたしの肩越しに鏡に見入つてゐた博士はさつと顏色を變へて、私の手からその鏡を奪ふやうに引つ取つて、細心にそれを檢めてゐたが、やがてそれを机の抽斗に入れて錠をかけてしまつた。それから暫く考へた後に、彼はわたしの所へ戻つて來た。

「では、早速にわたしの指圖通りにして下さい。實のところ、どうもまだあなたの幻影の根本が呑み込めないのですが、まあ、なるたけ早くあなたにそれを知らせることが出來るやうにしたいと思つてゐます。」と博士は言つた。

博士の命令とぼりに生活するのは、私に取つて困難なことではあつたが、それでも無理に實行すると、忽ちに規則正しい仕事と營養物の效果が現れて來た。それでもまだ晝間も——靜かな眞夜中には特にさうであつたが——怖ろしい幻影に襲はれることもあり、愉快な友達の一座にゐて、酒を飲んだり、歌を唄つたりしてゐる時ですらも、灼け爛れた匕首がわたしの心臟に突き透るやうに感じる時も

あつた。さういふ場合には、わたしの理性の力などは何の役にも立たないので、よんどころなく其場を引退つて、その昏睡狀態から醒めるまでは再び友達の前へ出られないやうなこともあつた。

ある時かういふ發作が非常に猛烈に起つて、彼の幻影に對する不可抗力的の憧憬がわたしを狂はせるやうになつたので、私は往來へ飛び出して不思議な家の方へ走つてゆくと、遠方から見た時には、固く閉ぢられた鎧戸の隙間から光が洩れてゐるらしく思はれたが、さて近寄つて見ると、そこらは總て眞暗であつた。わたしはいよ〳〵取逆上せて入口の扉の駈け寄ると、その扉はわたしの押さないうちに後へ倒れた。重い息苦しい空氣の漂つてゐる玄關の、うす暗い灯のなかに突つ立つてわたしは異常の怖ろしさと苛立たしさに胸をか轟せてゐると、忽ちに長い鋭い一聲が家のなかで響いた。それは女の喉から出たらしい。それと同時に、わたしは封建時代の金色の椅子や日本の骨薫品に飾り立てられて、眩ゆいばかりに照り輝いてゐる大廣間に立つてゐることを發見した。わたしの周圍には強い薫りが紫の靄となつて漂つてゐた。

「さあ、さあ、花智樣。丁度、結婚の時刻でございます。」

女の聲がした時に、私は定めて盛裝した若い淸楚な貴婦人が紫の靄の中から現れて來るものと思つた。

「ようこそ、花智さま。」と、再ば金切り聲が響いたと思ふ刹那、その聲の主は腕を差出しながら私の方へ走つて來た。寄る年波と狂氣とで醜くなつた黄色い顏がぢつと私を見入つてゐるのである。私

は怖ろしさの餘りに後退りをしようとしたが、蛇のやうに烱々とした鋭い彼女の眼は、もうすつかり私を呪縛してしまつたので、この怖ろしい老女から眼を外らすことも、身を退くことも出來なくなつた。彼女は一歩一歩と近付いて來る。その怖ろしい顏は假面であつて、その下にこそ幻の女の美しい顏が潛んでゐるのではないかと言ふ考へが、稲妻のやうに私の頭に閃いた。その時である。彼女の手が私の體に觸れるか觸れないうちに、彼女は大きい唸り聲を立てゝ私の足許にばたりと倒れた。

「はゝゝゝ。惡性者めがお前の美しさにちよつかいを出してゐるな。さあ、寢てしまへ、寢てしまへ。さもないと鞭だぞ。手ひどい奴をお見舞ひ申すぞ。」

かう言ふ聲に、私は急に振返ると、彼の老執事が寢卷のまゝで頭の上に鞭を振り廻してゐるではないか。老執事はわたしの足許に唸つてゐる彼女をあはや打ちのめさうとしたので、私は慌てゝその腕を摑むと、老執事は振拂つた。

「惡性者め、若しわしが助けに來なければ、あの老耄れの惡魔めに喰ひ殺されてゐただらうに……。さあ、すぐにこゝを出て行つて貰はう。」と、彼は呶鳴つた。

私は廣間から飛んで出たが、何しろ眞暗であるので、どこが出口であるか見當が付かない。そのうちに私の後ではひう〳〵と言ふ鞭の音がきこえて、女の叫び聲が響いて來た。堪らなくなつて、私は大きい聲を出して救ひを求めようとした時、足許の床がぐら〳〵と搖れたかと思ふと、階段を四五段も轉げ落ちて、忌と言ふほどに扉へ叩き付けられながら、小さい部屋の中へ俯伏せに倒れてしまつ

た。そこには今慌てゝ飛び出したらしい空の寢床や、椅子の背に掛けてある褐色の上衣があるので、私はすぐにこゝが老執事の寢室であることを覺つた。すると、荒々しく階段を驅け降りて來た老執事は、いきなり私の足許に平伏して言つた。

「あなたが何人樣にもしろ、またどんなことをしてあの下司女の惡魔めがあなたをこの邸内へ誘ひ込んだにもしろ。どうぞこゝで起つた出來事を誰にも仰有らないで下さい。わたくしの地位に關ることでございます。あの氣違ひの夫人は懲しめのために、寢床にしつかりと縛りつけて置きました。もうすや〳〵と睡つてをります。今晩は暖かい七月の晩で、月はございませんが、星は一面にかゞやいて居ります。では、お休みない。」

彼はわたしに哀願した後、ランプを取つて部屋を出て、私を門の外へ押出して錠を下してしまつた。わたしは氣違ひのやうになつて我家へ急いで歸つたが、それから四五日は頭がすつかり變になつて、この恐ろしい出來事を全く考へることが出來なかつた。唯あんなに長い間わたしを苦しめてゐた魔法から解放されたといふことだけは自分にも感じられた。從つて彼の鏡に現れた女の顏に對する私の憧憬の熱も冷め、彼の廢宅に於ける怖ろしかつた光景の記憶も、單に何かの拍子に瘋癲病院を訪問したぐらゐの追憶になつてしまつた。

彼の老執事がこの世の中から全く隱されてゐる高貴な狂夫人の暴君的な監視人であることはもう疑ふ餘地もなかつた。それにしてもあの鏡は何であらう。今までの種々の魔法は何であらう。まあ、こ

れから私が話すことを聽いてください。

それからまた四五日の後、私はP伯爵の夜會にゆくと、伯爵は私を片隅に引張つて來て、「あなたはあの廢宅の祕密が洩れ出したのを御存じですか。」と、微笑を浮べながら話しかけた。

私はこれに非常に興味を感じて、伯爵がその後を續けるのを待つてゐると、惜しいことに丁度食堂が開かれたので、伯爵もそのまゝ默つてしまつた。私も伯爵の言葉を夢中になつて考へながら、殆んど機械的に相手の若い娘さんに腕をかして、社交的な行列の中に加つた。さうして、私達は定められた席へその娘さんを導いてから、はじめてその娘さんの顏をみると、いや、驚いた、彼の幻の女がわたしの眼の前に突つ立つてゐるではないか。私は心の底まで顫へ上がつたが、彼の幻影に惱まされてゐた當時のやうに、氣違ひ染みた憧憬は少しも起つて來なかつた。それでも相手の娘さんが吃驚りしたやうに私の顏をぢつと眺めてゐるのを見ると、私の眼にはやはり恐懼の色が現れてゐたには相違なかつた。私はやつとのことで氣を鎭めると、てれ隱しに、あなたには以前どこかでお目にかゝつたやうな氣がしますがと言ふと、意外にも、生まれてから初めて昨日このX市に來たばかりですと、相手にあつさりと片付けられてしまつたので、私の頭は餘計に混亂して、婦人に不作法であつたが、そのまゝに默つてゐた。而も彼女の優しい眼で見られると、わたしは再び勇氣が出て、この新しい相手の娘さんの心の動きを觀察してみたいやうな氣にもなつて來た。確かにこの娘さんは、可愛らしい

ところはあるが、何か心に屈托がありさうにも見えた。お互ひの話がだん〳〵はずんで來た時分に、わたしは大膽に辛辣な言葉を時々に用ひると、いつも微笑してゐたが、その蔭には恰も傷口に觸られた時のやうな苦惱が潛んでゐるやうであつた。

「お嬢さん、今夜は馬鹿に御元氣がないやうですが、今朝お着きでしたか。」と、私の傍に坐つてゐた士官がその娘さんに聲をかけた。その言葉がまだ終らないうちに、彼の隣にゐる男が士官の腕を掴んで何かその耳に囁いた。すると、また食卓の反對の側では、ひとりの婦人が興奮して顏を眞赤にしながら、ゆうべ觀て來た歌劇の話を大きな聲で語り始めた。かうした愉快さうな環境が彼女の淋しい心にどう響いたのか、その娘さんの眼には涙がこみ上げて來た。

「私、馬鹿ですわね。」と、彼女はわたしの方を向いて言つた。それから暫くして彼女は頭痛がすると言ひ出した。

「なあに、ちよつとした神經性の頭痛でせう。この甘美な、詩人の飲料（シャンパン酒）の泡のなかで、ぶく〳〵言つてゐる快活な魂ほど、よく利く藥はありませんよ。」と、私は心安立てにかう言ひながら、彼女のグラスにシャンパンを一杯に注いでやると、彼女は一寸それに脣を付けて、わたしの方に感謝の眼を向けた。彼女の氣分は引立つて來たらしく、このまゝで行つたら何も彼も愉快に濟んだかも知れなかつたのであるが、私のシャパン・グラスが不圖したはずみで彼女のグラスと觸れた刹那、彼女のグラスから異樣な甲高い音が發したので、彼女もわたしも急に顏色を變へた。それは彼

の廢宅の氣違ひ女の聲の響きと全く同樣であつたからであつた。

コーヒーが出てから、私はうまく機會を作つてP伯爵の傍へ行くと、伯爵は私のこの行動を早くも覺つてゐた。

「あなたは隣の婦人がS伯爵家のエドヴィナ嬢であることを知つてゐますか。それから、長い間不治の精神病に苦しみながらあの廢宅に住んでゐるのが、あの娘さんの叔母であるといふことを知つてゐますか。あの娘さんは、今朝母親と一緒に不幸な叔母に逢ひに來たのです。あの狂夫人の暴れ狂ふのを鎭めることの出來るものは彼の老執事のほかは無かつたのですが、その唯ひとりの人間が俄に重病に罹つたと言ふわけです。なんでもあの娘さんの母親はK博士に伺つて、あの家の祕密を打明けたさうですよ。」

K博士——その名は既に諸君も御承知の筈である。そこで言ふまでもなく、私は少しも早くその謎を解くために博士の宅を訪問して、私の安心が出來るやうに、詳しく彼の狂女の話をしてくれと賴んだ。以下は、祕密を守ると言ふ約束で、博士がわたしに話してくれた物語である。

アンヂェリカ——Z伯爵令嬢は已に三十の坂を越えてゐたが、まだなか〳〵に美しかつたので、彼女よりもずつと年下のS伯爵は熱心に自分の戀を打明けた。さうして、二人はその運試しに父のZ伯の邸へ行くことになつた。ところが、S伯爵はその邸へ這入つてアンヂェリカの妹を一目見

ると、姉の容色が急に褪せて來たやうに思はれて、彼女に對する熱烈な戀は夢のやうに覺めてしまひ、更に妹のガブリエルとの結婚を父の伯爵に申込んだのである。伯爵は、妹娘もS伯爵を憎く思つてゐないのを知つて、すぐに二人の結婚を許した。姉のアンヂェリカは男の裏切りを非常に怨んだが、表面は如何にも彼を輕蔑したやうに、「なあに、伯爵はわたしの鼻についた玩具であつたと言ふことを御存じないんだわ。」と言つてゐた。而もガブリエルとS伯爵の婚約式が濟んでからは、アンヂェリカは一家の團欒の席に顏をみせないことも少くなかつた。それのみならず、彼女は食堂にも出ないで、殆んど一日を森の中の獨り歩きに暮らしてゐた。

こゝに一つの異樣な事件がこの城に於ける單調な生活を破つた。ある日、村の百姓のうちから選拔されたZ伯爵家の獵人等が、最近に隣の領地で殺人や窃盗を以て告訴されたジプシーの一團を捕縛して、男達は鎖に繫ぎ、女子供は馬車に乘せて城の中庭へ引つ立てゝ來た。女のジプシーの群の中では、頭から足の先まで眞赤な肩掛をきた一人のひよろ長い、痩せこけた、物凄い顏の老婆がすぐに目に付いた。その老婆は馬車の中に立つて、いかにも横柄な聲で自分を馬車から降ろせと命令するやうに言ひ放つと、その態度に恐れをなして、伯爵の家來達はすぐにその老婆を降してやつた。

伯爵は中庭へ降りて來て、この囚人團を城の地下室の牢獄へ繫ぐやうに命じた。その途端に、髪を亂し、恐怖の色をその顏に漲らしたアンヂェリカが邸の内から走り出て、父の足許に跪いた。

「あの人達を赦してやつて下さい。お父さま、あの人達を赦してやつて下さい。若しお父さまがあの

人達の血一滴でもお流しになれば、わたしはこのナイフでわたくしの胸を突き透します。」

ナイフを打振りながら鋭い聲でかう叫ぶと、そのまゝ氣を失つてしまつた。

「さうですとも、さうですとも、お美しいお嬢さま。私はあなたが私達をお助けくださることをよく存じてをります。」

かう金切聲で叫んだ後、ジプシーの老婆は何か口の中で言ひながら、アンヂェリカの體に伸し懸つて、胸が惡くなるやうな接吻を彼女の顏と言はず胸と言はず浴びせかけた。それから肩掛けの衣囊から小さい金魚が銀の液體のなかで泳いでゐるやうに見える硝子の小壜を取り出して、アンヂェリカの胸のところへ持つてゆくと、忽ちに彼女は意識を回復した。彼女は眼を老婆の上に注ぐと、矢庭にがばと身を起して老婆を抱きかゝへ、疾風のごとくに城内へ連れ去つてしまつたので、Z伯爵をはじめ、途中から出て來た妹のガブリエルも、その戀人のS伯爵も、あまりの驚異に身の毛をよだてた。Z伯爵は兎も角もその囚人達の鎖を外させて、みな別々の牢獄へ入れさせた。

翌朝、伯爵は村人を召集して、その面前でジプシー等には罪のないことを宣告した上、自分の領地の通過券を渡してやつたが、その解放されたジプシーの一團の中には、彼の眞赤な肩掛けを着た老婆の姿は見えなかつた。きつと金鎖を頸に卷いて、スペイン風の帽子に赤い羽を附けてゐるジプシーの親方が、前の夜ひそかに伯爵の部屋を訪問して、伯爵に賴み込んだのであらうと、村人等はさゝやき合つてゐた。實際ジプシー等が去つてから、彼等は殺人でも窃盗でもないことが判つた。

ガブリエルの結婚式の日はいよ〳〵近づいて來た。ある日、中庭へ數臺の荷馬車を挽き込んで、それに家財道具や衣裳類を山のやうに積んであるのを見て、ガブリエルは吃驚りした。次の日、Z伯爵は種々の事情から、アンヂェリカがX市の別邸に自分ひとりで暮したいと言ふ申出でを許したと言ふことを、ガブリエルに言つて聞かせた。伯爵はその別邸を姉娘にあたへ、家族の者は勿論、父の伯爵でさへ彼女の許可なくしてはその別邸へ出入りをしないと言ふことを、彼女に誓つた。それからまた伯爵は、彼女の切なる願ひによつて、自分の家僕を彼女の家事取締りのために附けてやることをも承諾した。

結婚式は無事に濟んだ。S伯爵と花嫁のガブリエルは自分たちの邸で水入らずの幸福な生活を營んだ。ところが、不思議なことには、何か祕密な悲みが生命を蝕んで、快樂と精力とを奪ひ去つて行くかのやうに、S伯爵の健康は日ごとに衰へて來た。新妻のガブリエルは夫の心配の原因をどうかして探り知らうとして、あらゆる手段を盡してみたが、それはみな徒勞であつた。そのうちにS伯爵は、このまゝでは自然に喰ひ入つて來る呪ひのために取り殺されてしまふのを恐れて、醫者の指圖するがまゝに斷然その邸を後にして、ピザへ出發した。その折彼の新妻は身重であつたので、夫と一緒に旅立つことが出來なかつた。

「以上は、S伯爵夫人が私に打明けた物語であるが、それは餘りに狂氣染みてゐるのでよほど鋭い觀察力を以てしなければ、話の關係を攝むことが出來ないくらゐであつた。と、博士は註を入れて、又話した。

ガブリエル夫人は、夫の不在中に女の子を生んだが、間もなくその赤ん坊は邸内から何者かに攫はれて、八方手を盡してたづねたが、遂にその行方が知れなかつた。母親の夫人の悲歎は傍の見る目も憐れなくらゐであつたところへ、搗て〻加へて父のZ伯爵から、ピザにゐる筈のS伯爵がX市のアンヂェリカの邸で煩悶に煩悶をかさねて瀕死の狀態にあると言ふ手紙に接して、夫人は殆んど狂氣せんばかりになつた。

夫人は產褥から離れるのを待つて、父の城へ馳せ付けた。ある晩、彼女は生別れの夫や子供の安否を案じ侘びて、どうしても眠られないでゐると、氣のせゐか寢室の扉の外で微に赤兒の泣くやうな聲が聞えるので、灯を點して扉をあけて見ると、思はず彼女はぎよつとしたのである。扉の外には眞赤な肩掛けのジプシーの老婆が這ひつくばひながら、「死」を嵌め込んだやうな眼でぢつと彼女を見詰めてゐるばかりか、その腕には夫人を呼びさまさせた聲の主の、小さい子供を抱へてゐた。あつ！私の娘だ——夫人はジプシーの老婆の腕から奪ひ取つた我子を、嬉しさに高鳴りする我が胸へしつかりと抱きしめた。

夫人の叫び聲におどろかされて、家人が起きて來た時には、ジプシーの老婆はもう冷たくなつてゐて、いくら介抱しても息を吹き返さなかつた。

Z老伯爵はこの孫にかゝはる不可思議な事件の謎が少しでも解けはしまいかと、急いでX市のア

ンヂェリカの邸へ急いで行つた。今では彼女の氣違ひ沙汰に驚いて、女中はみな逃げてしまつて彼の執事だけがたゞ一人殘つてゐた。老伯爵が這入つた時には、彼女は平靜であり、意識も明瞭であつたが、孫の物語が始まると、彼女は急に手を打つて大聲で笑ひながら叫んだ。

「まあ、あの小娘は生きてゐまして……。あなた、あの小娘を埋めてくださいましたでせうね、きつと……。」

老伯爵はぞつとして、自分の娘はいよ〳〵本物の氣違ひであることを知ると、執事の止めるのも聞かずに、彼女を連れて領地へ歸らうとした。ところが、彼女をこの家から連れ出さうとする事を烏渡仄めかしただけで、アンヂェリカは俄に暴れ出して、彼女自身の命どころか、父親の命までが危いほどの騒ぎを演じた。

再び正氣にかへると、彼女は涙ながらに、この家で一生を送らせてくれと父親に哀願した。老伯爵はアンヂェリカの告白したことはみな狂氣の言はせる出鱈目だとは思つたが、それでも娘の極度の惱みに心を動かされて、その申出でを許してやつた。その告白なるものは、S伯爵は自分の腕に歸つて來て、ジプシーの老婆が父の邸へ連れて行つた子供は、S伯爵と自分との仲に出來た子供だと言ふのであつた。X市には、Z伯爵が哀れな姉娘を城へ連れて歸つたといふ噂が立つたが、その實、アンヂェリカは依然として例の執事の監視のもとに、彼の廢宅に隱されてゐたのであつた。

Z伯爵は間もなく世を去つたので、ガブリエル夫人は父の亡き後の家庭を整理するためにX市

に戻つて來た。勿論、彼女が姉のアンヂェリカに逢へば、かならず何かの騒動が起るに決つてゐるので、ガブリエル夫人は不幸な姉に逢はなかつた。而もその夫人は不幸な姉を老執事の手から引き離さなければならない事に氣が付いたと言つてゐたが、その理由は私にも打明けなかつた。唯種々の事から歸納的に想像して、彼の老執事が女主人公の暴れ出すのを折檻して取鎭めると共に、彼女が金を造り得ると言ふ妄信に釣り込まれて、彼女の物凄い試驗の助手を勤めてゐた事だけは判つて來た。

「さて、かうした不思議な事件の心理的關係をあなたにお話し申す必要はあるまいと思ひます。併し彼の精神病の婦人の回復が死の鍵である最後の役目を勤めたのは、明かにあなたであると思ひます。それからあなたに告白しなければならないのは、實は私があなたの頸のうしろに手を當てゝ、あなたの催眠狀態の母體になつてゐた時、わたしは私自身の眼にもあの鏡の中に女の顏を見て、はつとしましたよ。併し御安心なさい。あの鏡に映つたのは幻の女ではなく、エドヴィナ伯爵夫人の顏であつたと言ふ事がやつと判りましたよ。」

博士の話はこれで終つた。博士はわたしの精神に安心をあたへるためにも、この事件に就いてこれ以上には解釋の仕樣がないと言つたので、その言葉をこゝに繰返して置きたい。

私もまた今となつて、アンヂェリカとエドヴィナと、彼の老執事と私自身との關係——それは惡魔の仕業のやうにも思へるが——その關係を、この上に諸君と議論する必要はないやうに思はれる。私

はこの事件の直後、拭ひ去らうとしても拭ひ去ることの出來ない憂鬱症のために、逐はれるやうにしてこのX市を立去つた。それでも猶一二ヶ月は氣味の惡い感じがどうしても去らなかつたが、突然それを忘れてしまつて、なんとも言へない愉快な心持が幾月ぶりかで私の心に歸つて來たと言ふことだけを最後に附け加へて置きたいのである。

わたしの心にさうした氣分の轉換が起つた刹那に、X市では彼の氣違ひの婦人が息を引取つた。

――終――

聖餐祭

（フランス）

これは、ある夏の涼しい晩に、ホワイト・ホースの樹の下に我々が腰をおろしてゐる時、ヌウヴィユ・ダーモンにある聖ユーラリ教會の堂守が、好い機嫌で、死人の健康を祝するために古い葡萄酒を飲みながら話したのあである。彼はその日の朝、白銀の涙を柩蔽ひに散らしながら、十分の敬意を表して、その死人を墓所へ運んだのであつた。

死んだのは私の可哀さうな親父ですが……。（堂守が話し出したのである）一生、墓掘りを遣つてゐたのです。親父は氣のいゝ人間で、そんな仕事をするやうになつたのも、竟りは方々の墓所に働いてゐる人達と同じやうに、それが氣樂な仕事であつたからです。墓掘りなどをする者には「死」などといふ事は些つとも怖しく無いのです。彼等はそんな事を決して考へてゐないのです。例へば、私にした所で、夜になつて墓場へ入り込んでゆく位のことは、まるでこのホワイト・ホースの樹のところにゐる位のもので、少しも氣味の惡い事はないのです。どうかすると、幽靈に出逢ふこともありますが、出逢つたところで何でもありませんよ。私の親父も自分の仕事については、私と同じ考へで、墓

場で働く位の事は何でもなかつたのだと思ひます。私は死人の癖や、性質はよく知つてゐます。全く坊さん達の知らない事までも知つてゐます。私が見ただけの事をすつかりお話しすれば、あなたは吃驚なさると思ひますが、話は少ない方が悧口だと言ひますからね。私の親父がそれでして、いつもいい機嫌で絲を紡ぎながら、自分の知つてゐる話の二十の中の一つか話さない人でした。この流儀で、親父は度々同じ話をして聞かせましたが……。さうです、私の知つてるだけでもカトリイヌ・フォンテーヌの話を少くも百度位は話しました。

カトリーヌ・フォンテーヌは、親爺が子供の時によく見かけた事を思ひ出してゐましたが、い〻年の婆さんであつたさうです。未に其地方に、其婆さんの噂を知つてゐる老人が三人もゐるさうですが、かなり其婆さんは知れ渡つてゐる人で、ひどく貧乏であつた割合に、又ひどく評判のい〻人であつたやうです。婆さんはその頃、ノンネ街道の角の——未だにあるさうですが、——小さい塔のやうな形の家に住んでゐまして、それは半分ほども壞れた古屋敷で、ウルスラン尼院の庭に向つてゐる所にありました。その塔の上には、今でもまだ昔の人の形をした彫刻の跡と、半分消えたやうになつてゐる銘がありまして、先にお亡なりになりました聖ユーラリ教會の牧師レバスール様は、それが『愛は死よりも強し。』といふ羅甸語だと仰しやいました。尤もこの言葉は、「聖なる愛は死よりも強し。」といふ意味ださうです。

カトリーヌ・フォンテーヌは、この小さな一間に獨りで住んで、レースを作つてゐたのです。御存

じでせうが、この邊で出來るレースは世界中で一番良いことになつてゐるのです。この婆さんにはお友達や親戚はなんにもなかつたと言ひますが、十八の時にドーモン・クレーリーといふ若い騎士を愛してゐて、人知れずその青年と婚約をしてゐたさうです。尤もこれは作り話で、カトリーヌ・フォンテーヌの日頃の行ひが普通の賃仕事をしてゐる女達とは違つて上品であつたのと、白髪頭になつても何處かに昔の美しさが殘つてゐたせゐだと言つて、土地では本當にしてゐませんのです。婆さんの顏色は、どちらかと言へば沈んでゐて、指には金細工屋に作らせた、二つの手が握りあつてゐる形をした指環をはめてゐました。昔はこ〻らの村では婚約の儀式にそんな指環を取交すのが慣習になつてゐましたが、まあそんな風な指環であつたのでせう。

婆さんは聖者のやうな生活をしてゐました。一日のうちの大部分を教會で過して、どんな日でも毎朝かならず聖ユーラリの六時の聖餐祭の手傳ひに出かけてゐたのです。

ある十二月の夜のことでした。カトリイヌの婆さんは獨りで小さい自分の部屋に寢てゐますと、鐘の音に眼を醒されたのです。疑ひもなく第一の聖餐祭の鐘ですから、敬虔な婆さんはすぐに支度をして階下へ降りて、町の方へ出て行きました。夜は眞暗で、人家の壁も見えず、暗い空からは何ひとつの光りも見えないのです。さうして四邊の靜かなことは、犬の遠吠え一つ聞えず、何の生物の音もせず、まるで人氣がないやうに感じられたさうですが、それでも婆さんが歩いてゐると、路に轉がつてゐる石も一つ一つ判然と見えて、眼をつぶつたまゝでも教會へゆく道は立派にわかつたと言ひます。

そこで、ノンスの道とバロアスの道の角まで、譯も無しに辿つて來ると、そこには、重々しい梁に系統木（クリストの系圖を裝飾的に現したもの）の彫つてある木造の家が建つてゐました。

こゝまで來ると、カトリイヌは敎會の扉が明いてゐて、澤山の大きい蠟が洩れてゐるのを見たのです。歩いて敎會の門を通ると、自分はもう敎會のうちに一杯になつてゐる會衆の中に這入つてゐました。禮拜者の人達は見えなかつたのですが、そこに集まつてゐるのはいづれも天鵞絨や紋織の衣服を着て、羽根毛のついてゐる帽子をかぶつて、昔し風の佩劍をつけてゐる人々ばかりであるのに驚かされました。そこには握りが黃金で出來てゐる長い杖をついてゐる紳士もゐます。レースの帽子をコロネット型の櫛で留めてゐる婦人達もゐます。聖ルイス風をした騎士達は婦人達に手を差し延べてゐると、相手の婦人達は隈取りをした顏を扇にかくしてゐて、たゞ白粉のついてゐる額と、眼の緣に眼張りをしてゐるのだけが見えるのでした。それらの人々は少しの音もさせずに自分達の席につきましたが、その動いてゐる時、鋪石の上に靴の音もなければ衣ずれの音もないのです。低い所には、蔗色のジャケツに木綿の袖をつけて、青い靴下をはいてゐる若い藝術家達の群が、顏を薄くあからめて伏目勝ちな娘達の腰に腕をまいて親しさうに押合つてゐます。又、聖水の近くには、眞紅のペティコート袴をはいて、レースのついてゐる胸衣をつけた農家の女達が、家畜のやうに動かずに地面に腰を下してゐます。さうかと思ふと、若い者がその女達の後に立つて大きな眼をして見廻しながら、指先でくるくると帽子を廻したりしてゐます。これらの悲しさうな顏つきの人達は、何か同じ思ひの爲に、動か

ずにこゝに集まつてゐるやうで、ある時は愉しさうに、又ある時は悲しさうにみえるのでした。

カトリイヌはいつもの席についてゐると、祭司は二人の役僧を從へて、聖餐の壇に上るのを見ました。どの僧もみな婆さんの識らない人ばかりでしたが、やがて聖餐祭は始まりました。實に靜かな聖餐祭で、人々の口脣の動きは見えても、その聲は聞えないのです。鐘の音も聞えません。カトリイヌは自分のまはりにゐる不思議な人々の注目を受けてゐることを感じながら、僅かに顏を振向けやうとする時、そつと隣を偷み見ると、その人は婆さんが嘗て愛してゐて、四十五年前にもう死んでゐる筈の騎士ドウモン・クレーリーであつたのです。カトリイヌはその人であることを、左の耳の上にある小さい痣と、長い睫毛が兩方の頰にまで長い影をうつしてゐるのとで確めたのです。彼は黃金色のレースの附いてゐる緋色の獵衣を着てゐましたが、その服裝こそは聖レオナルドの森で、初めて彼がカトリイヌに逢つて、彼女に飲み水を貰つて、そつと接吻をした時の姿であつたのです。彼は今だに若々しく、立派な風貌を具へてゐて、彼が微笑を浮べると、今も美しい齒並が露れるのでした。カトリイヌは低い聲で彼に話しかけました。

「過ぎし日の私のお友達——さうして、私が女としてのすべての愛を捧げたあなたに、神樣の御加護がありますやう……。神樣は、あなたのお心に從つた私の罪を遂に後悔させようとなされませうが、私はこんな白い髮になつて、一生の終りに近づきましても、あなたを愛したことは未だに後悔いたして居りません。そこで伺ひますが、この聖餐祭に集まつてゐられる、あの昔風の服裝をしてゐる方々

ほどなたでございます。」

騎士ドーモン・クレーリーは呼吸をするよりも微かな而も透き通つた聲で答へました。

「あの男や女は、私達が犯したやうな罪――動物的戀愛の罪の爲に、神樣を悲しませた人達です。煉獄の境から來た靈魂達です。併しその爲に、神樣から追放されてゐるのではありません。あの人達の罪は私達と同じやうに、無分別がさせた罪であるからです。あの人達は、地上にゐた時に愛してゐた人達から離されてゐる間に、この人達にとつて最も殘酷な呵責である放心の苦難を受けて、煉獄の淨火に聖められたのです。この人達の愛の苦しみは、天界にゐる天使達から見ると、憐れに見える程の不幸であるのです。この人達は、天界の最も高き所にゐます神の許しによつて、一年の中夜の一時間だけは、この人達の教區に屬する教會で、愛人と愛人とが逢ふ事が出來るのです。こゝで、この人達が、影の聖餐祭に集まつて、手と手を握り合ふ事を許されてゐます。私もこゝで、まだ死んでゐない貴方に逢ふ事を許されたのは、これも神樣の與へて下された一つの愉樂なのです。」

そこで、カトウリイヌ・フォンテーヌは次のやうに答へました。

「もし私が、いつか森の中であなたに飲み水をさしあげた時のやうに美しくなれますなら、私は喜んで死にたいと思ひます。」

二人が低い聲でこんな話をしてゐる間に、酷く年を取つた僧が大きな銅盤を禮拜者の前に差出しながら喜捨の金を集めに來ました。禮拜者達は交るゝ〳〵に其中へ、遠い以前から通用しない貨幣を置きました。六ポンドのエクー古銀貨、英國のフロリン銀貨、ダカット銀貨、ジャコビュスの金貨、ローヌノーブルの銀貨などが音もなしに盤の中へ落ちました。その盤は遂に騎士の前に置かれたので、彼はルイス金貨を落しましたが、今〻での金貨や銀貨と同じやうに、これも音をたてませんでした。

それから彼の老僧はカトリイヌ・フォンテーヌの前に立停つたので、カトリイーヌは懷中を探りましたが、一ファージングの銅貨も持合せてゐませんでした。併し何も入れないでその儘通して了ひたくなかつたので、騎士が死ぬ前に彼女に與へた指環を指から拔取つて、その銅盤へ投入れると、金の指環が盤の上に落ちると同時に重々しい鐘が鳴り響きました。この鐘の反響の中に、騎士を初め、僧員が司祭者や役僧や、婦人や、そこに集つてゐる總ての人達は皆消えて了つたのです。灯のついてゐた蠟燭も流れては消え、唯彼のカトリイヌ・フォンテーヌの婆さんだけが暗の中に取殘されました。

堂守はこゝで話を終ると、葡萄酒を一息にぐゝと飲み乾して、暫く默つてゐたが、やがて又次のやうに話し始めた。

「私は親父が何度も繰返して話して聽かせたのを、そのまゝお話し申したのですが、これは本當にあつた話だと思ひます。それといふのは、この話は總てその昔に私が見知つてゐる――今は此世にゐない人達の樣子や特別な風習に符合してゐるからです。わたしは子供の時から、死人の事に隨分かゝり合ひましたが、死人はみな自分の愛してゐる人のところへ立歸るものです。

吝嗇な人間が生前に隱して置いた財物の附近に、夜中徘徊するといふのも矢はりこのわけです。この人達は自分の黃金に對して嚴重な見張りをしてゐるのです。死人として、爲なくともいゝ事をして自分で自分を苦しめ、却つて自分の不利益になつて仕舞ふのです。

幽靈の姿になつて地の中に埋めた金などを掘つてゐるのは珍しい事ではありません。それと同じやうに先へ死んで了つた夫が、後に生き殘つて他人と結婚した妻を惱しに來たりする事があります。私は生きてゐた時よりも死んでから一層自分の妻を監視してゐる大勢の人の名前までも知つてゐます。

こんなことは不可ないことです。正しい意味からいへば、死人が嫉妬を懷くなどは謂れのないことです。私自身が見たことについてお話をすることも出來ますが、男が未亡人と結婚しても同じやうなことになるのです。しかし、今お話をしたカトリイヌの一件は、次のやうに傳へられてゐます。

その不思議なことのあつた翌朝、カトリイヌ・フォンテーヌは、自分の部屋で死んでゐました。さうして、聖ユーラリ敎區の役僧が集金の時に使つた銅盤の中に、二つの手の握り合つた形をした黃金の指環が這入つてゐたのを發見したのです。いや、私は冗談などをいふ男ではありません。さあ、もつと葡萄酒を飲まうではありませんか。」

—終—

幻の人力車

（キップリング）

一

惡夢よ、私の安息を亂さないでくれ。
闇の力よ、私を惱まさないでくれ。

印度といふ國が英國よりも優越してゐる二三の點のうちで、非常に顏が廣くなると言ふこともその一つである。苟くも男子である以上、印度のある地方に五年間公務に就いてゐれば、直接又は間接に二三百人の印度人の文官と、十一二の中隊や聯隊全部の人達と、種々の在野人士の千五百人ぐらゐには知られるし、更に十年間の內には彼の顏は二倍以上の人達に知られ、二十年頃になると印度帝國內の英國人の殆んど全部を知るか、あるひは少なくとも彼等について何等かを知るやうになり、さうしてどこへ行つてもホテル代を拂はずに旅行が出來るやうになるであらう。

款待を受けることを當然と心得てゐる世界漫遊者も、わたしの記憶してゐるだけでは、大分遠慮勝になつて來てはゐるが、それでも今日なほ、諸君が智的階級に屬してゐて、禮儀を知らない無賴の徒でないかぎりは、すべての家庭は諸君のために門戶をひらいて、非常に親切に面倒を見てくれるので

ある。

今から約十五年ほど前に、カマルザのリッケットといふ男がクマーオンのボルダー家に滞在したことがあつたが、ほんの二晩ばかり厄介になる積りでゐたところ、僂麻質斯性の熱が原因で六週間もボルダー邸を混亂させ、ボルダーの仕事を中止させ、ボルダーの寢室で殆んど死ぬほどに苦しんだ。ボルダーはまるでリッケットの奴隷にでもなつたやうに盡力してやつた上に、今以て毎年リッケットの子供達に贈物や玩具の箱を送つてゐる。そんなことは何處でもみな同樣である。諸君に對してお前は能なしの駄馬だといふ考へを、別に諸君に隱さうともしないやうな開放しの男や、諸君の性格を傷けたり、諸君の細君の娯樂を思ひ違ひするやうな女は、却つて諸君が病氣に罹つたり又は非常な心配事に出逢つたりする場合には、骨身を惜まずに盡してくれるものである。

ドクトル・ヘザーレッグは普通の開業醫であるが、內職に自分の家に病室を設けてゐた。彼の友人達は其設備を評して、もうどうせ癒らない患者のための馬小屋だと言つてゐたが、然し實際暴風雨に逢つて難破せんとしてゐる船に取つては適當な避難所であつた。印度の氣候は屢々蒸暑くなる上に、煉瓦づくりの家の數が少いので、唯一の特典として時間外に働くことを許可されてゐるが、それでも有難くないことには、ときぐに氣候に犯されて、捻れた文章のやうに頭が變になつて仆れる人達が有る。

ヘザーレッグは今まで印度へ來てゐたうちでは一番上手な醫者ではあるが、彼が患者への指圖といふは、「氣を鎭めて愼になつてゐなさい。」「ゆつくりお歩きなさい。」「頭を冷しなさい。」の三つにきまつてゐる。彼に言はせれば、多くの人間はこの世の中の生存に必要以上の仕事をするから死ぬのださうである。彼は三年ほど以前に自分が治療したバンセイといふ患者も、過激な仕事のために生命を失つたのだと主張してゐる。無論、彼は醫者としてさう言ふ風に斷定し得る權利を持つてゐるので、バンセイの頭には龜裂が入つて、そこから暗黑世界がほんの僅かばかり沁み込んだために、彼を死に至らしめたのだと言ふ私の說を一笑に附してゐる。

「バンセイは故國を長くはなれてゐたのが原因で死んだのだ。」と、彼は言つてゐる。「彼がケイス・ウェッシントン夫人に對して惡人のやうな振舞をしようがしまいが、そんなことはどちらでも構はない。たゞ私の注意すべき所は、カタブンデイ植民地の事業がすつかり彼を疲らせて了つた事と、彼が女から來た色仕掛けの下らない手紙の事をくよくしたり、嬉しがつたりしたと言ふことである。彼はちやんとマンネリング孃と婚約が整つてゐたのに、彼女はそれを破談にしてしまつた。そこで、彼は惡寒を感じて熱病にかゝると共に、幽靈が出るなどと詰まらない囈語を言ふやうになつた。要するに、過勞が彼の病氣の原因ともなり、死因ともなつたので、可哀さうなものさ。政府に傳達してやり給へ。——一人で二人半の仕事をした男だと言ふことを……。」

私にはヘザーレッグのこの解釋は信じられない。私はいつもヘザーレッグが往診に呼ばれて外出する時には、よくバンセイの傍に坐つてゐてやつたが、或時わたしはもう少しで叫び聲を立てようとし

た事があつた。それから彼は、低いけれども忌に落着いた聲で、自分の寢床の下をいつでも男や女や子供や惡魔の行列が通ると言つて、私をぞつとさせた。彼の言葉は熱に浮かされた病人獨得の、氣味の惡いほどの雄辯であつた。彼が正氣に立ちかへつた時、わたしは彼の煩悶の原因となる事柄の一部始終を書きつらねて置けば、彼のこゝろを輕くするに違ひないからと言つて聞かせた。實際、小さな子供が惡い言葉を一つ新しく敎はると、扉にそれを惡戯書きをするまでは滿足が出來ないものである。これもまた一種の文學である。

執筆中に彼は非常に激昂してゐた。さうして、彼の執つた人氣取りの雜誌張りの文體が、餘計彼の感情を唆つた。それから二ヶ月後には、仕事をしても差支へないとまで醫者に言はれ、また人手の少ない委員會の面倒な仕事を手傳つてくれるやうに切に懇望されたにも拘らず、臨終に際して自分は惡夢に魘はれてゐると言ふことを明言しながら、自ら求めて死んでしまつた。わたしは彼が死ぬまでその原稿を密封して置いた。以下は彼の事件の草稿で、一八八五年の日附けになつてゐた。

私の醫者はわたしに休養轉地の必要があると言つてゐる。ところが、私には間もなくこの二つながらを實行することが出來るであらう。——但しわたしの休養とは、英國の傳令兵の聲や午砲の音によつて破られないところの永遠の安息であり、わたしの轉地と言ふのは、どの歸航船も私を運んで行くことの出來ないほどに遠い彼の世へである。暫くわたしは今ゐるところに滯在して、醫師にあからさ

まに反對して、自分の祕密を打明けることに決心した。諸君はおのづと私の病氣の性質を精確に理解するとともに、曾て女からこの不幸な世の中に生み付けられた男のうちで、私のやうに苦しんで來た者があるか何うかゞ又おのづから判るであらう。

死刑囚が絞首臺にのぼる前に懺悔をしなければならないやうに、私もこれから懺悔話をするのであるが、兎に角、私のこの信じ難いほどに忌はしい狂亂の物語は諸君の注意を惹くであらう。けれども、私は自分のこの物語が永久に人々から信じられるとは全然思はない。二ヶ月前には私も、これと同じ物語を大膽にも私に話したその男を、氣ちがひか醉ひどれのやうに侮蔑した。さうして、二ヶ月前には私は印度でも一番の仕合せ者であつた。それが今日では、ベシャワーから海岸に至るまでの間に、私よりも不幸な人間は又とあらうか。この物語を知つてゐるものは私の醫者とわたしの二人である。而もわたしの醫者は、わたしの頭や消化力や視力が病に冒されてゐるために、時々に固執性の幻想が起つて來るのであると解釋してゐる。幻想、全くだ！　私は自分の醫者を馬鹿呼ばはりしてゐるが、それでもなほ判で押したやうに彼は綺麗に赤い頰鬚に手入れをして、絶えず微笑をうかべながら、溫和な職業的態度で私を見廻つて來るので、しまひには私も俺は恩知らずの、性の惡い病人だと愧ぢるやうになつた。併しこれから私が話すことが幻想であるかどうか、諸君に判斷して戴きたい。

三年前に長い賜暇期日が終つたので、グレーヴセントからボンベイへ歸る船中で、ボンベイ地方の士官の妻のアグネス・ケイス・ウェッシントンといふ女と一緒になつたのが、そもく私の運命——

わたしの大きな不運であつた。一體、彼女はどんな風の女である事を知るのは、諸君に取つてもかなり必要なことであるが、それには航海の終り頃から彼女とわたしとが、互ひに熱烈な不倫の戀に陷ちたと言ふことを知れば、滿足が行かれるだらう。こんなことは自分に多少なりとも虚榮心がある間は白狀の出來る事ではないのであるが、今の私にはそんなものは些つともない。さて、かうした戀愛の場合には、一人があたへ、他の一人が受け容れると言ふのが常である。ところが、我々の前兆の惡い馴れ初めの第一日から、私はアグネスといふ女は非常な情熱家で、男勝りで――まあ强ひて言ふなら――私よりも純な感情を持つてゐるのを知つた。從つてその當時、彼女が我々の戀愛をどう思つてゐたか知らないが、その後、それは二人に取つて實に苦い、味のないものになつてしまつた。

その年の春にボンベイに着くと、わたしたちは別れ〳〵になつた。それから二三ケ月はまつたく逢はなかつたが、わたしの賜暇と彼女の愛とがまたもや二人をシムラに馳しらせた。そこでその季節を二人で暮らしたが、その年の終る頃にはわたしのこの下らない戀愛の火焔は燃えつくして、悼はしい終りを告げて了つた。わたしはそれについて別に辯明しようとも思はない。ウェッシントン夫人もわたしのことを諦めて、斷念しようとしてゐた。一八八二年の八月に、彼女はわたし自身の口から、もう彼女の顏を見るのも、彼女と交際するのも、彼女の聲を聞くのさへも飽きがきてしまつたと言ふのを聞かされた。百人のうち九十九人の女は、わたしが彼等に飽きたら、彼等もまたわたしに飽きるであらうし、百人のうち七十五人までは他の男と無遠慮に、盛んにいちやついて、わたしに復讐するで

あらう。が、ウェッシントン夫人はまさに百人目の女であつた。いかにわたしが嫌厭を明言しても又は二度と顏を合はせないやうに、如何に手ひどい殘忍な目に逢はせても、彼女には何等の效果がなかつた。

「ねえ、ジャック。」と、彼女はまるで永遠に繰返しでもするやうに、馬鹿みたやうな聲を立てるのであつた。「きつとこれは思ひ違ひです。――全く思ひ違ひです。私達はまたいつか仲の好いお友達になるでせう。どうぞ私を忘れないで下さい。私のジャック……。」

私は犯罪者であつた。さうして、私はそれを自分でも知つてゐたので、身から出た錆だと思つて自分の不幸を默つて忍從し、又明らかに無鐵砲に厭つてもゐた。――それは丁度、一人の男が蜘蛛を半殺しにすると、どうしても踏み潰してしまひたくなる衝動と同じことであつた。私はかうした嫌厭の情を胸に抱きながら、その季節は終つた。

あくる年わたしは再びシムラで逢つた。――彼女は單調な顏をして、臆病さうに仲直りをしようとしたが、私はもう見るのも忌だつた。それでも幾だびか私は彼女と二人ぎりで逢はざるを得なかつたが、そんな時の彼女の言葉はいつでも全く同じであつた。相も變らず例の「思ひ違ひをしてゐる。」一點張りの無理な愁歎をして、結局は、「友達になりませう。」と、未だに執拗に望んでゐた。私が注意して觀察したら、彼女はこの希望だけで生きてゐることに氣が付いたかも知れなかつた。彼女は月を經るにつれて血色が惡く、だん〳〵に痩せて行つた。少くとも諸君と私とは、かう言つた振舞は餘計

に斷念させると言ふ點に於いて同感であらうと思ふ。實際、彼女の爲る事はさし出がましく、兒戯に等しく、女らしくもなかつた。私は、彼女を大いに責めてもいゝと思つてゐる。それにも拘らず、時時に熱に浮かされたやうな、眠られない闇の夜などには、自分はだん〳〵に彼女に好意を持つて來たのではないかと言ふやうなことを思ひ始めた。併しそれも確かに一つの「幻想」である。私はもう彼女を愛することが出來ないのに、愛するやうな風を續けてゐることは出來なかつた。そんなことが出來るであらうか。第一、そんなことは私達お互ひに取つて正しい事ではなかつた。

去年また私達は逢つた。——前の年と同じ時期である。さうして、前年とおなじやうに彼女は飽きしようとする彼女の努力がいかに間違つてゐるか、又いかに徒勞であるかを彼女に考へさせようとした。季節が終ると、私たちは別れた。——言ひ換へれば、彼女はもうとても私と逢ふことは出來ないと悟つた。と言ふのは、私が他に心を奪はれる事が出來してゐたからである。わたしは今、自分の病室で靜かにあの當時のことを回想してゐると、一八八四年のあの季節の事どもが異樣に明暗入り亂れて、渾沌たる惡夢のやうに見えて來る。——可愛いキッティ・マンネリングの御機嫌取り、わたしの希望、疑惑、恐怖、キッティと二人での遠乘、身を戰かせながらの戀の告白、彼女の返事、それから時々に黑と白の法被を着た苦力の人力車に乘つて靜かに通つてゆく白い顏の幻影、ウェッシントン老人の手袋をはめた手、それから極めて稀ではあつたが、夫人とわたしと二人きりで逢つた時の彼女の

歎願の悶かゝい單調——。わたしはキッティ・マンネリングを愛してゐた。實に心から彼女を愛してゐた。さうして、私が彼女を愛すれば愛するほど、アグネスに對する嫌厭の念はいよ〳〵増して行つた。八月にキッティと私とは婚約を結んだ。その次の日に、私はジャッコの後で呪ふべき饒舌家の苦力等に逢つた時、ちよつとした一時的の憐憫の情に驅られて、ウェッシントン夫人にすべての事を打明けるのを止めてしまつたが、彼女はわたしの婚約のことを已に知つてゐた。

「ねえ、あなたは婚約をなすつたさうですね。ジャック。」と言つてから、彼女は息も吐かずに、「何も彼も思ひ違ひです。まつたく思ひ違ひです。いつか私達はまた元のやうに仲好しのお友達になるでせう。ねえ、ジャック。」と言つた。

わたしの返事は男子すらも畏縮させたに違ひなかつた。それは鞭の一打ちのやうに、私の眼前にある瀕死の女のこゝろを傷めた。

「どうぞ私を忘れないで下さい。ね、ジャック。わたしは貴方を怒らせる積りではなかつたのです。併し本當に怒らせてしまつたのね。本當に……。」

さう言つたかと思ふと、ウェッシントン夫人はまつたく倒れてしまつた。私は彼女を心靜かに家に歸らせるために、そのまゝ顏をそむけて立去つたが、すぐに自分は言ひ知れぬ下品な卑劣漢であつたことを感じた。私はあとを振り返ると、彼女が人力車を引返さしてゐるのを見た。

その時の情景と周圍のありさまは私の記憶に燒付けられてしまつた。雨に洗ひ淨められた大空（恰

も雨期の終る頃であつたので）濡れて黑ずんだ松、ぬかるみの道、火藥で削り取つたどす黑い崖、かう言つたものが一つの陰鬱な背景を形づくつて、その前に苦力等の黑と白の法被や黃い鏡板の附いたウェッシントン夫人の人力車と、その内で項垂れてゐる彼女の金髮とがくつきりと浮き出してゐた。彼女は左手にハンカチーフを持つて人力車の蒲團に靠れながら失神したやうになつてゐた。わたしは自分の馬をサンジョオリ貯水場のほとりの拔道へ向けると、文字通りに馬を飛ばした。「ジャック！」と彼女が微に一聲叫んだのを耳にしたやうな氣がしたが、或は單なる錯覺かも知れなかつた。私は馬を止めてそれ確めようとはしなかつた。それから十分の後、私はキッティが馬に乘つて來るのに出逢つたので、二人で長いあひだ馬を走らせて、さん〳〵樂しんでゐるうちに、ウェッシントン夫人との會合の事などはすつかり忘れてしまつた。

一週間の後にウェッシントン夫人は死んだ。

二

夫人が死んだので、彼女が存在してゐると言ふ一種の重荷がわたしの一生から取除かれた。私は非常な幸福感に胸を躍らせながらプレンスウァードへ行つて、そこで三ケ月間をおくつてゐるうちに、ウェッシントン夫人の事などは全然忘れ去つた。たゞ時々に彼女の古い手紙を發見して、私達の過去の關係が自分の頭に浮んで來るのが不愉快であつた。正月の中にわたしは種々の場所に入れて置いた

私達の手紙の殘りを探し出して、こと〳〵く燒き捨てた。その年、卽ち一八八五年の四月の初めには私はシムラにゐた。――殆ど人のゐないシムラで、もう一度キッティと深い戀を語り、又そゞろ歩きなどをした。わたし達は六月の終りに結婚することに決まつてゐた。從つて、當時印度における一番の果報者であると自ら公言してゐる際、しかも私のやうにキッティを愛してゐる場合、あまり多く口が利けなかつたと言ふことは、諸君にも納得出來るであらう。

それから十四日間と言ふものは、毎日毎日空に過した。それから、私達のやうな事情にある人間が誰でも懷くやうな感情に驅られて、私はキッティのところへ手紙を出して、婚約の指環といふものは許嫁の娘としてその品格を保つべき有形的の標であるから、その指環の寸法を取るために、すぐにハミルトンの店まで來るやうにと言つて遣つた。實をいふと、婚約の指環などといふことは極めて詰まらない事であるので、私はこの時まで忘れてゐたのである。そこで、一八八五年の四月十五日に私達はハミルトンの店へ行つた。

この點をどうか頭に置いて貰ひたいのだが――たとひ醫者がどんなに反對な事を言はうとも――その當時のわたしは全くの健康狀態であつて、均衡を失はない理性と絕對に冷靜な心とを持つてゐた。キッティと私とは一緒にハミルトンの店へ這入つて、店員がにや〳〵笑つてゐるのも構はず、自分でキッティの指の太さを計つてしまつた。指環はサファイヤにダイヤが二個這入つてゐた。私達はそれからコムバーメア橋とベリティの店へゆく坂道を馬に乘つて降りて行つた。

粗い泥板岩の上を用心深く進んでゆく私の馬のそばで、キッティが笑つたり、お喋りをしたりしてゐる折柄――丁度、平原のうちに彼のシムラが圖書閲覽室やベリティの店の露臺に圍まれながら見えて來た折柄――私はずつと遠くの方で誰かが私の洗禮名を呼んでゐるのに氣がついた。曾て聞いたことのある聲だなと直感したが、さて何時どこで聞いたのか、すぐには頭に浮んで來なかつた。ほんの僅かの間、その聲は今まで來た小路とコムバーメア橋との間の道一ぱいに響き渡つたので、七八人の者がこんな亂暴な眞似をしてゐるのだと思つたが、結局それは私の名を呼んでゐるのではなくて何か歌を唄つてゐるに相違ないと考へた。

そのとき、忽ちにベリティの店の向う側を黑と白の法被を着た四人の苦力が、黄い鏡板の安つぽい出來合ひ物の人力車を挽いて來るのに氣がついた。さうして懊惱と嫌惡の念を以て、わたしは去年の季節のことや、ウェッシントン夫人のことを思ひ出した。それにしても彼女はもう死んで了つて、用は濟んでゐる筈である。なにも黑と白の法被を着た苦力を連れて、白晝の幸福を妨げに來なくてもいい譯ではないか。それで私は、先づあの苦方等の雇主が誰であらうと、その人に訴へて、彼女の苦力の着てゐた法被を取替へるやうに懇願してみようと思つた。あるひは又、わたし自身が彼の苦力を雇ひ入れて、若し必要ならば彼等の法被を買ひ取らうと思つた。兎に角に、この苦力等の風采がどんなに好ましからぬ記憶の流れを換起したかは、とても言葉に言ひ盡せないのである。

「キッティ。」と私は叫んだ。あすこに死んだウェッシントン夫人の苦力がやつて來ましたよ。一體、

今の雇主は誰なんでせうね。」

キッティは前の季節にウェッシントン夫人と鳥渡逢つたことがあつて、青ざめてゐる彼女に就いては常に好奇心を持つてゐた。

「なんですつて……。何處に……。」とキッティは訊いた。わたしにはどこにもそんな苦力は見えませんわ。」

彼女がかう言つた刹那、その馬は荷を積んだ騾馬を避けようとした機勢に、丁度こつちへ進行して來た人力車と眞向ひになつた。私はあつと聲をかける間もない中に、こゝに驚くべきは、彼女とその馬とが苦力の車とを突きぬけて通つたことである。苦力も車もその形はみえながら、恰も稀薄なる空氣に過ぎないやうであつた。

「どうしたと言ふんです。」とキッティは叫んだ。何を詰まらないことを呶鳴つてゐるんです。わたしは婚約をしたからと言つて、別に人間が變つたわけでも無いんですよ。驢馬と露臺との間にこんなに場所があつたのね。貴方はわたしが馬に乘れないとお思ひなんでせう。では、見ていらつしやい。」

強情なキッティはその優美な小さい頭を空中に飛び上らせながら、音樂堂の方向へ馬を駈けさせたあとで彼女自身も言つてゐたが、馬を駈けさせながらも、私が後から附いて來るものだとばかり思つてゐたさうであつた。ところが、どうしたと言ふのであらう。私は附いて行かなかつた。私はまるで氣違ひか酔拂ひのやうになつてゐたのか、或はシムラに惡魔が現れたのか、わたしは自分の馬の手綱

を引き締めて、ぐるりと向きを變へると、例の人力車もやはり向きを變へて、コムパーメア橋の左側の欄干に近いところで私のすぐ目の前に立ち塞がつた。

「ジャック。私の愛するジャック！」（その時の言葉は確にかうであつた。それ等の言葉はわたしの耳のそばで呶鳴り立てられたやうに、わたしの頭に鳴り響いた。）「何か思ひ違ひしてゐるのです。まつたくさうです。どうぞ私を堪忍して下さい、ジャック。さうして又お友達になりませう。」

人力車の幌がうしろへ落ちると、私が夜になると怖がるくせに毎日考へてゐた死そのものゝやうにその内にはケイス・ウェッシントン夫人がハンカチーフを片手に持つて、金髪の頭を胸のところまで垂れて坐つてゐた。

どのくらゐの間、わたしは身動きもしないでぢつと見詰めてゐたか、自分にもわからなかつたが、仕舞に馬丁が私の馬の手綱をつかんで、病氣ではないかと訊いたので、やう〳〵我にかへつたのである。私は馬から轉げ落ちんばかりに、殆んど失神したやうになつてピリティイの店へ飛び込んで、シェリイ・ブランデイを一杯飲んだ。店の内には二組か三組の客がカフェーの卓子を圍んで、その日の出來事を論じてゐた。この場合、彼等の愚にも付かない話の方が、私には宗教の慰藉などよりも大いなる慰藉になるので、一も二もなくその會話の渦中に投じて、喋つたり、笑つたり、鏡のなかへ死骸のやうに青く歪んで映つた人の顔にふざけたりしたので、三四人の男は呆れてわたしの態度をながめてゐたが、結局、餘りにブランデイを飲み過ぎたせゐだらうと思つたらしく、好い加減にあしらつて私

を除け者にしようとしたが、私は動かなかつた。なぜと言つて、その時の私は、日が暮れて怖くなつたので夕飯の仲間へ飛び込んで來る子供のやうに、自分の仲間が欲しかつたからであつた。それから私は十分間ぐらゐも雑談してゐたに相違なかつたが、その時の私にはその十分間ほどが實に限りもなく長いやうに思はれた。そのうちに、外でわたしを呼んでゐるキッティの聲がはつきりと聞えたかと思ふと、つゞいて彼女が店のなかへ這入つて來て、わたしが婚約者としての義務を甚だ怠つてゐると言ふことを婉曲に詰問しようとした。私の目の前には何か得體の知れないものがあつて、彼女を遮つてしまつた。

「まあ、ジャック。」と、キッティは呶鳴つた。何をしてゐたんです。どうしたんです。貴方は御病氣ですか。」

かうなると、嘘を敎へられたやうなもので、けふの日光がわたしには少し強過ぎたと答へたが、あひにく今は四月の雲つた日の午後五時近くであつた上に、けふは殆ど日光を見なかつたことに氣が付いたので、なんとかそれを胡麻化さうとしたが、キッティは眞赤になつて外へ出て行つてしまつたので、私はほかの連中の微笑に送られながら、悲觀の體で彼女のあとに附いて出た。私はなんと言つたか忘れてしまつたが、どうも氣分が惡いからと言ふやうなことで二言三言言ひ譯をした後、獨りでもつと乘り廻ると言ふキッティを殘して、自分だけは徐に馬をあゆませてホテルに歸つた。

自分の部屋に腰をおろして私は冷靜にこの出來事を考へようとした。こゝに私といふ人間がある。

それはテオパルド・ジャック・ペンセイといふ男で、一八八五年度の教養のあるベンガル州の文官で自分では身心共に健全だと思つてゐる。その私が、しかも婚約者の傍で、八ヶ月以前に死んで葬られた一婦人の幻影に惑まされたと言ふのは、實に私としては考へ得べからざる事實であつた。キッテイと私とがハルミトンの店を出た時には、わたしはウェッシントン夫人のこと以外に何事も考へてゐなかつた。ベリテイの店の向う側には見渡すかぎり塀があるばかりで、極めて平々凡々な場所であつた。おまけに白晝で、道には往來の人が一ぱいであつた。而もそこには常識と自然律とに全然反對に墓から出て來た一つの顏が現れたのであつた。

キッテイの亞剌比亞馬がその人力車を突きぬけて行つてしまつたので、誰かウェッシントン夫人に生寫しの婦人が、その人力車と、黑と白の法被を着た苦力を屠つたのであつて呉れゝば好いがと思つた最初の希望は外れた。わたしは幾たびか色々に考へを立直してみたが、結局それは徒勞と絶望に終つた。あの聲はどうしても妖怪變化の聲とは考へられなかつた。最初、私はすべてをキッテイに打明けた上で、その場で彼女に結婚するやうに哀願して、彼女の抱擁によつて人力車の幻影を防がうと考へた。「畢竟」と私は自分に反駁した。「人力車の幻影などは、人間に怪談的錯覺性があることを證明するに過ぎない。男や女の幽靈を見るといふことは有り得るかも知れないが、人力車や苦力の幽靈を見るなどといふ、そんな馬鹿馬鹿しいことがあつて堪るものか。まあ、丘に住む人間の幽靈とでも言ふのだらう。」

次の朝、わたしは昨日午後における自分の常軌を逸した行爲を寛恕してくれるやうにとキッテイのところへ謝罪の手紙を送つた。而もわたしの女神はまだ怒つてゐたので、私が自身に出頭して謝罪しなければならない破目になつた。私はゆうべ徹夜で、自分の失策について考へてゐたので、消化不良から來た急性の心悸亢進のために飛んだ失禮をしましたと眞しやかに辯解したので、キッテイの御機嫌も直つて、その日の午後に二人はまた馬の轡をならべて外出したが、私の最初の謊はやはり二人の心になんとなく溝を作つてしまつた。

彼女はしきりにジャッコの周圍を馬で廻りたいと言つたが、私は昨夜以來まだぼんやりしてゐる頭で、それに弱く反對して、オブザーバトリイの丘か、ジュトーか、ボイルローグング街道を行かうと言ひ出すと、それが又キッテイの怒りに觸れてしまつたので、私はこの以上の誤解を招いては大變だと思つて、その言ふがまゝにシヨタ・シムラの方角へ向つた。私たちは道の大部分を歩いて、それから尼寺の下の一哩ばかりは馬を緩く走らせて、サンジョウレー貯水場のほとりの平坦な一筋道に出るのが習慣になつてゐた。やゝもすれば質の惡い私たちの馬はかけ出さうとするので、坂道の上に近づくと、わたしの心臟の動悸はいよ〳〵激しくなつて來た。この午後から私の心はウェッシントン夫人の事で常に一ぱいになつてゐたので、ジャッコの道の到る所が、その昔ウェッシントン夫人と二人で歩いたり、話したりして通つたことを私に思ひ出させた。思ひ出は路ばたの石ころにも滿ちてゐる。雨に水量を增した早瀨も不倫の物語を笑ふやうに流れてゐる。風もわたしの耳のそばで私たちの不義

を大きく囃し立てゝゐた。

平地の中央で、男の人達が婦人の一哩競爭に應援してゐる聲が、なんとなく恐ろしい事件が待ち構へてゐるやうに感じさせた。人力車は一臺も見えなかつた。――と思ふ途端に、八ケ月と二週間以前に見たものと全く同一の黑と白の法被を着た四人の苦力と、黃い鏡板の人力車と、金髮の女の頭が現れた。その一瞬間、私はキッテイもわたしと同じ物を見たに相違ないと思つた。――なぜならば、私たちは不思議にも總ての事に共鳴してゐたからである。併し彼女の次の言葉で私はほつとした。

「誰もゐないわね。さあ、ジャック。貯水場の建物のところまで二人で競爭しませう。」

彼女の小賢しい亞剌比亞馬は飛鳥のごとくに駈け出したので、わたしの騎兵用軍馬もすぐに後から續いた。さうして、この順序で私達は馬を崖の上に駈け登らせた。すると、五十ヤードばかりの眼前に、例の人力車が現れた。はつと思つて私は手綱を引いて、馬をすこしく後退りさせると、人力車は道の眞中に立ち塞がつた。而も今度もまたキッテイの馬はその人力車を突きぬけて行つてしまつたので、私の馬もそのあとに續いた。

「ジャック、ジャック、貴方……。どうぞ私を堪忍して下さいよ。」と言ふ聲がわたしの耳へ咽び泣くやうに響いたかと思ふと、すぐにまた、「みんな思ひ違ひです。まつたく思ひ違ひです。」と言ふ聲がきこえた。

私はまるで物に憑かれた人間のやうに、馬に拍車を當てた。さうして、貯水場の建物の方へ顏を向

けると、黑と白の法被が――執念深く――灰色の丘のそばに私を待つてゐた。私が今聽いたばかりのあの言葉が、風と共に人を嘲けるやうに響いて來た。キッテイは私がそれから急に默つてしまつたのを見て、頻りに揶揄つてゐた。

それまでの私は口から出任せに喋つてゐたが、その後は自分の命を失はないやうにするために、わたしは喋ることが出來なくなつたのである。私はサンジョウリーから歸つて、それからお寺へ運ばれるまで、なるべく口を閉ぢてしまふやうになつた。

三

その晩、私はマンネリング家で食事をする約束をしたが、ぐづくしてゐるとホテルへ歸つて着物を着かへる時間がないので、エリイシウムの丘への道を馬上で急いでゐると、闇のうちに二人の男が話し合つてゆくのを耳にした。

「まつたく不思議な事もあるものだな。」と一人が言つた。

「どうしてあの車の走つた跡がみんな無くなつてしまつたのだらう。君も知つてゐる通り、うちの女房は馬鹿馬鹿しい程にあの女が好きだつたのだ。(僕にはどこが好いのか判らなかつたがね。)それだもんだから、どうしてもあの女の古い人力車と苦力とを手に入れたいと强請るのでね。僕は一種の病的趣味だと言つてゐるのだが、まあ奧方の言ふ通りにしたと言ふ譯さ。ところが、ウェッシントン

夫人に雇はれてゐたその人力車の持主が僕に話したところに據ると、四人の苦力は兄弟であつたが、ハードウアへ行く路でコレラに罹つて死んでしまひ、その人力車は持主が自分で毀してしまつたと言ふのだが、君はそれを信じるかね。だから、その持主に言はせると、死んだ夫人の人力車は些つとも使はないうちに毀したので、大分に損をしたと言ふのだが、どうも少し變ではないか。ねえ、君。あの可哀さうな、可愛らしいウェッシントン夫人が自分自身の運命以外に、他の人間の運命をぶち毀すなどとは、まつたく考へられないことではないか。」

私はこの男の最後の言葉を大きい聲で笑つたが、その笑ひ聲に自分でぞつとした。それでは矢はり人力車の幽靈や、幽靈が幽靈を雇ひ入れるなどといふ事があるのであらうか。ウェッシントン夫人は苦力等に幾らの賃銀を拂ふのであらうか。彼等苦力は何時間働くのであらうか。さうして、彼等苦力はどこへ行つたのであらうか。

すると、私のこの最後の疑問に對する明白なる答へとして、まだ黄昏だと言ふのに、又もや例の幽靈がわたしの行手を塞いでゐるのを見た。亡者は足が早く、一般の苦力さへも知らないやうな近路をして走り廻る。私はもう一度大きい聲を立てゝ笑つたが、なんだか氣違ひになりさうな氣がしたので慌てゝその笑ひ聲を抑へた。いや、私は人力車の鼻の先で馬を止めると、殿懃にウェッシントン夫人にむかつて、「今晩は。」と言つて了つたところを見ると、已にある程度までは氣が違つてゐたのかも知れない。彼女の返事は、私がよく知り過ぎてゐる程に聞き慣れた例の言葉であつた。わたしは彼女

の例の言葉をずつかり聞いてから、もうその言葉は前から幾たびか聞いてゐるから、もつと何か他のことを話してくれゝばどんなに嬉しいだらうと答へた。あの夕方はいつもよりも餘ほど根強い魔物のこころに喰ひ入つたに相違ない。私は眼前のその幽靈と相對して、五分間ばかりもその日の平凡な出來事を話してゐたやうに、微かに記憶してゐる。

「氣違ひだ。可哀さうに……。それとも醉つてゐるのかも知れない。マックス、その人を宅まで送り屆けてやれ。」

それは確かにウェッシントン夫人の聲ではなかつた。私がひとりで喋つてゐるのを立ち聽きしてゐた先刻の二人の男が、私を介抱しようとしてもどつて來た。かれらは非常に親切で、思ひやりがあつた。彼等の言葉から察すると、私がひどく醉つてゐるのだと思つてゐるらしかつた。私はあわてゝ彼等に禮を言つて、馬を走らせてホテルに歸つて、大急ぎで衣服を改めて、マンネリングの家へ行つた時は、約束の時間よりも五分遲れてゐた。わたしは闇夜であつたからと言ふのを口實にして辯解したが、キッティに戀人らしくない遲刻を反駁されながら、兎にも角にも食卓に着いた。

食卓では已に會話に花が咲いてゐたので、わたしは彼女の御機嫌を取戻さうとして氣の利いた小話をしてゐた時、食卓の端の方で赤い短い頰鬚を生やした男が、こゝへ來る途中で見知らない一人の氣ちがひに出逢つたことを尾鰭をつけて話してゐるのに氣が付いた。その話から押して、それは三十分前の出來事を繰返してゐるのであることが判つた。その物語の最中に、その男は商賣人の話家がする

やうに、喝采を求めるために一座をずらりと見廻した拍子に、彼とわたしの眼とがぴつたり出合ふと、そのまゝ口をつぐんで仕舞つた。一瞬間、恐ろしい沈默が續いた。その赤鬚の男は「その後は忘れた。」と言ふやうな意味のことを口のうちで呟いてゐた。それがために、彼は過去六季節のあひだに築き上げた上手な話手としての名聲を臺無しにしてしまつた。私は心の底から彼を祝福してから、料理の魚を食ひはじめた。

食卓は隨分長い間かゝつて終つた。わたしは全く殘り惜いやうな心持でキッテイに別れを告げた。

——多分また戸の外には幽靈が私の出て來るのを待つてゐるのだらうと思ひながら。——例の赤鬚の男（シムラのヘザーレッグ先生として私に紹介された。）が途中まで御一緒に參りませうと言ひ出したので、私も喜んでその申出でを受けた。

わたしの豫感は誤らなかつた。幽靈はもう樹蔭の路に待受けてゐた。しかも、私達の行手を惡魔的に冷笑してゐるやうに、前燈に灯まで點けてゐたではないか。赤鬚の男は食事中も絶えず私の先刻の心理狀態を考へてゐたと言ふやうな態度で、忽ちに灯の見えた地點まで進んで來た。

「ねえ、バンセイ君。エリイシウムの道で何か變つた事でもあつたのですかね——。」

この質問があまり唐突であつたので、私は考へる暇もなしに返事が口から出てしまつた。

「あれです。」と言つて、わたしは灯の方を指さした。

「私の知るところによれば、化物などと言ふものは先づ醉拂ひの譫言か、それとも錯覺ですな。ところで今夜、あなたは酒を飲んでゐられない。わたしは食事中、醉拂ひの譫言でないことを觀察しましたよ。それ貴方の指さしてゐる所には何にもないではありませんか。それだのに、貴方はまるで物に怖ぢた小馬のやうに汗を流して顫へてゐるのを見ると、どうも錯覺らしいですな。ところで、私はあなたの錯覺について何も彼も知りたいものですが、どうでせう、一緒にわたしの家までお出でになりませんか。ブレッシングトンの坂下ですが……。」

非常に有難いことには、例の人力車が私達を待構へてはゐたけれども、二十ヤード程も先にゐてくれた。——さうして又、この距離は私達が歩かうが、又は緩く駈けさせやうが、いつでも正しく保たれてゐた。そこでその夜、長いあひだ馬に乘りながら、私は今諸君に書き殘してゐるとほゞ同じやうなことを彼にも話した。

「成程、あなたは私が今まで皆んなに話してゐた得意の話のうちの一つを臺無しにしておしまひなすつた。」と彼は言つた。「併しまあ、貴方が經驗して來られたことに免じて勘辨してあげませう。その代りに、わたしの家へ來て下すつて、私の言ふ通りに爲さらなければいけませんよ。さうして、私が貴方をすつかり直して上げたら、もうこれに懲りて、一生婦人を遠ざけて不消化な食物を撮らないやうになさるのですな。」

人力車は執念深くまだ前の方にゐた。さうして、私の赤鬚の友達は、幽靈のゐる場所を精密にわたしから聞いて、非常に興味を感じたらしかつた。

「錯覺……。ねえ、バンセイ君。――それは要するに眼と腦髓と、それから胃袋、特に胃袋から來るのですよ。あなたは非常に想像力の發達した頭腦を持つてゐる割に、胃袋があまりに小さすぎるのです。それで、非常に不健康な眼、つまり視覺上の錯覺を生ずるのですよ。貴方の胃を丈夫になさい。さうすれば、自然に精神も安まります。それには佛蘭西の治療法によつて肝臟の丸藥がよろしい。あなたは今日から私に治療を一任させて戴きたい。何しろ貴方は詰まらない一つの現象のために、あまりに奪はれ過ぎてゐますからな。」

丁度その時、私達はプレッシントンの坂下の木蔭を進んで行つた。人力車は泥板の崖の上に差し出てゐる一本の小松の下にぴたりと止まつた。我を忘れて私もまた馬を止めたので、ヘザーレッグは俄に呶鳴つた。

「さあ、胃と腦と眼から來る錯覺患者のためにも、こんな山の麓でいつまでも冷い夜の空氣に當て置いて好いか悪いか、考へても……。おや、あれはなんだ。」

私たちの行手に耳を劈くやうな爆音がしたかと思ふと、一寸先も見えないほどの砂煙がぱつと立つた。轟く音、枝の裂ける音、さうして光が十ヤードばかり――松や藪や、ありとあらゆる物が――坂の下へ崩れ落ちて來て、われ〳〵の道を塞いでしまつた。根こぎにされた樹木は暫くの間、泥醉して苦しんでゐる巨人のやうにふら〳〵してゐたが、やがて雷のやうな響きと共に、他の樹のあひだに落ちて横はつた。私達ふたりの馬はその恐ろしさに、恰も化石したやうに立竦んだ。土や石の落ちる物

音が鎭まるや否や、わたしの連れは呟いた。

「ねえ、若し僕達がもう少し前へ進んでゐたらば、今頃は生埋めになつてゐたでせう。まだ神樣に見捨てられなかつたのですな。さあ、バンセイ君。家へ行つて、一つ神樣に感謝しようではありませんか。それに、どうも馬鹿に喉が渴いてね。」私達は引返して敎會橋を渡つて、眞夜中の少し過ぎた頃に、ドクトル・ヘザーレッグの家に着いた。

それから殆どすぐに、彼はわたしの治療に取りかゝつて、一週間と言ふものは私から離れなかつた。そのあひだ幾たびか私はシムラの親切な名醫と近附きになつた自分の幸運に感謝したのであつた。日增しに私のこゝろは輕く、落付いて來た。さうして又、だん〳〵にヘザーレッグのいはゆる胃と頭腦と眼から來ると言ふ「妖怪的幻影」の學說に共鳴して行つた。私は落馬して鳥渡した挫傷をしたために四五日は外出することも出來ないが、あなたが私に逢へないのを寂しく思ふ前には全快するであらうと言ふやうな手紙を書いて、キッティに送つて置いた。

ヘザーレッグ先生の治療は甚だ簡單であつた。肝臟の丸藥、朝夕の冷水浴と猛烈な體操、それが彼の治療法であつた。――尤もこの朝夕の冷水浴と體操は散步の代りで、彼は愼重な態度で私にむかつて、「挫傷した人間が一日に十二哩も步いてゐるところを婚約の婦人に見られたら、吃驚しますからな。」と言つてゐた。

一週間の終りに、瞳孔や脈膊を調べたり、攝食や步行のことを嚴格に注意された上で、ヘザーレッ

グは私を引取つた時のやうに、無造作に退院させてくれた。別れに臨んで、彼はかう祝福してくれた。「ねえ、私はあなたの神經を直したと言ふことを斷言しますが、併しそれよりも、貴方の疾病を直したと言つた方が本當ですよ。さあ、出來るだけ早く手荷物をまとめて、キッティ孃の愛を得に飛んでいらつしやい。」

私は彼の親切に對してお禮を言はうとしたが、彼はわたしを遮つた。

「貴方が好きだから、私が治療して上げたなどと思はないで下さい。わたしの推察する所によると、貴方はまつたく無賴漢のやうな行爲をして來なすつた。が、同時にあなたは一風變つた無賴漢である如く、一風變つた非凡な人です。さあ、もうお歸りになつてもよろしい。さうして、眼と頭と胃から來る錯覺がまた起るかどうか。見てゐて御覽なさい。もし錯覺が起つたら、その度ごとに十萬ルビーを貴方に差上げませう。」

三十分の後には、私はマンネリング家の應接間でキッティと對座してゐた。——現在の幸福觀と、もう二度と再び幽靈などに襲はれないで濟むといふ安心に醉ひながら。——私はこの新しい確信に自ら興奮してしまつて、すぐに馬に乘つてジャッコを一廻りしないかと申出たのであつた。

四月三十日の午後、私はその時ほど血氣と單なる動物的精力とを身内に溢るゝやうに感じたことは曾てなかつた。キッティはわたしの樣子が變つて快活になつたのを喜んで、率直な態度で明らさまに私に讃辭を浴びせかけた。私達は一緒にマンネリング家を出ると、談笑しながら前日のやうに、シュ

タ・シムラの道に沿つて馬をゆるやかに進めて行つた。

私はサンジョリイ貯水場に行つて、自分はもう幽靈に襲はれないといふ自信を確めるために馬を急がせた。わたし達の馬はよく走つたにも拘らず、私の逸る心には遲くて遲くて堪らなかつた。キッティは私の亂暴なのに吃驚してゐた。「どうしたの、ジャック。」と、たうとう彼女は叫んだ。「まるで駄々つ兒のやうね。どうしようと言ふんです。」

丁度わたし達が尼寺の下へ來た時、私の馬が路から跳り出ようとしたのを、そのまゝに一鞭あてて、路を突つ切つて一目散に走らせた。

「なんでもありませんよ。」と私は答へた。「唯これだけの事です。あなただつて一週間も家に居たまで何にもしなかつたら、私のやうにこんなに亂暴になりますよ。」

上々の機嫌で囁き、歌ひ、

生きてゐる身を樂しまん。

造化の神よ、現世の神よ、

五官を統る神樣よ。

まだ私の歌ひ終らないうちに、私達は尼寺の上の角をまはつて、更に三四ヤード行くと、サンジョリイが眼の前に見えた。平坦な道のまん中に黑と白の法被と、ウェッシントン夫人の乘つてゐる黃い鏡板の人力車が立塞がつてゐるではないか。私は思はず手綱を引いて、眼を擦つてぢつと見詰めて、

確に幽靈に相違ないと思つたが、それから先は覺えない。たゞ道の上に顏を伏せて倒れてゐる自分の傍に、キッティが涙を流しながら跪いてゐるのに氣が付いただけであつた。

「もう行つてしまひましたか。」と私は喘いだ。キッティはます〳〵泣くばかりであつた。

「行つてしまつたとは……。何がです……。ジャック、一體どうしたの。何か思ひ違ひをしてゐるんぢやないの。ジャック、全く思ひ違ひよ。」

彼女の最後の言葉を耳にすると、私はぎよつとして立上つた。——氣が狂つて——暫くのあひだ囈語のやうに喋り出した。

「さうです、何かの思ひ違ひです。」と、私は繰返した。「全く思ひ違ひです。さあ、幽靈を見に行きませう。」

私はキッティの腰を抱へるやうにして、幽靈の立つてゐる所まで彼女を引張つて行つて、どうか幽靈に話し掛けさせてくれと哀願した。それから、自分達二人は婚約の間柄であるから、死んでも地獄でも二人のあひだの絆を斷切ることは出來ないぞと幽靈に話したことだけは、自分でも明瞭に記憶してゐるし、自分よりも更にキッティの方がよく知つてゐる。私は夢中になつて、人力車の中の恐ろしい人物にむかつて、自分の言つた事はみな事實であるから、今後自分を殺すやうな苦惱を免してくれと、くり返して訴へた。今になつて思へば、それは幽靈に話しかけてゐたと言ふよりも、ウェッシントン夫人と自分との古い關係をキッティに打明けたやうなものであつたかも知れない。眞白な顏をして眼を光らせながら、その話にキッティが一心に耳を傾けてゐたのを私は見た。

「どうもありがたう、パンセイさん。」とキッティは言つた。「もう澤山です。わたしの馬を連れておいで。」

東洋人らしい落付いた馬丁が、勝手に走つて行つた馬を連れ戻して來ると、キッティは鞍に飛び乘つた。私は彼女をしつかりと押へて、私の言ふことをよく聞いて、わたしを免して貰ひたいと切願すると、彼女はわたしの口から眼へかけて鞭で打つた。さうして、一言二言の別れの言葉を殘したまゝで行つてしまつた。その別れの言葉——私は今以て書くに忍びない。わたしは色々に判斷した結果、彼女は何も彼も知つてしまつたと言ふことが一番正しい解釋であると思つた。私は人力車の方へよろめきながら行つた。わたしの顏にはキッティの鞭の跡が生々しく紫色になつて血が流れてゐた。私はもう自尊心も何もなくなつてしまつた。丁度その時、多分キッティと私のあとを遠くから附いて來たのであらう、ヘザーレッグが馬を飛ばして來た。

「先生。」と、私は自分の顏を指さしながら言つた。「こゝにマンネリング孃からの破談通知の印があります。——十萬ルピーはすぐに戴けるのでせうね。」

ヘザーレッグ先生の顏を見ると、かうした卑しむべき不幸の場合にも拘らず、わたしは冗談を言ふ餘裕が出て來た。

一わたしは醫者としての名譽に賭けても……。」と彼が言ひのけたので、「冗談ですよ。」とわたしはいつた。「それよりも、私は一生の幸福を失つてしまつたのですから、私を家へ連れて行つて下さい。」私がこんなことを話してゐる間に、例の人力車は消えてしまつた。それから私はまつたく意識を失つて、唯ジャッコの峰が膨れあがつて雲の峰のやうに渦を卷いて、わたしの上に落ちて來たやうな氣がしてゐた。

四

それから一週間の後（卽ち、五月七日に）私はヘザーレッグの部屋に、まるで小さい子供のやうに弱つて横はつてゐるのに氣が付いた。ヘザーレッグは机の上の書類越しに私をぢつと見守つてゐた。かれの最初の言葉は別に私に力を附けてくれるやうなものでもなかつた。私自身もあまりに疲れ過ぎてゐたので、少しも感動しなかつた。

「キッテイさんから返して來た貴方の手紙がこゝにあります。流石に若い人だけに、貴方も大分文通をしたものですね。それからこゝに指環らしい包みがあります。それにマンネリングのお父さんからの丁寧な手紙が附けてありましたが、それは私の名宛であつたので讀んでから燒いてしまひました。お父さんは貴方に滿足してゐないやうでしたよ。」

「で、キッテイは……。」と、私は微な聲で訊いた。

「いや、その手紙は彼女のお父さんの名にはなつてゐましたが、寧ろ彼女の言つてゐる言葉でしたよ。その手紙によると、あなたは彼女と戀に陷ちた時に、不倫の思ひ出の何も彼も打明けてしまはなければならなかつたと言ふのです。それから又、貴方がウェッシントン夫人に仕向けたやうなことを、婦人に對して行ふ男は、男子全體の名譽を汚した謝罪のために、宜しく自殺すべきであると言ふのですよ。彼女は若いくせに、感情に激し易い勇婦ですからね。ジャッコへゆく途中で騷ぎが起つた時、あなたが囈語に惱んだだけでもう十分であるのに、彼女はあなたと再び言葉を交すくらゐならば、いつそ死んでしまふと言ふのですよ。」

わたしは唸り聲を發すると共に、反對の側へ寢返りを打つてしまつた。

「さて、貴方はもう物を選擇する力を回收してゐますね。好うございますか。この婚約は破られるべき性質のものであり、又この上にマンネリング家の人々もあなたを苛酷な目に逢はせようとは思つてゐません。ところで、一體この婚約は單なる囈語のために破られたのでせうか、それとも癲癇的發作のためでせうか。お氣の毒ですが、あなたが自分には遺傳性癲癇があると申出てくれなければ、私には他に適當な診斷が附かないのですがね。私は特に遺傳性癲癇といふ言葉を申しますよ。さうして貴方の場合はその發作だと思ひますがね。シムラの人々は婦人一哩競爭の時のあの光景をみな知つてゐますよ。さあ私は五分間の猶豫をあたへますから、癲癇の血統があるか無いか考へてみて下さい。」

そこで、この五分間——今でも私はこの世ながらの地獄のどん底を探り廻つてゐたやうな氣がす

る。同時に疑惑と不幸と絶望との常闇の迷路をつまづき歩いてゐる自分のすがたを私は見守つてゐた。さうして私も亦、ヘザーレッグが椅子に腰をかけながら知りたがつてゐるやうに、自分はどつちを選擇するだらうかといふ好奇心を以て自分をながめてゐたが、結局わたしは自分自身が極めて微な聲で返事をしたのを聞いた。

「この地方の人間は馬鹿馬鹿しく道德觀念が強い。それだから彼等に發作を與へよ、ヘザーレッグ、それから俺の愛をあたへてくれ。さて、俺はもう少し寢なくつちやならない。」

それから二つの自己がまた一つになると、過ぎ去つた日の事どもをだん〳〵に辿りながら、寢床の上で蜿うち廻つてゐる、たゞの私（半分發狂し、惡魔に憑かれた私）になつた。

「しかし俺はシムラにゐるのだ。」と、私は繰返して自分に言つた。「ジャック・バンセイといふ俺は今シムラにゐる。しかもこゝには幽靈はゐないではないか。あの女がこゝにゐる風をしてゐるのは不合理の事だ。何故にウェッシントン夫人は俺を獨りにして置くことが出來なかつたのか。おれは別にあの女に對して何の危害を加へたこともないのだ。その點に於いてはあの女も俺も同じことではないか。たゞ俺はあの女を殺す目的で、あの女の手に歸つて行かなかつただけのことだ。なぜ俺は獨りでゐられないか。――獨りで、幸福に……。」

私が初めて目をさました時は、恰も正午であつたが、私が再び眠りかゝつた時分には太陽が西に傾いてゐた。それから犯罪者が牢獄の棚の上で苦しみながら眠るやうに眠つたが、あまりに疲れ切つて

ゐたので、却つて起きてゐる時分よりも餘計に苦痛を感じた。

翌日もわたしは寢床を離れることが出來なかつた。その朝、ヘザーレッグは私にむかつて、マンネリング氏からの返事が來たことや、彼（ヘザーレッグ）の友情的斡旋のお蔭で、わたしの苦惱の物語りはシムラの隅々まで擴がつて、誰もみな私の立場に同情してゐてくれる事などを話してくれた。

「さうして、この同情は寧ろあなたが當然受くべきものであつた。」と、彼は愉快さうに結論を下した。「それに、あなたが人世の苦い經驗をかなりに經て來られたことは神樣が知つて居られますからな。なに心配する事はありませんよ。私たちが貴方をまた直して上げますよ。あなたは烏渡した錯覺を自分で悪い方に考へてゐるのですよ。」

私はもう直つたやうな氣がした。「貴方はいつも親切にして下さいますね、先生。」と私は言つた。

「併し、もうこの上あなたに御心配をかける必要はないと思ひます。」

かうは言つたものゝ、わたしの心の中では、ヘザーレッグの治療などで、私のこゝろの重荷を輕くすることが出來るものかと思つてゐた。

かう考へて來ると、また私の心には、理不盡な幽靈に對して何となく反抗の出來ないやうな、賴りない、さびしい感じが起つて來た。この世の中には、自分のした事に對する罰として死の運命を宣告された私よりも、もつと不幸な人間が少しはゐるであらうから、さういふ人達と一緒ならばまだ氣が強いが、たつた一人でこんなに殘酷な運命の下にゐるのは餘りに無慈悲だと思つた。結局、あの人力

車と私だけが虚無の世界に於ける單一の存在物で、マンネリングやヘザーレッグや、その他わたしが知つてゐる總ての人間こそみんな幽靈であつて、空虛な影（幻）の人力車以外の大きな灰色の地獄それ自身（この世の人間ども）が私を苦しめてゐるのだといふやうな考へに變つて行つた。かうして苛苛しながら七日の間、いろ〳〵の事を考へながら輾轉反側してゐるうちに却つて私の肉體は日增しに丈夫になつて行つて、寢室の鏡に映してみても平常と變りがなく、再び元の人間らしくなつた。さうして實に不思議なことには、わたしの顏には過去の苦悶爭鬪の跡が消えてしまつた。成程、顏色は靑かつたが、不斷のやうに無表情な、平凡な顏になつた。實際を言ふと、私はある永久の變化――私の生命をだん〳〵に蠶食して行くところの發作から來る肉體的變化を豫期してゐたが、全然そんな變化は見えなかつた。

五月十五日の午前十一時に私はヘザーレッグの家を立去つて、獨身者の本能から直ぐに倶樂部へ行つた。そこではヘザーレッグが言つたやうに、誰も彼もわたしの話を知つてゐて、妙に取つて付けたやうに氣味の惡いほど親切で、鄭重にしてくれるのに氣が付いたので、壽命のあらん限りは自分の仲間の中にゐようと肚をきめた。しかしその仲間の一人になり切つてしまふことは出來なかつた。從つて私には、倶樂部の下の蔭で何の苦もなささうに笑つてゐられる苦力等が憎らしいほどに羨ましかつた。私は倶樂部で晝飯を食つて、四時頃にぶらりと外へ出ると、キッティに逢へはしないかといふ漠然とした希望をいだきながら木蔭の路へ降りて行つた。音樂堂の近〳〵で、黑と白の法被がわたしの

傍に來るなと思ふ間もなく、ウェッシントン夫人のいつもの歎願の聲が耳のそばに聞えた。實は外へ出た時から已に豫期してゐたので、寧ろその出現が遲いのに驚いたくらゐであつた。それから幻の人力車と私とはショタ・シムラの道に沿つて、渚れ摺れに肩を竝べながら默つて歩いて行つた。物品陳列館の近所で、キッティが一人の男と馬を竝べながら私たちを追ひ越した。彼女はまるで路傍の犬でも見るやうな眼で、私を見かへつて行つた。恰度夕方ではあり、雨さへ降つてゐたので、私が判らなかつたといふかも知れないが、彼女は人を追ひ越してゆくに挨拶さへもしなかつた。

斯うしてキッティとその連れの男と、私とわたしの無形の愛の光とは、二組になつてジャッコの周圍を徐行した。道は雨水で川のやうになつてゐる。松からは樋のやうに下の岩へ雨滴を落してゐる。空氣は强い吹き降りの雨に滿ちてゐる。「おれは賜暇を得てシムラに來てゐるジャック・バンセイだ。――シムラに來てゐるのだ。來る日も、來る日も、平凡なシムラ――。だが、俺はこゝを忘れてはならないぞ――忘れてはならないぞ。」と、わたしは二三度、殆ど大きい聲を立てんばかりに獨り言を言つてゐた。それから倶樂部で耳にした今日の出來事の二三、たとへば何某が所有の馬の値は幾らであつたと言ふやうな事――私のよく知つてゐる印度居住の英國人の實生活に關係ある事どもを追想してみようとした。また私は自分が氣が違つてゐないといふことをしつかりと頭に入れようと思つて出來るだけ早く掛算の表をさへ繰返してみた。その結果はわたしに非常な滿足を齎らした。そのために暫くの間は、ウェッシントン夫人の言葉に耳を傾けるのを中止しなければならなかつた。

もう一度、私は疲れた足を引き摺りながら尼寺の坂道を登つて、平坦な道へ出た。そこからキッテイと例の男とは馬を緩やかに走らせたので、私はウェッシントン夫人と二人ぎりになつた。

「アグネス。」と私は言つた。「幌をうしろへ落したらどうです。さうして、かうやつて始終人力車に乘つて私に附き纏ふのは、一體どういふ譯だか話して下さい。」

幌は音もなく落ちて、わたしは死んで埋められた夫人と顏を突き合せた。彼女はわたしが生前に見た着物を着て、右の手にいつもの小さいハンカチーフを持ち、左の手にやはりいつもの名刺入れを持つてゐた。（ある婦人が八ケ月前に名刺入れを持つて死んだことがあつた。）さあ、かうなつて來ると、わたしは現在と過去との區別が附きかねたので、また少なくとも自分は氣が狂つてゐないといふことをたしかめるために、路ばたの石の欄干の上に兩手を置いて、掛算の表を繰返さなければならなかつた。

「アグネス。」とわたしは繰返した。「どうか私にその譯を話して下さい。」

ウェッシントン夫人は前屈みになると、いつもの癖で、妙に早く首を傾けてから口を開いた。

若しもまだ、私の物語はあまりに氣違ひじみて諸君には信じられないと言ふ程でないと言ふのであつたら、私は今諸君に感謝しなければならない。誰も――私はキッテイのために自分の行爲の或種の繼明としてこれを書いてゐるのであるが、そのキッテイでさへも――私を信じてくれないであらうといふ事を知つてゐるけれども、兎に角にわたしは自分の物を進めて行かう。ウェッシントン夫人は話し出した。さうして、私は彼女と一緒にサンジョリイの道から印度總督邸の下の曲角まで、まるで生きてゐる婦人の人力車と肩をならべて歩いてゐるやうにして、夢中に話しながら來てしまつた。すると、急に再度の發作が襲つて來たので、テニソンの詩に現れて來る王子のやうに、わたしは幽靈界をさまよつてゐるやうな氣になつた。

總督邸では園遊會を催してゐたので、私たち二人は歸途につく招待客の群集に袞き込まれてしまつた。わたしには彼等招待客がみな本物の幽靈に見えて來た。――而もウェッシントン夫人の人力車を遣り過させる爲に、彼等は道を開いたではないか。この考へてもぞつとするやうな會見中に、私達が話も合つたことは、私として話すことは出來ないし、又敢て話したくもない。ヘザーレッグはこれについて、たゞ鳥渡笑つてから、私が胃と腦と眼とから來る幻想に執着してるのだと批評してゐた。あの人力車の幻影は物凄いと共に、非常に愛すべき（それは鳥渡解釋しにくいが）一つの存在であつた。曾ては私自身が殘酷な目に逢せた上に、捨殺しにしてしまつたウェッシントン夫人を、私はこの世に生きてゐる間にもう一度口說きたくなつて來たが、それは出來ない事であらうか。

歸りがけに私はキッテイにまた逢つた。――彼女もまた幽靈の仲間の一人であつた。

若しもこの順序で、次の四日間の出來事をすべて記述しなければならないとしたなら、私のこの物語はいつまで行つても終るまい。諸君も倦きて來るであらう。併し兎に角に、朝といはず、夕といはず、わたしと人力車の幽靈とはいつも一緒にシムラをさまよひ歩いた。私のゆく所には、黑と白の法

彼が附き纏ひ、ホテルの往復にも私の道連れとなり、劇場へ行けば客を呼んでゐる苦力の群のあひだに彼等が雑つてゐるのである。夜更けまで骨牌をした後に、倶楽部の露臺へ出ると、彼等にはそこにもゐる。誕生日の舞踏會に招かれてゆけば、彼等は根氣よく私の出て來るのを待つてゐるばかりでなく、私が誰かを訪問にゆく時には白晝にも現れた。さうしてたゞその人力車には影がないといふ以外は、總ての點に於いて木と鐵で出來てゐる一般の人力車と些とも變りがなかつた。一度ならず私は、ある乘馬の下手な友達が、その人力車を馬で踏み越えてゆくのを呼止めようとして、はつと氣が付いて口をつぐんだ事があつた。又、私は木蔭の路をウェッシントン夫人と話しながら歩いてゐたので、往來の人達は呆氣に取られてゐたことも度々あつた。

わたしが床を離れて外出が出來るやうになつた一週間前に、ヘザーレッグの發作説が發狂説に變つてゐたのを知つた。いづれにもせよ、私は自分の生活樣式を變へなかつた。私は人を訪問した。馬に乘つた。以前と同じやうな心持で食事をした私は今まで曾て感知したことのなかつた幻の社會と言ふものに對して渇望してゐたので、實生活の間にそれを漁ると同時に、わたしの幽靈の伴侶に長いあひだ逢へないでゐるといふことに、漠然とした不幸を感じた。五月十五日より今日に至るまでの、かうした私の變幻自在の心持を書くといふことは殆ど不可能であらう。

人力車の出現は、わたしの心を恐怖と、盲目的畏敬と、漠然たる喜悦と、それから極度の絶望とで交るがゝに壓めた。私はシムラを去るに忍びなかつた。而も私はシムラにゐれば、自分が結局殺されると言ふことを百も承知してゐた。その上に、一日一日と少しづつ弱つて死んでゆくのが私の運命であることも知つてゐた。たゞ私は、出來るだけ靜かに懺悔をしたいと言ふのが、たゞ一つの望みであつた。それから私は人力車の幽靈を求めると共に、キッティがわたしの後繼者——もつと嚴密にいへば、わたしの後繼者等——と喋々喃々と語らつてゐる復讐的の姿を、愉快な心持で一目見たいと思つて探し求めた。愉快な心持と言つたのは、わたしが彼女の生活から放れてしまつてゐるからである。晝の間私はウェッシントン夫人と一緒に喜んで歩きまはつて、夜になると私は神にむかつて、ウェッシントン夫人と同じやうな世界に歸らせてくれるやうに哀願した。さうして、これらの稚々の感情の上に、この世の中の有象無象が一つの憐れな魂を墓に追ひやるために、こんなにもと騒いでゐるのかと言ふ、ぼんやりした弱い驚きの感じが横つてゐる。

八月二十七日——ヘザーレッグは實に根氣よく私を看病してゐた。さうして、昨日わたしに向つて、病氣賜暇願ひを送らなければならないと言つた。そんなものは、幻の仲間を遁れるための願書ではないか。五人の幽靈と幻の人力車を去るために英國へ歸らせてくれと、政府の慈悲を懇願しろと言ふのか。ヘザーレッグの提議はわたしを殆どヒステリカルに笑はせてしまつた。私は靜かにこのシムラで死を待つてゐることを彼に告げた。實際もう私の餘命は幾許もないのである。どうか私が到底言葉では言ひ表はせない程、この世の中に再生するのを恐れてゐるといふ事と、わたしは自分が死

ぬときの態度に就いて、數限りなく考へては煩悶してゐると言ふことを信じて戴きたい。

私は英國の紳士が死ぬ時のやうに、寢床の上に端然として死ぬであらうか。或は又、最後にもう一度木蔭の路を歩いてゐるうちに、私の靈魂がわたしから放れて、あの幽靈の傍で永遠に歸るのであらうか。さうしてあの世へ行つて、わたしが遠い昔に失つてしまつた純潔さを取戻すか。あるひは又、ウェッシントン夫人に出逢つて、忌々ながら彼女の傍で永遠に暮すのであらうか。時と言ふものが終るまで、私たちの生活の舞臺の上を我々二人が徘徊するのであらうか。

私の臨終の日が近づくに從つて、墓のあなたから來る幽靈に對して、生ける肉體の感ずる心中の恐怖はだん〳〵に力强くなつて來る。諸君の生命の半分を終らないうちに、死の谷底へ急轉直下するのは恐ろしいことである。更に何千倍も恐ろしいのは、諸君のまん中にあつて、さうした死を待つてゐることである。何となれば、私には總ての恐怖をみな想像することが出來るからである。少なくとも私の幻想の點に就いてだけでも、わたしを憐れんで戴きたい。——私は諸君が今までに私の書いたことを少しも信じないであらう事を知つてゐるから。——今や一人の男が暗黑の力のために死に垂んとしてゐる。あゝ、その男は私である。

公平に又ウェッシントン夫人をも憐れんで戴きたい。彼女は實際永遠に男の爲に殺されたのである。さうして、彼女を殺したものは私である。わたしの罰の分前は今や自分自身の上にかゝつてゐる。

——終——

上床

（クラウフォルド）

一

誰かが葉卷を註文した時分には、もう長いあひだ私達は話し合つてゐたので、おたがひに倦きかゝつてゐた。煙草の烟は厚い窓掛に喰ひ入つて、重くなつた頭にはアルコールが廻つてゐた。もし誰かが睡氣をさまさせるやうな事をしない限りは、自然の結果として、來客の我々は急いで自分達の部屋へ歸つて、おそらく寢てしまつたに相違なかつた。

誰もがあつと言はせるやうな事を言はないのは、誰もあつと言はせるやうな話の種を持つてゐないと言ふことになる。そのうちに一座のジョンスが最近ヨークシェヤーに於ける銃獵の冒險談をはじめると、今度はボストンのトンプキンス氏が、人間の勞働供給の原則を細目にわたつて說明し始めた。それによると、アッチソンやトペカやサンタ・フェ方面に敷設された鐵道が、その未開の地方を開拓して州の勢力を延長したばかりでなく、又その工事を會社に引渡す以前から、その地方の人々に家畜類を輸送して飢餓を未前に防いだばかりでなく、長年のあひだ切符を買つた乘客に對して、前述の鐵道會社が何等の危險なしに人命を運搬し得るものと妄信させたのも、一にこの人間の勞働の責任と用

心深き供給に因るものであると言ふのであつた。すると、今度はトムボラ氏が、彼の祖國の伊太利統一は恰も偉大なるヨーロッパの造兵廠の精巧なる手によつて設計されて組み立てられた最新式の魚形水雷のやうなものであつて、その統一が完成された曉には、それが弱い人間の手によつて、當然爆發すべき無形の地、卽ち混沌たる政界の荒野に投げられなければならないと言ふことを我々に說得させようとしてゐたが、そんな論說はもう私達にはどうでも好かつた。

この上に詳しくこの會合の光景を描寫する必要はあるまい。要するに、わたし達の會話なるものは徒らに大聲叱呼してゐるが、プロミティウス（古代ギリシャの神話中の人物）であつたらば耳も假さずに自分の岩に孔を明けてゐるであらうし、タンタラス（同じく神話中の人）であつたら氣が遠くなつてしまふであらうし、またイキシイオン（ギリシャ傳說中の人）であつたら我々の話などを聽くくらゐならばオルレンドルフ氏のお說敎でも聞いてゐる方が優しだと思はざるを得ないくらゐに、實に退屈至極のものであつた。それにも拘らず、わたし達は數時間もテーブルの前に腰をおろして、疲れ切つたのを我慢して貧乏搖ぎ一つする者もなかつた。

誰かが葉卷を註文したので、わたし達はその人の方を見かへつた。その人はブリスバーンと言つて常に人々の注目の的となつてゐるほどに優れた才能を持つてゐる三十五六の男盛りであつた。彼の風采は、割合に脊丈が高いと言ふぐらゐのことで、別に普通の人間の眼にはどこと言つて變つた所は見えなかつた。その脊丈も六フィートより少し高いぐらゐで、肩幅がかなり廣いぐらゐで、大して强さ

うにも見えなかつたが、注意してみると確かに筋肉逞しく、その小さな頭は頑丈な骨組みの頸によつて支へられ、その男性的な手は胡桃割を持たずとも胡桃を割ることが出來さうであり、横から見ると誰でもその袖幅が馬鹿に廣く出來てゐるのや、竝外れて胸の厚いのに氣が付かざるを得ないのであつた。所謂、彼はちよつと見ただけでは別に强さうでなくして、その實は見掛けよりも遙かに强いといふ種類の男であつた。その顏立については餘り言ふ必要もないが、兎にかく前にも言つたやうに、彼の頭は小さくて、髮は薄く、靑い眼をして、大きな鼻の下にちよびりと口髭を生やした純然たるユダヤ系の風貌であつた。どの人もブリスバーンを知つてゐるので、彼が葉卷を取寄せた時には、みな彼の方を見た。

「不思議な事もあればあるものさ。」と、ブリスバーンは口を開いた。

どの人もみな話を止めてしまつた。彼の聲はそんなに大きくはなかつたが、お座なりの會話を見拔いて、鋭利なナイフでそれを斷ち切るやうな、獨特の聲音であつた。一座は耳を傾けた。ブリスバーンは自分が一座の注目の的となつてゐるのを心得てゐながら、平然と葉卷を燻らせて言ひつゞけた。

「まつたく不思議な話といふのは、幽靈の話なんだがね。一體人間といふ奴は、誰か幽靈を見た者があるかどうかと、いつでも聞きたがるものだが、僕はその幽靈を見たね。」

「馬鹿な。」

「君がかい。」

「まさか本氣ぢやあるまいね、ブリスバーン君。」
「旬も知識階級の男子として、そんな馬鹿な。」
かう言つたやうな言葉が同時にブリスバーンの話に浴びせかけられた。なんだ詰まらないと言つたやうな顏をして、一座の面々はみな葉卷を取寄せると、司厨夫のスタッブスがどこからとなしに現れて、アルコールなしのシャンパンの壜を持つて來たので、だれかゝつた一座が救はれた。ブリスバーンは物語をはじめた。
僕は長いあひだ船に乘つてゐるので、頻繁に大西洋を航海する時、僕は變な好みを持つやうになつた。尤も大抵の人間には各自の好みと言ふものはある。たとへて言へば、僕は曾て、自分の好みの特種の自動車が來るまで、ブロード・ウェイの酒場で四十五分も待つてゐた一人の男を見たことがあつた。まあ、僕に言はせると、酒場の主人などといふ者はさうした人間の選り好みの癖のお蔭で、三分の一は生活が立つて行けるのであらう。で、僕にも大西洋を航海しなければならない時には、或る極まつた汽船を期待する癖がある。それは確かに偏奇つた癖かも知れないが、兎に角、僕には、たつた一遍、一生涯忘れられない程の愉快な航海があつた。
僕は今でもよくそれを覺えてゐる。それは七月のある暑い朝であつた。檢疫所から來る一艘の汽船を待つてゐる間、稅關吏達はふら〳〵と波止場を歩いてゐたが、その姿は特に靄でぼんやりしてゐていかにも思慮のありさうに見えた。僕には荷物が殆んど無かつた、と言ふよりは、全く無かつたので、

乘船客や運搬人や眞鍮ボタンの青い上衣を着た客引たちの人波に混つて、その船の着くのを待つてゐた。汽船が着くと、例の客引達は逸早く蕈のやうにデッキに現れて、一人一人の客に世話を燒いてゐた。僕はある興味を以て、かうした人々の自發的行動を屢々注意して見てゐたのであつた。やがて水先案内が「出帆！」と叫ぶと、運搬夫や、例の眞鍮ボタンに青い上衣の連中は、まるでダビイ・ジョンスが事實上監督してゐる格納庫へ引渡されてしまつたやうに、僅かの間にデッキや舷門から姿を消したが、いざ出帆の間際になると、綺麗に鬚を剃つて、青い上衣を着て、祝儀を貰ふのに齷齪してゐる客引達は再びそこへ現れた。僕も急いで乘船した。
カムチャッカと言ふのは僕の好きな船の一つであつた。僕が敢て「あつた」と言ふ言葉を使ふのはもう今ではその船を大して好まないのみならず、實は二度と再びその船で航海したいなどといふ愛着はさら〳〵無いからである。まあ、默つて聞いておいでなさい。そのカムチャッカといふ船は船尾は馬鹿に綺麗だが、船首の方はなるたけ船を水に浸させまいと言ふ所から恐ろしく切つ立つてゐて、下の寢臺は大部分が一段になつてゐた。その他にもこの船にはなか〳〵優れてゐる點は澤山あるが、もう僕はその船で二度と航海しようとは思はない。話が少し脇道へ外れたが、兎に角、そのカムチャッカ號に乘船して、僕はその給仕に敬意を表した。その赤い鼻と眞赤な頰鬚がどつちとも氣に入つたのである。
「下の寢臺の百五號だ。」と、大西洋を航海することは、下町のデルモニコ酒場でウイスキーやカク

テルの話をするくらゐにしか考へてゐない人間達特有の事務的の口調で、僕は言つた。給仕は僕の旅行鞄と外套と、それから毛布を受取つた。僕はそのときの彼の顏の表情を忘れろと言つても恐らく忘れられないであらう。無論、かれは顏色を變へたのではない。奇蹟ですら自然の常軌を變へることは出來ないと、著名な神學者連も保證してゐるのであるから、僕も彼が顏色を眞青にしたのではないと言ふのに敢て躊躇しないが、しかしその表情から見て、彼が危く涙を流しさうにしたのか、噴嚏をしそこなつたのか、それとも僕の旅行鞄を取落さうとしたのか、なにしろはつとしたことだけは事實であつた。その旅行鞄には僕の古い友達のスニッギンソン・バン・ビッキンスから餞別に貰つた上等のシェリー酒が二壜這入つてゐたので、僕もいさゝか冷りとしたが、給仕は涙も流さず、噴嚏もせず、旅行鞄を取落さなかつた。

「では、ど……。」と、かう低い聲で言つて、彼は僕を案内して、地獄（船の下部）へ導いて行つた時この給仕は少し醉つてゐるなと心の中で思つたが、僕は別になんにも言はずに、その後から附いて行つた。百五號の寢臺は左舷のずつと後の方にあつたが、この寢臺については別に取立てゝ言ふ程の事もなかつた。カムチャッカ號の上部にある寢臺の大部分は皆さうであつたが、此下の寢臺も二段になつてゐた。寢臺はたつぷりしてゐて、北亞米利加インディアンの心に奢侈の念を起させるやうなあり來りの洗面裝置があり、齒ブラシよりも大型の雨傘が樂々かゝりさうな、役にも立たない褐色の木の棚が吊つてあつた。餘分な掛蒲團の上には、近代の大諧謔家が冷菁麥菓子と比較したがるやうな

毛布が一緒に疊んであつた。但し手拭掛けがないのには全く閉口した。硝子壜には透明な水が一杯に這入つてゐたが、やゝ褐色を帶びてゐて、そんなに不快なほどに臭くはないが、やゝもすれば船暈を感じさせる機械の油の匂ひを聯想させるやうな微かな臭味が鼻を打つた。僕の寢臺には陰氣な色のカアテンが半分閉まつてゐて、靄で燻しをかけられたやうな七月の日光は、その侘しい小さな部屋へ淡い光を投げかけてゐた。實際その寢臺はどうも蟲が好かなかつた。

給仕は僕の手提げ鞄を下に置くと、いかにも逃げ出したいやうな顏をして、僕を見た。おそらく他の乘客達のところへ行つて、祝儀にありつかうと言ふのであらう。そこで、僕もかうした職務の人達を手懷けて置く方が便利であると思つて、すぐさま彼に小錢をやつた。

「どうぞ行き屆きませんところは、御遠慮なく仰しやつて下さい。」と、彼はその小錢をポケットに入れながら言つた。而もその聲の中には僕を吃驚させるやうな可怪な響きがあつた。多分僕がやつた祝儀が足りなかつたので、不滿足であつたのであらうが、僕としては、はつきりと心の不平をあらはして貰つた方が、默つてゐられるよりも、優しだと思つた。但しそれが祝儀の不平でないことが後に判つたので、僕は彼を見損なつた譯であつた。

その日一日は別に變つた事もなかつた。カムチャッカ號は定刻に出帆した。海路は靜穩、天氣は蒸暑かつたが、船が動いてゐてので爽かな風がそよ〳〵と吹いてゐた。總ての乘客は船へ乘込んだ第一日がいかに樂しいものであるかを知つてゐるので、甲板を徐かに歩いたり、お互ひにぢろ〳〵見交し

たり、又は同船してゐることを知らずにゐた知人に偶然出逢つたりしてゐた。最初の二回ほど食堂へ出て見ないうちは、この船の食事が良いか惡いか、或は普通か、見當が付かない。船が炎の嶋を出ないうちは、天候もまだ判らない。最初は食卓も一杯であつたが、そのうちに人が減つて來た。青い顏をした人達が自分の席から飛び立つてあわたゞしく入口の方へ出て行つてしまふので、船に馴れた連中はすつかりいゝ心持になつて、うんと腹帶をゆるめて獻立表を初めからしまひまで平げるのである。

大西洋を一度や二度航海するのとは違つて、我々のやうに度重なると、航海などは別に珍らしくないことになる。鯨や氷山は常に興味の對照物であるが、所詮鯨は鯨であり、適に目と鼻のさきへ氷山を見ると言ふまでの事である。たゞ大洋の汽船で航海してゐるあひだに一番樂しい瞬間といへば、先づ甲板を運動した擧句に最後の一廻りをしてゐる時と、最後の一服を燻らしてゐる時と、それから適度に體を疲れさせて、子供のやうな澄んだ心持で自由に自分の部屋へ這入るときの感じである。

船に乘つた最初の晩、僕は持に懶かつたので、不斷よりは、ずつと早く寢ようと思つて、百五號室へ這入ると、自分の外にも一人の旅客があるらしいので、少しく意外に思つた。僕が置いたのとは反對側の隅に、僕のと全く同じ旅行鞄が置いてあつて、上段の寢臺——上床（アッパーバース）——にはステッキや蝙蝠傘と一緒に、毛布がきちんと畳んであつた。僕はたつた一人でゐたかつたので聊か失望したが、一體僕の同室の人間は何者だらうといふ好奇心から、彼が這入つて來たらその顏を見てやらうと待つて

ゐた。

僕が寢床へ潛り込んでから、やゝ暫くしてその男は這入つて來た。彼は、僕の見ることの出來た範圍では、非常に脊丈の高い、恐ろしく痩せた、さうして甚く青い顏をした男で、茶色の髮や頰髯を生やして、灰色の眼はどんよりと曇つてゐた。僕は、どうも怪しい風體の人間だなと思つた。諸君は、ウォール・ストリートあたりを、別に何をしてゐると言ふ事もなしにぶらぶらしてゐる種類の人間をきつと見たに相違ない。又はキャフェー・アングレへ屢々あらはれて、たつた一人でシャンパンを飲んでゐたり、それから競爭場などで別に見物するでも無しにぶらぶらしてゐるやうな男——彼はさうした種類の人間であつた。彼はやゝお洒落で、而もどことなく風變りなところがあつた。かう言つた風の人間は大抵どの航路の汽船にも二三人はゐるものである。そこで、僕は彼と近付きになりたくないものだと思つたので、彼と顏を合さないやうにする爲に、彼の日常の習慣を研究して置かうと考へながら眠つてしまつた。その以來、若し彼が早く起きれば、僕は彼よりも遲く起き、若し彼がいつまでも寢なければ、僕はかれよりも先へ寢床へ潛り込んでしまふやうにしてゐた。無論、僕は彼が如何なる人物であるかを知らうとはしなかつた。若し一度かう言ふ種類の男の素性を知つたが最後、その男は絶えず我々の頭のなかへ現れて來るものである。併し百五室における第一夜以來、二度とその氣の毒な男の顏を見なかつたので、僕は彼について面倒な穿鑿をせずに濟んだ。

鼾をかいて眠つてゐた僕は、突然に大きい物音で目をさまされた。その物音を調べようとして、同

室の男は僕の頭の上の寢臺から一足飛びに飛び降りた。僕は彼が不器用な手附きで扉の掛金や貫の木を探つてゐるなと思つてゐるうちに、忽ちその扉がばたりと開くと、廊下を全速力で走つてゆく彼の跫音がきこえた。扉は開いたまゝになつてゐた。船はすこし搖れて來たので、僕は彼がつまづいて倒れる音が聞えて來るだらうと耳を澄ましてゐたが、彼は一生懸命に走りつゞけてゞもゐるやうに何處へか走つて行つてしまつた。船が搖れる毎にばたんばたんと扉が煽られるのが、氣になつて堪らなかつた。僕は寢臺から出て、扉を閉めて、闇のなかを手搜りで寢臺へ歸ると、再び熟睡してしまつて、何時間寢てゐたのか自分にもわからなかつた。

二

眼をさました時は、まだ眞暗であつた。僕は變に不愉快な惡寒がしたので、これは空氣が濕つてゐるせゐであらうと思つた。諸君は海水で濕氣てゐる船室の一種特別な匂ひを知つてゐるであらう。僕は出來るだけ蒲團をかけて、明日あの男に大苦情を言つてやる時のうまい言葉をあれやこれやと考へながら、又うと〳〵と眠つてしまつた。そのうちに、僕の頭の上の寢臺で同室の男が寢返りを打つてゐる音がきこえた。多分彼は僕が眠つてゐる間に歸つて來たのであらう。やがて彼がむゝうと一聲唸つたやうな氣がしたので、扨は船暈だなと僕は思つた。若しさうであれば、下にゐる者は堪らない。そんなことを考へながらも、僕は又うと〳〵と夜明けまで眠つた。

船は昨夜よりも餘ほど搖れて來た。さうして、舷窓から這入つて來る薄暗い光は、船の搖れ方によつて、その窓硝子が海の方へ向いたり、空の方へ向いたりする度毎に色が變つてゐた。七月と言ふのに、馬鹿に寒かつたので、僕は頭を向けて舷窓の方をみると、驚いたことには、窓は鉤が外れて明いてゐるではないか、僕は上の寢臺の男に聞えよがしに惡口を言つてから、起き上つて窓を閉めた。それからまた寢床へ歸るときに、僕は上の寢臺に一瞥をくれると、そのカアテンはぴつたりと閉まつてゐて、同室の男も僕と同樣に寒さを感じてゐたらしかつた。すると、今まで寒さを感じなかつた僕はよほど熟睡してゐたのだなと思つた。昨夜僕を惱ましたやうな、變な濕氣の匂ひはしてゐなかつたが船室の中はやはり不愉快であつた。同室の男はまだ眠つてゐるので、丁度彼と顏を合さずに濟ませるには好い機會であつたと思つてすぐに着物を着かへて、甲板へ出ると、空は曇つて溫かく、海の上からは油のやうな匂ひが漂つて來た。僕が甲板へ出たのは七時であつた。いや、或はもう少し遲かつたかも知れない。そこで朝の空氣をひとりで吸つてゐた船醫に出會つた。東部アイルランド生まれの彼は、黑い髮と眼を持つた、若い大膽さうな偉丈夫で、そのくせ妙に人を惹き付けるやうな暢氣な、健康さうな顏をしてゐた。

「やあ、い〳〵お天氣ですな。」と、僕は口を切つた。

「やあ。い〳〵お天氣でもあり、い〳〵お天氣でもなし、なんだか私には朝のやうな氣がしませんな。」

船醫は待つてゐましたと言ふやうな顏をして、僕を見ながら言つた。

「なる程、さう言へばあんまり好いお天氣でもありませんな。」と、僕も相槌を打つた。
「かう言ふのを、わたしは微臭い天氣と言つてゐますがね。」と、船醫は得意さうに言つた。
「時に、ゆうべは馬鹿に寒かつたやうでしたね。尤も、あんまり寒いので方々見まはしたら、船窓が明いてゐました。寢床へ這入る時には、ちつとも氣が付かなかつたのですが、お蔭で部屋が濕氣てしまひました。」と、僕は言つた。
「濕氣てゐましたか。あなたの部屋は何號です。」
「百五號です。」
すると、僕の方が寧ろ驚かされた程に、船醫はびつくりして僕を見つめた。
「どうしたんですか。」と、僕はおだやかに訊いた。
「いや、なんでもありません。たゞ最近三回ほどの航海のあひだに、あの部屋ではみなさんから苦情が出たものですから……。」と、船醫は答へた。
「わたしも苦情を言ひますね。どうもあの部屋は空氣の流通が不完全ですよ。あんな所へ入れるなんて、まつたく酷過ぎますな。」
「實際です。私にはあの部屋には何かあるやうに思はれますがね……。いや、お客樣を怖がらせるのは私の職務ではなかつた。」
「いや、あなたは私を怖がらせるなどと御心配なさらなくても好うございますよ。なに、少しぐらゐの

濕氣は我慢しますよ。若し風邪でも引いたら、あなたの御厄介になりますから。」
かう言ひながら、僕は船醫に葉卷をすゝめた。彼はそれを手にすると、よほどの愛煙家とみえて、何處の葉卷かを鑑定するやうに眺めてゐた。
「濕氣などは問題ではありません。兎に角、あなたのお體に別條ないと言ふことは確かですからな。同室の方がおありですか。」
「えゝ。一人ゐるのです。その先生と來たら、夜なかに戸締りを外して、扉を明け放して置くといふ厄介者なのですからね。」
船醫は再び僕の顏をしげ〳〵と見てゐたが、やがて葉卷を口に啣へた。その顏はなんとなく物思ひに沈んでゐるらしく見えた。
「で、その人は歸つて來ましたか？」
「わたしは眠つてゐましたが、眼をさました時に、先生が寢返りを打つ音を聞きました。それから私は寒くなつたので、舷窓を閉めてからまた寢てしまひましたが、今朝見ますと、その舷窓は明いてゐるぢやありませんか……」
船醫は靜かに言つた。
「まあ、お聽きなさい。私はもうこの船の評判なぞは構つてゐられません。これから私のする事をあなたにお話し申して置きませう。あなたはどう言ふお方か些つとも知りませんが、私は相當に廣い部

屋をこゝの上に持つてをりますから、あなたは私と一緒にそこで寢起きをなさい。」

かうした彼の申出でには、僕も少からず驚かされた。どうして船醫が急に僕の體のことを思つて呉れるやうになつたのか、何分想像が付かなかつた。何にしても、この船について彼が話した時の態度はどうも變であつた。

「いろ〳〵と御親切に有難うございますが、もう船室も空氣を入れ替へて、濕氣も何もなくなつて呉ると思ひます。併しあなたなぜこの船の事なんか構はないと言はれるのですか。」と、私は訊いた。

「無論、わたし達は醫者といふ職業の上から言つても、迷信家でないことは、あなたも御承知下さるでせう。が、海と言ふものは人間を迷信家にしてしまふものです。私はあなたにまで迷信を懷かせたくはありませんし、又恐怖心を起させたくもありませんが、若しもあなたが私の忠告をお宜れ下さるなら、兎に角わたしの部屋へお出でなさい。」

船醫はまた次のやうに言葉を附け加へた。

「あなたが、あの百五號船室でお休みになつてゐると言ふことを聞いた以上、やがてあなたが海へ落ち込むのを見なければならないでせうから……。尤もこれはあなたばかりではありません。」

「それはどうも……。一體どうした譯ですか。」僕は訊き返すと、船醫は沈みがちに答へた。

「最近、三航海のあひだに、あの船室で寢た人達はみな海のなかへ落ち込んでしまつたと言ふ事實があるのです。」

僕は告白するが、人間の智識と言ふものほど恐ろしく不愉快なものはない。僕はこのなまじひな智識があつたために、かれが僕を揶揄つてゐるのかどうかを見極めようと思つて、ぢつとその顏を穴の明くほど見てゐたが、船醫はいかにも眞面目な顏をしてゐるので、僕は彼がその申出でを心から感謝すると共に、自分はその特別な部屋に寢たものは誰でも海へ陷るといふ因緣の、除外例の一人になつて見る積りであると言ふことを船醫に語ると、彼は餘り反對もしなかつたが、その顏色は前よりも更に沈んでゐた。さうして、今度逢ふまでにもう一度、彼の申出でをよく考へた方がよからうと言ふことを、暗々裡に仄めかして言つた。それから暫くして、僕は船醫と一緒に朝飯を食ひにゆくと、食卓にはあまり船客が來てゐなかつたので、僕は我々と一緒に食事をしてゐる一二名の高級船員が妙に沈んだ顏をしてゐるのに氣が付いた。朝飯が濟んでから、僕は書物を取りに自分の部屋へゆくと、上の寢臺のカアテンはまだすつかり閉まつてゐて、なんの音もきこえない。同室の男はまだ寢てゐるらしかつた。

僕は部屋を出たときに、僕をさがしてゐる給仕に出逢つた。彼は船長が僕に逢ひたいと言ふことを囁くと、まるである事件から遁れたがつてゐるかのやうに、そゝくさと廊下を駈けて行つてしまつた。僕は船長室へゆくと、船長は待受けてゐた。

「やあ、どうも御足労をおかけ申して濟みませんでした。あなたにちとお願ひ致したい事がございますものでで……。」と、船長は口を切つた。

僕は自分に出來る事ならば、なんなりとも遠慮なく仰しやつて下さいと答へた。
「實は、あなたの同室の船客が行方不明になつてしまひました。その方はゆうべ宵のうちに船室に這入られたことまでは判つてゐるのですが、あなたはその方の態度について、何か不審な點をお氣付きになりませんでしたか。」
たつた三十分前に、船醫が言つた恐ろしい事件が實際問題となつて僕の耳に這入つた時、僕は思はずよろけさうになつた。
「あなたが仰しやるのは、わたしと同室の男が海へ落ち込んだといふ意味ではないのですか。」
僕は訊き返すと、船長は答へた。
「どうもさうらしいので、私も心配してをるのですが……。」
「實に不思議な事もあればあるものですな。」
「なぜですか。」と、今度は船長が訊き返した。
「では、いよ〳〵あの男で四人目ですな。」
かう言つてから、僕は船長の最初の質問の答へとして、船醫から聞いたとは言はずに、百五號船室に關して聞いた通りの物語を明細に報告すると、船長は僕が何も彼も知つてゐるのに吃驚してゐるらしかつた。それから、僕は昨夜起つた一部始終を彼にすつかり話して聞かせた。
「あなたが今仰しやつた事と、今までの三人のうち二人の投身者と同じ船室にゐた人がわたしに話された事と、殆ど全く一致してゐます。」と、船長は言つた。「前の投身者達も寢床から跳り出すと、すぐに廊下を走つて行きました。三人のうち二人が海中に落ち込むのを見張りの水夫が見つけたので、わたし達は船を停めて救助艇を下しましたが、どうしても發見されませんでした。若しほんたうに投身したとしても、ゆうべは誰もそれを見た者も聽いた者もなかつたのです。あの船室を受持の給仕は迷信の強い男だものですから、どうも何か惡いことが起りさうな氣がしたと言ふので、今朝あなたの同室の客をそつと見にゆくと、寢臺は空になつて、そこには其人の着物が、いかにもそこへ殘して置いたと言つた風に散らかつてゐたのです。此船中であなたの同室の人を知つてゐるのはあの給仕だけなので、彼は隈なく船中を搜しましたが、どうしてもその行くへがわからないのです。で、いかがでせう。この出來事を他の船客達に洩さないやうにお願ひいたしたいのですが……。私はこの船に惡い名を附けさせたくないばかりでなく、この投身者の噂ほど船客の頭を脅ろかすものはありませんからな。さうしてあなたには高級船員の部屋のうちのどれか一つに移つて戴きたいのですが……。無論わたしの部屋でも結構です。いかゞです、これならば萬更惡い條件ではないと思ひますが……。」
「非常に結構です。」と、僕も言つた。「いかにも承知致しました。が、私はあの部屋が獨占できるやうになつたのですから、寧ろそこにぢつとしてゐたいと思ふのです。若し給仕があの不幸な男の荷物を出してしまつてくれゝば、わたしは喜んで今の部屋に殘つてゐます。勿論、この事件については何事も洩しませんし、又、自分はあの同室の男の二の舞はしないと言ふことを、あなたにお約束出來

る積りでゐます。」

船長は僕のこの向う見ずな考へを諫止しようと努めたが、僕は高級船員の居候を斷つて、彼の一室を獨占することにした。それは馬鹿げた事であつたかどうかは知らないが、若もその時に船長の忠告を容れたならば、僕は平々凡々の航海をして、おそらく斯うして諸君に話すやうな奇怪な經驗は得られなかつたであらう。今まで百五號船室に寢た人間のあひだに起つた再三の投身事件の不快な一致點は船員等の頭に殘つてゐるだらうが、もうそんな一致點などは未來永劫無くして見せるぞと、僕は腹のなかで決心した。

いづれにしても、その事件はまだ解決しなかつた。僕は斷乎として、今までのそんな怪談に心を亂されまいと決心しながら、船長とこの問題について猶いろ〳〵の議論を闘はした。僕は、どうもあの部屋には何か惡い事があるらしいと言つた。その證據には、ゆうべは舷窓が明け放しになつてゐた。僕の同室の男は乘船して來た時から病人じみてはゐたけれども、彼が寢床へ這入つてからは更に氣違ひのやうになつてゐた。とは言ふものゝ、あの男は船中のどこかに隱れてゐて、いまに發見されるかも知れないが、兎に角、あの部屋の空氣を入れ替へて、舷窓を注意してしつかり閉めて置く必要があるから、若しも私にもう御用がなければ、部屋の通風や舷窓の締りがちやんと出來てゐるか何うかを見とゞけて來たいと、僕は船長に言つた。

「無論、あなたがさうしたいとお思ひなら、現在の所にお止まりなさるのはあなたの權利ですけれど

も……。私としては、あなたにあの部屋を出て戴いて、すつかり錠を下して、保管して置かせて貰ひたいのです。」と、船長は幾らかむつとしたやうに言つた。

僕は飽くまでも素志を曲げなかつた。さうして、僕の同室の男の失踪に關しては全然沈默を守るといふ約束をして、船長の部屋を辭した。僕の同室の男の知人はこの船中にゐなかつたので、彼が行方不明になつたからと言つて、歎く者は一人もなかつた。夕方になつて、僕は再び船醫に逢つた。船醫は僕に決心を翻したかどうかを聞いたので、僕はひるがへさないと答へた。

「では、あなたもやがて……。」と言ひながら、船醫は顏を暗くした。

三

その晩、僕等はトランプをして、遲くなつてから寢ようとした。今だから告白するが、實ら言ふと自分の部屋へ這入つた時はなんとなく忌な感動に胸を躍らせたのである。僕はいくら考へまいとしても、今頃はもう溺死して、二三哩もあとの方で長い波のうねりに搖られてゐる、あの脊丈の高い男のことが考へ出されてならなかつた。寢卷に着替へようとすると、眼の前に判然と彼の顏が浮き上がつて來たので、僕はもう彼が實際にゐないと言ふことを自分の心に納得させるために、上の寢臺のカーテンをあけ放して見ようかとさへ思つたくらゐであつた。なんとなく氣味が惡かつたので、僕も入口の扉の貫の木を外してしまつた。而も舷窓が不意に音を立てゝ明いたので、僕は思はずぎよつとし

たが、それは直ぐにまた閉まつた。あれだけ舷窓をしつかりと閉めるやうに言ひ付けて置いたのにと思ふと、僕は腹が立つて來て、急いで部屋着を引つかけて、受持の給仕のロバートを探しに飛び出した。今でも忘れないが、あまりに腹を立てゝゐたので、ロバートを見付けると暴々しく百五號室の戸口まで曳きずつて來て、明いてゐる舷窓の方へ突き飛ばしてやつた。

「毎晩のやうに舷窓を明け放しにして置くなんて、なんといふ間抜けな眞似をするのだ。横着野郎め。こゝを明け放しにして置くのは、船中の規定に反すると言ふことを、貴樣は知らないのか。若し船が傾いて水が流れ込んでみろ。十人かゝつても舷窓を閉める事が出來なくなるぐらゐの事は知つてゐるだらう。船に危險をあたへた事を船長に報告してやるぞ。惡者め。」

僕は極度に興奮してしまつた。ロバートは眞青になつて顫へてゐたが、やがて重い眞鍮の金具を把つて舷窓の丸い硝子戸を閉めかけた。

「なぜ、貴樣はおれに返事をしないのだ。」と、僕はまた呶鳴り付けた。

「どうぞ御勘辨なすつて下さい。お客樣。」と、ロバートは吃りながら言つたで。「すが、この舷窓を一晩中しめて置くことの出來るものは、この船に一人もゐないのです。まあ、あなたが自分で遣つて御覽なさい。わたくしはもう恐ろしくつて、この船に一刻も乘つてはゐられません。お客樣、わたくしが貴方でしたら、早速この部屋を引き拂つて、船醫の部屋へ行つて寢るとか、なんとか致しますがね。さあ、あなたが仰しやつた通りに閉めてあるか無いか、よく御覽なすつた上で、一寸でも動くかどうか手で動かして見てください。」

僕は舷窓の戸を動かしてみたが、なるほど固く閉まつてゐた。

「いかゞです。」と、ロバートは勝ち誇つたやうに言葉をつゞけた。「手前の一等給仕の折紙に賭けて、きつと半時間經たないうちにこの戸が又明いて、また閉まることを保證しますよ。恐ろしいことには、自然に閉まるんですからね。」

僕は大きい螺旋や鍵止めを調べてみた。

「よし。ロバート。若しも一晩中にこの戸があいたら、おれはお前に一磅の金貨をやらう。もう大丈夫だ。あつちへ行つても好い。」

「一磅の金貨ですつて……。それはどうも……。今からお禮を申上げて置きます。では、お休みなさい。快い休息と樂しい夢を御覽なさるやうに、お客樣。」

ロバートは、いかにもその部屋を去るのが嬉しさうな風をして、足早に出て行つた。無論、彼は愚にもつかない話をして僕を怖がらせて置いて、自分の怠慢を胡麻かさうとしたのだと、僕は思つてゐた。ところがその結果は、彼に一磅の金貨をせしめられた上に、極めて不愉快な一夜を送ることになつたのである。

僕は寢床へ這入つて、自分の毛布で體を包んでから、もの〻五分も經たないうちにロバートが來て、入口の傍の丸い鏡板のうしろに絶間なく輝いてゐたランプを消して行つた。僕は眠りに入らうと

して、闇のなかに靜かに横はつてゐたが、とても眠られさうもない事に氣が付いた。しかし彼を呶鳴りつけたので、ある程度まで氣が清々したせゐか、一緒の部屋にゐたあの溺死者のことを考へたときに感じたやうな不愉快な氣分はすつかり忘れてしまつた。それにも拘らず、僕はもう眠氣が去つたので、暫くは床のなかで眼をあけながら、時々に舷窓の方をながめてゐた。その舷窓は僕の寢てゐる所から見あげると、恰も闇のなかに吊るしてある弱い光のスープ皿のやうに見えた。

それから一時間ばかりはそこに横はつてゐたやうに思ふが、折角うと〳〵と眠りかけたところへ、冷たい風がさつと吹き込むと同時に、僕の顏の上に海水の飛沫がかゝつたので、はつと眼をさまして飛び起きると、船の動搖のために足を掬はれて、丁度舷窓の下にある長椅子の上に激しく叩き付けられた。併し僕はすぐに氣を取直して膝で起つた。その時、舷窓の戸が又一ぱいに明いて、また閉まつたではないか。

これらの事實はもう疑ふ餘地がない。僕が起き上がつた時には確かに眼をあけてゐたのである。又たとひ僕が夢現であつたとしても、こんなに忌といふほど叩き付けられて眼を醒まさないと言ふ法はない。その上、僕は肘と膝とによほどの怪我をしてゐるのであるから、僕自身がその事實を疑ふと假定しても、これ等の傷が明くる朝になつて十分に事實を證明すべきであつた。あんなにちやんと閉めて置いた筈の舷窓が自然に開閉する——それはあまりにも不可解であるので、初めてそれに氣が付いた時には、恐ろしいと言ふよりも寧ろたゞ吃驚してしまつたのを、僕は今でもあり〳〵と記憶してゐ

る。そこで、僕は直ぐにその硝子戸を閉めて、あらん限りの力を絞つてその鍵をかけた。

部屋は眞暗であつた。僕はロバートが僕の見てゐる前でその戸を閉めた時に、また半時間のうちに必ず明くと言つた言葉を想ひ起したので、その舷窓がどうして明いたのかを調べてみようと決心した。眞鍮の金具類は非常に頑丈に出來てゐるものであるから、ちつとの事では動く筈がないので、螺旋が動搖したぐらゐのことで締金が外れたとは僕にはどうも信じられなかつた。僕は舷窓の厚い硝子戸から、舷窓の下で泡立つてゐる白と灰色の海のうねりをつぢと覗いてゐた。なんでも十五分間ぐらゐもそこにさうして立つてゐたであらう。

突然うしろの寢臺の一つで、判然と何物か動いてゐる音がしたので、僕ははつとして後を振返つた。無論に暗闇のことで何一つ見えなかつたのであるが、僕は非常に微かな唸り聲を聞き付けたので、飛びかゝつて上の寢臺のカアテンをあけるが早いか、そこに誰か居るかどうかと手を突つ込んでみた。すると、確かに手應へがあつた。

今でも僕は、あの兩手を突つ込んだときの感じは、まるで濕つた穴藏へ手を突つ込んだやうに冷りとしたのを覺えてゐる。カアテンの後から、恐ろしく澱んだ海水の匂ひのする風が又さつと吹いて來た。その途端に、僕は何か男の腕のやうな、すべ〳〵とした、濡れて氷のやうに冷たい物を摑んだかと思ふと、その怪物は僕の方へ猛烈な勢ひで飛びかゝつて來た。ねば〳〵した、重い、濡れた泥の塊のやうな怪物は、超人のごとき力を有してゐたので、僕は部屋を横切つてたぢ〳〵となると、突

然に入口の扉がさつと開いて、その怪物は廊下へ飛び出した。

僕は恐怖心などを起す餘裕もなく、すぐに氣を取直して同じく部屋を飛び出して、無我夢中に彼を追撃したが、とても追ひ付くことは出來なかつた。十ヤードも先きに、確かに薄黑い影がぼんやりと灯の點つてゐる廊下に動いてゐるのを目撃したが、その早さは恰も闇夜に馬車のランプの光を受けた駿馬の影のやうであつた。その影は消えて、僕のからだは廊下の明窓の手欄に支へられてゐるのに氣がついた時、初めて僕はぞつとして髪が逆立つと同時に、冷汗が顏に流れるのを感じた。と言つて、僕は少しもそれを恥辱とは思はない。誰でも極度の恐怖に打たれゝば、冷汗や髪の逆立つぐらゐは當然ではないか。

それでも猶、僕は自分の感覺を疑つたので、努めて心を落着かせて、これは下らないことだとも思つた。藥味附きのパンを食つたのが腹に溜つてゐたので、惡い夢を見たのだらうと思ひながら、自分の部屋へ引返したが、體が痛むので、歩くのが容易でなかつた。部屋中はゆうべ僕が目をさました時と同じやうに澱んだ海水の匂ひで息が詰まりさうであつた。僕は勇氣を鼓して内へ這入ると、手探りで旅行鞄のなかから蠟燭の箱を取り出した。さうして、消燈された後に讀書したいと思ふときの用意に持つてゐる、汽車用の手燭に火をつけると、舷窓がまた明いてゐるので、僕は嘗て經驗したことも ない、また二度と經驗したくもない、うづくやうな、なんとも言へない恐怖に襲はれた。僕は手燭を持つて、多分海水でびしよ濡れになつてゐるだらうと思ひながら、上の寢臺を調べた。

併し僕は失望した。實のところ、何も彼も忌な夢であつた昨夜の事件以來、ロバートは寢床を整へる勇氣はあるまいと想像してゐたのであつたが、案に相違して寢床はきちんと整頓してあるばかりか、非常に黴臭くはあつたが、夜具はまるで骨のやうに乾いてゐた。僕は出來るだけ一ぱいにカアテンを引いて、細心の注意を拂つて隈なくその中をあらためると、寢床はまつたく乾いてゐた。しかも舷窓はまた明いてゐるのではないか。僕はなんと言ふことなしに恐怖の觀念に驅られながら舷窓を閉めて、鍵をかけて、その上に僕の頑丈なステッキを眞鍮の環の中へ通して、丈夫な金物が曲るほどにうんと捻ぢた。それからその手燭の鉤を、自分の寢臺の頭のところに垂れてゐる赤い天鵞絨へ引つかけて置いて、氣を鎭めるために寢床の上に坐つた。僕は一晩中かうして坐つてゐたが、氣を落着けるどころの騒ぎではなかつた。しかし舷窓は流石にもう開かなかつた。僕もまた神業でない限りは、もう二度と開く氣遣ひはないと信じてゐた。

やうくに夜が明けたので、僕はゆうべ起つた出來事を考へながら、ゆつくりと着物を着かへた。非常によい天氣であつたので、僕は甲板へ出て、いゝ心持で清らかな朝の日光に浴びながら、僕の部屋の腐つたやうな匂ひとはまるで違つた、薫りの高い青海原の微風を胸一ぱいに吸つた。僕は知らず識らずのうちに船尾の帆醫の部屋の方へ向つてゆくと、船醫は已に船尾の甲板に立つて、パイプをくはへながら前の日とまつたく同じやうに朝の空氣を吸つてゐた。

「お早う。」と、彼は逸早くかう言ふと、明らかに好奇心を以て僕の顏を見守つてゐた。

「先生、まつたくあなたの仰しやつた通り、確かにあの部屋には何かが憑いてゐますよ。」と、僕は言つた。

「どうです、決心をお變へになつたでせう。」と、船醫は寧ろ勝ち誇つたやうな顏をして僕に答へた。

「昨夜はひどい目にお逢ひでしたらう。一つ興奮飲料をさし上げませうか、素敵な奴を持つてゐますから。」

「いや、結構です。然し先づあなたに、昨夜起つたことをお話し申したいと思ふのですが……。」と、僕は大きい聲で言つた。

それから僕は出來るだけ詳しく昨夜の出來事の報告をはじめた。無論、僕はこの年になるまであんな恐ろしい思ひをした經驗はなかつたと言ふことをも附け加へるのを忘れなかつた。特に僕は舷窓に起つた現象を詳細に話した。實際、假に他の事は一つの幻影であつたとしても、この舷窓に起つた現象だけは誰が何と言つても、僕は明らかに證據立てることの出來る奇怪の事實であつた。現に僕は二度までも舷窓の戸を閉め、しかも二度目には自分のステッキで螺旋鍵を固く捻ぢて、眞鍮の金具を曲げてしまつたと言ふ點だけでも、僕は大いにこの不可思議を主張し得る積りであつた。

「あなたは、私が好んであなたのお話を疑ふとお思ひのやうですね。」と、船醫は僕があまりに舷窓のことを詳しく話すので微笑みながら言つた。「私はちつとも疑ひませんよ。あなたの携帶品を持つていらつしやい。二人で私の部屋を半分づつ使ひませう。」

「それよりもどうです。私の船室にお出でなすつて、二人で一晩を過してみませんか。さうして、この事件を根底まで探るのに、お力添へが願へませんでせうか。」

「そんな根底まで探らうなどとこゝろみると、あべこべに根底へ沈んでしまひますよ。」と、船醫は答へた。

「と言ふと……。」

「海の底です。わたしはこの船を下りようかと思つてゐるのです。實際、あんまり愉快ではありませんからな。」

「では、あなたはこの根底を探らうとする私に御援助下さらないのですか？」

「どうも私は御免ですな。」と、船醫は口早に言つた。「わたしは自分を冷靜にしてゐなければならない立場にあるもので、化物や怪物を弄り廻してはゐられませんよ。」

「あなたは化物の仕業だと本當に信じてゐられるのですか。」と、僕はやゝ輕蔑的な口吻で聞き糺した。かうは言つたものゝ、昨夜自分の心に起つたあの超自然的な恐怖觀念を僕は不圖思ひ出したのである。船醫は急に僕の方へ向き直つた。

「あなたはこれ等の出來事を化物の仕業でないといふ、確かな說明がお出來になりますか。」と、彼は反駁して來た。「無論、お出來にはなりますまい。よろしい。それだからあなたは確かな說明を得ようと言ふのだと仰しやるのでせう。併しあなたには得られますまい。その理由は簡單です。化物の

仕業といふ以外には説明の仕様がないからです。」

「あなたは科學者ではありませんか。そのあなたが私にこの出來事の解釋がお出來にならんと言ふのでか。」と、今度は僕が一矢を酬いた。

「いや、出來ます。」と、船醫は言葉に力を入れて言つた。「しかし他の解釋が出來るくらゐならば、私だつて何も化物の仕業だなどとは言ひません。」

僕はもう一晩でもあの百五號の船室にたつた一人でゐるのは嫌であつたが、それでもどうかしてこの心にかゝる事件の解決を付けようと決心した。おそらく世界中のどこを捜しても、あんな心持の惡い二晩を過した後、なほ唯つた一人であの部屋に寢ようと言ふ人が澤山ある筈はない。而も僕は自分と一緒に寢ずの番をしようと言ふ相棒を得られずとも、ひとりでそれを斷行しようと意を決したのである。船醫は明らかにかう言ふ實驗には興味がなささうであつた。彼は自分は醫者であるから、船中で起つた如何なる事件にでも、常に冷靜でなければならないと言つてゐた。彼は何事に依らず、判斷に迷ふと言ふことが出來ないのである。恐らくこの事件についても、彼の判斷は正しいかも知れないが、彼が何事にも冷靜でなければならないと言ふ職務上の警戒は、その性癖から生じたのではないかと、僕には思はれた。それから、僕が誰か他に力を假してくれる人はあるまいかと訊ねると、船醫はこの船の中に僕の探究に參加しようと言ふ人間は一人もないと答へたので、二言三言話した後に彼と別れた。

それから少し後に、僕は船長に逢つた。話をした上で、若し自分と一緒にあの部屋で寢ずの番をする勇者がなかつたらば、自分ひとりで決行する積りであるから、一夜中そこに灯を點けて置くことを許可して貰ひたいと申込むと、「まあ、お待ちなさい。」と、船長は言つた。

「私の考へを、あなたにお話し申しませう。實は私もあなたと一緒に寢ずの番をして、どう言ふことが起るかを調べてみようと思ふのです。私はきつと我々のあひだに何事かを發見するだらうと確信してゐます。ひよつとすると、この船中にこつそりと潜んでゐて、船客を嚇しておいて何かの物品を盜まうとする奴がゐないとも限りません。從つて、あの寢臺の構造のうちに、怪しい機關が仕掛けてあるかも知れませんからね。」

船長が僕と一緒に寢ずの番をするといふ申出でがなかつたらば、彼のいふ盜人一件などは無論一笑に附して仕舞つたのであるが、何しろ船長の申出が非常に嬉しかつたので、それでは船の大工を連れて行つて、部屋を調べさせませうと、僕は自分から言ひ出した。そこで、船長は直に大工を呼び寄せ、僕の部屋を隈なく調べるやうに命じて、僕等も共に百五號の船室へ行つた。僕等は上の寢臺の夜具をみんな引張り出して、どこかに取外しの出來るやうになつてゐる板か、或は明け立ての出來るやうな鏡板でもありはしまいかと、寢臺は勿論、家具類や床板を叩いてみたり、下の寢臺の金具を外したりして、もの部屋の中に調べない所はないといふまでに調査したが、結局なんの異狀もないので、又元の通りに直して置いた。僕等がその跡始末をして仕舞つた所へ、ロバートが戸口へ來て窺つた。

「いかゞです、何か見付かりましたか。」と、彼は強ひてにやく〳〵と笑ひながら言つた。
「ロバート、窓舷の一件ではお前の方が勝つたよ。」と、僕は彼に約束の金貨をあたへた。大工は默つて、手際よく僕の指圖通りに働いてゐたが、仕事が終ると斯う言つた。
「わつしはたゞの詰らねえ人間でござんすが、惡いことは申しませんから、貴方の荷物をすつかり外へお出しになつて、この船室の戸へ四吋釘を五六本たゝつ込んで、釘付けにしておしまひなさる方がよろしうござんすぜ。さうすれば、もうこの船室から惡い噂も立たなくなつてしまひます。わつしの知つてゐるだけでも、四度の航海のうちに、この部屋から四人も行方知れずになつてゐますからね。この部屋はお止めになつた方がようござんすよ。」
「いや、おれはもう一晩こゝにゐるよ。」と、僕は答へた。
「惡いことは言ひませんから、およしなさい。お止めなすつた方がようござんすよ。碌なことはありませんぜ。」と、大工は何度も繰返して言ひながら、道具を袋にしまつて、船室を出て行つた。
しかし僕は船長の助力を得たことを思ふと、大いに元氣が出て來たので、勿論この奇怪なる仕事を中止するなどとは、思ひも寄らないことであつた。僕はゆうべのやうに藥味附きの燒パンや火負を飲むの止め、定連のトランプの勝負にも加はらずに、只管に精神を鎭めることに努めた。それは船長の眼に自分といふものを立派に見せようと言ふ自負心があつたからである。
僕達の船長は、難艱辛苦のうちに叩き上げて得た勇氣と、膽力と、沈着とによつて、人々の信用の

的となつてゐる、粘り強い、磊落な船員の標本の一人であつた。彼は愚にも付かない話に乘るやうな男ではなかつた。したがつて、彼が自ら進んで僕の探究に參加したといふだけの事實でも、船長が僕の船室には普通の理論では解釋の出來ない、と言つて單に在來りの迷信と一笑に附してしまふ事の出來ない、容易ならぬ變化が憑いてゐるに違ひないと思つてゐる證據になつた。さうして彼は、ある程度までは自分の名聲と共に致命傷を負はされなければならないのを恐れる利己心と、船長として船客が海へ落ち込むのを放任して置くわけには行かないと言ふ義務的觀念とから、僕の探究に參加したのであつた。
その晩の十時頃に、僕は最後の葉卷を燻らしてゐるところへ船長が來て、甲板の暑い暗闇のなかで他の船客がぶらついてゐる場所から僕を引張り出した。
「ブリスバーンさん。これは容易ならぬ問題だけに、我々は失望しても、苦しい思ひをしてもいゝだけの覺悟をして置かなければなりませんぞ。あなたも御承知の通り、私はこの事件を笑殺してしまふことは出來ないのです。そこで萬一の場合のための書類にあなたの名署を願ひたいのです。それから、若し今晩何事も起らなかつたらば明晩、明晩も默目であつたらば明後日の晩と言ふ風に、毎晩つゞけて實行してみませう。あなたは支度はいゝのですか。」と、船長は言つた。
僕等は下へ降りて、部屋へ這入つた。僕等が降りてゆく途中、ロバートは廊下に立つて、例の齒を露出してにや〳〵笑ひながら、きつと何か恐ろしいことが起るのに馬鹿な人達だなと言つたやうな顏